

茨城県教育財団文化財調査報告第227集

中山遺跡  
福原打越塚群  
上加賀田宮後東遺跡

北関東自動車道（協和～友部）建設  
事業地内埋蔵文化財調査報告書VI

平成16年3月

日本道路公団  
財団法人 茨城県教育財団

なか やま い せき  
中 山 遺 跡  
ふく はら うち こし つか ぐん  
福 原 打 越 塚 群  
かみ か が た みや うしろ ひがし い せき  
上 加賀 田 宮 後 東 遺 跡

北関東自動車道（協和～友部）建設  
事業地内埋蔵文化財調査報告書VI

平成16年3月

日本道路公團  
財團法人 茨城県教育財團

## 序

茨城県は、県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るために、高規格幹線道路などの根幹的な県上基盤の整備とともに、広域的な交通ネットワークの整備を進めております。北関東自動車道建設事業も、その目的に添って計画されたものであります。

このたび、日本道路公団は、笠間市福原・上加賀田地区において、北関東自動車道（協和～友部）建設事業を決定いたしました。この事業地内には埋蔵文化財包蔵地である中山遺跡、福原打越塚群、上加賀田宮後東遺跡が所在します。

財團法人茨城県教育財団は、日本道路公団から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成15年7月から9月まで発掘調査を実施しました。

本書は、中山遺跡、福原打越塚群、上加賀田宮後東遺跡の調査成果を収録したものです。本書が、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である日本道路公団から多人なる御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、笠間市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成16年3月

財團法人 茨城県教育財団

理事長 斎藤 佳郎

## 例　　言

1 本書は、日本道路公団の委託により、財團法人茨城県教育財團が平成14年7月1日から9月30日まで発掘調査を実施した。茨城県笠間市大字福原字八幡台536番地の1ほかに所在する中山遺跡、同市大字福原字横倉3755番地の8ほかに所在する福原打越塚群、同市大字上加賀田宮後1902番地の1ほかに所在する上加賀田宮後東遺跡の発掘調査報告書である。

2 各遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

### 中山遺跡

調査 平成14年8月1日～平成14年8月31日

整理 平成16年2月1日～平成16年2月29日

### 福原打越塚群

調査 平成14年9月1日～平成14年9月30日

整理 平成16年3月1日～平成16年3月31日

### 上加賀田宮後東遺跡

調査 平成14年7月1日～平成14年9月30日

整理 平成15年9月1日～平成15年10月31日

3 各遺跡の発掘調査は、調査第二課長鈴木美治のもと、以下のものが担当した。

### 中山遺跡

調査第1班長 萩野谷 恵 平成14年8月1日～平成14年8月31日

主任調査員 横倉 要次 平成14年8月1日～平成14年8月31日

主任調査員 横川 雅彦 平成14年8月1日～平成14年8月31日

### 福原打越塚群

調査第1班長 萩野谷 恵 平成14年9月1日～平成14年9月30日

主任調査員 横倉 要次 平成14年9月1日～平成14年9月30日

主任調査員 横川 雅彦 平成14年9月1日～平成14年9月30日

### 上加賀田宮後東遺跡

調査第1班長 萩野谷 恵 平成14年7月1日～平成14年9月30日

主任調査員 川上 直豊 平成14年7月1日～平成14年9月30日

調査員 早川 駿司 平成14年7月1日～平成14年9月30日

4 各遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長鶴見貞雄のもと、以下のものが担当した。執筆分担は、以下の通りである。

横倉 例言、凡例、抄録、第3章、第4章

早川 第1章、第2章、第5章

5 上加賀田宮後東遺跡出土の墨書き器の判斷については、国立歴史民俗博物館の平川南副館長兼教授に、中山遺跡、上加賀田宮後東遺跡の石器・石製品の石材については、茨城県立自然博物館の飯田毅主任学芸員、小池涉副主任学芸員にそれぞれ御指導をいただいた。

## 凡　例

1 各遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を原点とし、中山遺跡はX=+38,400m, Y=+31,100mの交点を基準点(A 1 ai)とし、福原打越塚群はX=+37,840m, Y=+31,800mの交点を基準点(A 1 ai)とし、上加賀田宮後東遺跡はX=+37,880m, Y=+38,200mの交点を基準点(A 1 ai)とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、「A 1 区」、「B 2 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c…、西から東へ1, 2, 3…とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 ai 区」、「B 2 bi 区」のように呼称した。

2 抄録の北緯及び東経の欄には世界測地系に基づく緯度・経度を( )を付して併記した。

3 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

住居跡-S I 土坑-S K 井戸跡-S E 溝跡-S D 掘立住建物跡-S B

塚-T K 柱穴-P 撥乱-K

4 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

5 土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。

6 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

焼土・旧表土・釉・赤彩 □ 炉・火床面・鐵維土器断面・石器使用痕・被熱痕 □

窯部材・粘土・炭化材・黒色処理 □ 油煙・煤・炭化物 □ 硬化面 - - -

土器● 土製品○ 石器・石製品□ 金属製品△

7 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は中山遺跡が300分の1、福原打越塚群が200分の1、上加賀田宮後東遺跡が250分の1で掲載し、遺構は60分の1に縮尺して掲載したが、異なる場合もある。

(2) 遺物は3分の1に縮尺して掲載したが、異なる場合もある。

(3) 文字資料のうち、焼成前に線刻されたものを「ヘラ書き」、焼成後に線刻されたものを「刻書」と分けて記述した。

8 「主軸方向」は、炉または窯の中心と出入り口を結んだ軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とみなし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。(例 N-10°-E)

9 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。

(1) 計測値の単位は、cm及びgで示した。なお、現存値は( )、推定値は〔 〕を付して示した。

(2) 備考の欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号については通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号は同一とした。

10 遺構一覧表における計測値は、現存値は( )、推定値は〔 〕を付して示した。

# 抄 錄

ふりがな	なまえ	ふりがな	なまえ					
書 名	中山遺跡 福原打越塚群	上加賀田宮後東遺跡						
副 書 名	北関東自動車道(協和~友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻 次	VI							
シリーズ名	茨城県教育財團文化財調査報告							
シリーズ番号	第227集							
編 著 者 名	横倉 勇次 早川 駿司							
編 集 機 間	財團法人 茨城県教育財團							
所 在 地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2	TEL 029-225-6587						
発 行 機 間	財團法人 茨城県教育財團							
所 在 地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2	TEL 029-225-6587						
発 行 日	平成16(2004)年3月26日							
ふりがな 所 収 遺 跡	ふりがな 所 在 地	コード	北 緯	東 経	標 高	調査期間	調査面積	調査原因
中山遺跡	茨城県笠間市大字福原 字八幡台536番地の1 (ほか)	08216	36度 20分 125	140度 10分 36秒 26度 20分 47秒	87 ~ 91m	20020801 ~ 20020831	1,850.58m <sup>2</sup>	北関東自動車道(協和~友部)建設事業に伴う事前調査
福原打越塚群	茨城県笠間市大字福原 字横倉3755番地の8ほか	08216	36度 ~ 041	140度 11分 24秒 36度 20分 35秒	79 ~ 82m	20020901 ~ 20020930	577.0m <sup>2</sup>	
上加賀田宮後東遺跡	茨城県笠間市大字上加賀田宮後1902番地の1 (ほか)	08216	36度 158	138度 55分 26秒 36度 20分 37秒	38 ~ 40m	20020701 ~ 20020930	861.68m <sup>2</sup>	
所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
中山遺跡	狩獵場跡	縄文時代	略穴住居跡	1軒	縄文土器(深鉢)		縄文時代から古墳時代までの複合遺跡である。縄文時代早期から前期にかけての狩獵場跡と集落の一部が確認された。	
	聚落跡		陥し穴	6基	石器(石鏃、石匙、圓石、石皿)			
	その他	古 墓 時 代	1坑	1基	土器	土器(口)		
	時 期 不 明	土坑	29基					

福原打越塚群	集落跡	绳文時代	墻穴住居跡 2軒	绳文土器（深鉢） 石器（石鏹）	旧石器時代から近世までの複合遺跡である。绳文時代前期の集落の一部と、近世以降に形成された墓域と塚群が確認された。
	塚群	近世	塚 4基	瓦質土器（鉢） 陶器（小皿）	
	墓域		墓壙 2基	金属製品（鉄釘、煙管） 古鏡（寛永通寶）	
	その他	奈良・平安時代	土坑 1基	土師器（壺、甕） 須恵器（壺、高台付壺、蓋） 土製品（結縫木）	
上野賀生宮塚群遺跡	集落跡	平安時代	土坑 6基	土師器（壺、瓶） 須恵器（壺、甕） 灰釉陶器（碗） 石製品（支脚、砥石） 土製品（支脚）	平安時代の集落跡と近世の建物跡が確認された。平安時代の墻穴住居跡からは、墨書き土器が多数出土した。
			溝跡 1条		
	その他	近世	掘立柱建物跡 3棟 井戸跡 1基	瓦質土器（火鉢） 陶器（擂鉢） 石製品（砥石）	
	その他	上坑	47基 ピット群 1か所		

# 目 次

序

例言

凡例

抄録

目次

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 中山遺跡	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	11
1 縄文時代の遺構と遺物	11
(1) 壺穴住居跡	11
(2) 附し穴	13
(3) 十坑	16
(4) 遺構外出土遺物	23
2 古墳時代の遺構と遺物	24
(1) 土坑	24
(2) 遺構外出土遺物	25
3 その他の遺構	26
第4節 まとめ	27
第4章 福原打越塚群	30
第1節 遺跡の概要	30
第2節 基本層序	30
第3節 遺構と遺物	32
1 旧石器時代の遺物	32
2 縄文時代の遺構と遺物	32
(1) 壺穴住居跡	32
(2) 遺構外出土遺物	36

3 奈良・平安時代の遺構と遺物	37
(1) 土坑	37
(2) 遺構外出土遺物	38
4 近世の遺構と遺物	39
(1) 墳	39
(2) 墓壇	43
(3) 遺構外出土遺物	45
5 その他の遺構	46
第4節 まとめ	47
第5章 上加賀山宮後東遺跡	50
第1節 遺跡の概要	50
第2節 基本層序	50
第3節 遺構と遺物	52
1 平安時代の遺構と遺物	52
(1) 壁穴住居跡	52
(2) 土坑	72
2 近世の遺構と遺物	73
(1) 掘立柱迷物跡	73
(2) 井戸跡	78
3 その他の遺構と遺物	79
(1) 土坑	79
(2) ゾット群	81
(3) 遺構外出土遺物	82
第4節 まとめ	85

写真図版

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

日本道路公団は、常陸那珂港と北関東の各主要都市を結ぶ北関東自動車道の早期開通をめざしている。

平成10年11月4日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに、北関東自動車道建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて照会した。これを受けた茨城県教育委員会は、平成10年12月15日から12月18日に中山遺跡と福原打越塚群の現地踏査を、平成12年6月19日に上加賀田宮後東遺跡の現地踏査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成13年2月26～28日に中山遺跡と上加賀田宮後東遺跡の試掘調査を、平成13年7月12日に福原打越塚群の試掘調査を実施した。平成13年3月28日、茨城県教育委員会教育長は日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに事業地内に中山遺跡が、平成13年8月8日には、上加賀田宮後東遺跡と福原打越塚群が所在する旨回答した。

平成14年2月23日と2月25日に、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。平成14年2月29日、茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。平成14年3月1日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに、北関東自動車道建設に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書が提出された。その結果、平成14年3月1日、茨城県教育委員会教育長から日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、中山遺跡、上加賀田宮後東遺跡、福原打越塚群について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財團法人茨城県教育財団を紹介した。

財團法人茨城県教育財団は、日本道路公団から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成14年7月1日から9月30日まで上加賀田宮後東遺跡の、平成14年8月1日から8月31日まで中山遺跡の、平成14年9月1日から9月30日まで福原打越塚群の発掘調査を実施することになった。

## 第2節 調査経過

各遺跡の調査経過については、下表のとおりである。

中山遺跡		福原打越塚群		上加賀田宮後東遺跡			
工程	年月	平成14年	平成14年	平成14年	7月	8月	9月
調査準備		■	■	■			
表土除去		■		■			
遺構確認		■	■	■			
遺構調査		■■■	■■■	■■■			
洗浄・注記・写真整理作業		■■■	■■■	■■■			

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

中山遺跡・福原打越塚群は茨城県笠間市大字福原に、上加賀田宮後東遺跡は茨城県笠間市大字上加賀田に所在している。笠間市は県中央部の西端、八溝山地の南西部に位置している。筑足と筑波の二山塊に囲まれた盆地状の地形であり、市域の大部分が丘陵である。平地は利根川やその支流である中小河川沿いに形成されているが、市域の中で占める割合は少ない。

中山遺跡は笠間市南西部に位置し、吾国山（標高518m）から北西にのびる標高約90mの丘陵上にあり、谷津田を望む緩斜面に立地している。水田面との比高は約21mであり、調査前の現況は山林である。福原打越塚群は中山遺跡より東方約600mの標高約80mの丘陵上にあり、中山遺跡と同じく谷津田を望む丘陵斜面に立地している。水田面との比高は約13mであり、調査前の現況は山林である。上加賀田宮後東遺跡は笠間市南部に位置し、利根川右岸の丘陵上にある。この丘陵の最頂部の標高は約61mであり、今回の調査区は南斜面の標高約40m付近から標高約36mの平地であり、調査前の現況は畠地である。

### 第2節 歴史的環境

笠間市内の遺跡は、茨城県遺跡地図<sup>11</sup>に170遺跡が登載されている。各遺跡の詳細については、笠間市史編さん事業の一環で、市内全域を対象とした分布調査が筑波大学によって実施され、遺跡地名表と遺跡地図、代表的な遺物も図示しながら詳細にまとめられている<sup>12</sup>。この調査結果と発掘調査事例をもとに中山遺跡<sup>(1)</sup>、福原打越塚群<sup>(2)</sup>、上加賀田宮後東遺跡<sup>(3)</sup>の周辺遺跡について記述する。

中山遺跡は平成13年に発掘調査が行われ、縄文時代と平安時代から近世までの複合遺跡であることが判明した<sup>13</sup>。縄文時代の遺構は確認されなかつたものの、早期後半、前期後葉、中期、後期の遺物が出土しており、何らかの営みがあったことが想定される。本格的に集落が形成されたのは9世紀後葉からであり、11世紀前葉まで継続する。住居の規模・窓の向きや位置が時期ごとに変化しており、その変化は同時期では共通していることが分析されており、「同一郷内の動き」と報告されている。

中山遺跡から谷筋を挟んだ東方約1kmの丘陵上に福原原遺跡<sup>(12)</sup>が位置している。平成6年に奈良・平安時代の集落跡が調査され<sup>14</sup>、8世紀代（2軒）、9世紀代（1軒）、時期不明（1軒）の竪穴住居跡、平安時代の掘立柱建物跡が確認されている。墨書き器が4点出土しており、積文は「足」「足」、「二」、「口」と報告されている<sup>15</sup>。谷筋を挟んで対峙するふたつの集落は、福原原遺跡が先に形成されるが、共存する時期があったものと考えられる。両地区は中世もしくは近世になると墓域として使用され、土地利用の変換が見られる。

平安時代の集落跡としては、上加賀田宮後東遺跡の東方約1kmに位置し、平成14年に発掘調査された小組遺跡がある<sup>16</sup>。調査では、利根川を望む東斜面から掘部にかけて竪穴住居跡が14軒確認され、出土土器に須恵器供膳具が無いことや土師器から、上加賀田宮後東遺跡の集落跡と同時期のものと考えられる。

上加賀田宮後東遺跡と小組遺跡から利根川に沿って平地をさかのぼると、直線距離で約5kmの所に石井遺跡群<sup>(27)</sup>が位置している。その中の石井台遺跡が昭和47年に調査され<sup>17</sup>、竪穴住居跡29軒、掘立柱建物跡7棟、

上坑1基が確認されている。集落の変遷は6期に区分され、1期が8世紀中頃、2期が8世紀後半、3期が9世紀前半、4期が9世紀中頃、5期が10世紀中頃、6期が10世紀後半とされている。主な遺物としては、「中火縱」「中」「三和田」「三」と書かれた墨書き器、平瓦、陰刻花文が施された縁軸陶器碗が挙げられている<sup>9)</sup>。

石井遺跡群は平成14年にも茨城県教育財団が発掘調査を行い、遺物集中地點1か所、墳穴住居跡1軒を確認している。出土した須恵器が多種多様であり、壺底部に「厨」と刻まれていることや円面鏡が出土していることから、官衙遺跡との関連性が考えられている<sup>10)</sup>。笠間市は律令制の行政単位でいうと、新治郡に属する。市内には東山道と東海道を結び、常陸國府に至る連絡路の起点である「人神駅家」が存在したと推定されている。その位置は説明があり<sup>11)</sup>、発掘調査では確認されておらず不明な点が多い。駅家や古道の位置の考古学的な確認はもとより、石井台遺跡のような拠点集落および一般集落と、駅路の歴史的位置づけが今後の課題である。

中山遺跡、福原打越塚群、上加賀田宮後東遺跡の周辺遺跡を、発掘調査された奈良・平安時代の遺跡を中心みてきたが、その他の時代は筑波大学の分布調査報告を中心して概観していくことにする。

旧石器時代の所産と考えられる細石刃は、本戸城跡<34>、石崎遺跡<39>からそれぞれ1点ずつ採集されている。前者はチャート製、後者は頁岩製である<sup>12)</sup>。西田遺跡からは神子柴型磨製石斧の未製品が1点報告されている。この石器は旧石器時代終末から縄文時代開始期の「神子柴・長者久保文化」の特徴的な石器のひとつである。

縄文時代の遺跡では、中山遺跡において縄文早期後半から前期前半の土器群が出土しており<sup>13)</sup>、石崎遺跡からは出田（下解式期）、闇山式期、蟹沢遺跡<45>からは闇山式期の土器片が採集されている。また、周知の遺跡以外からも早期後葉や前期後葉の土器群も確認されており、山間部の縄文時代の資料が増えつつある。

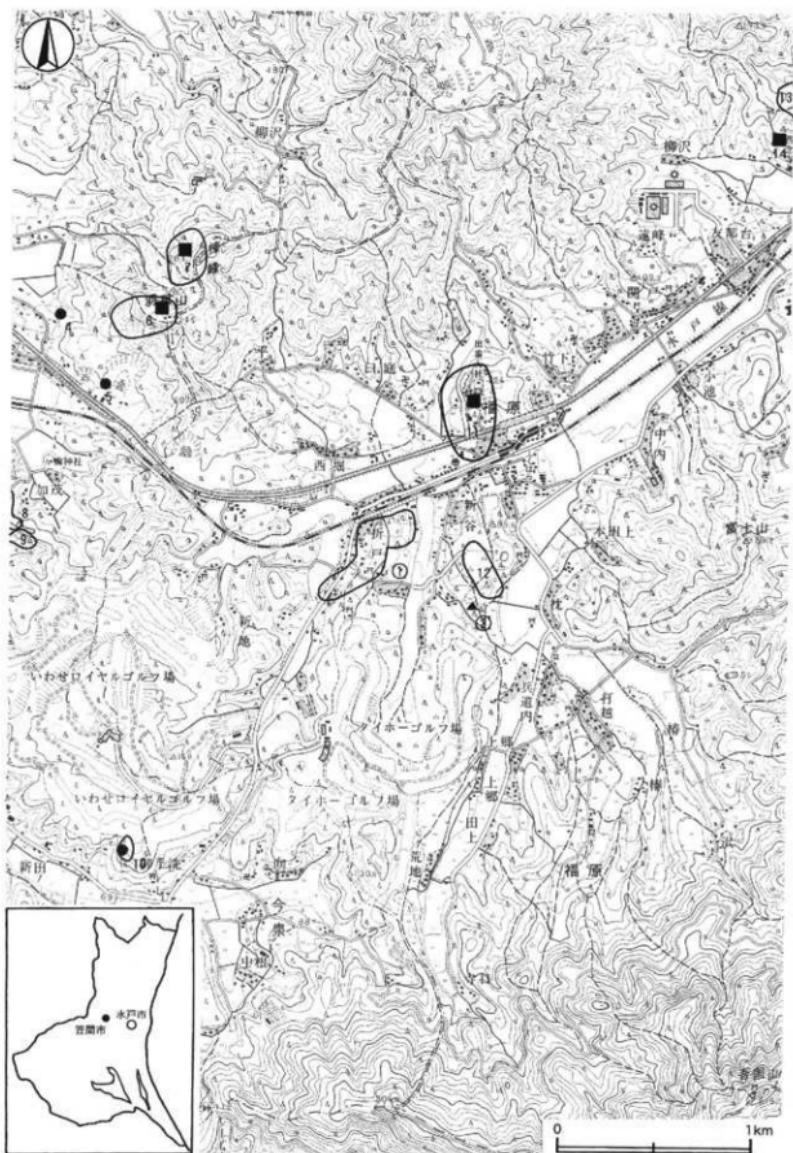
弥生時代の遺跡では、上加賀田宮後東遺跡、蕨後遺跡<38>から中期後半の足洗式併行と考えられる土器が採集されている。上加賀田宮後東遺跡の平成14年の発掘調査では、この時期の土器は確認されていない。

古墳時代の遺跡は、筑波大学の調査では、散布地11、占墳（群）16、計27遺跡が確認され、『茨城県遺跡地図』では36遺跡（うち古墳群11か所、古墳約56基）が登載されている。

中世から近世にかけての遺跡は、城館跡、塚（塚群）などがあり、羽黒山城跡<6>、棟圣城跡<7>、福原城跡<11>、福田城跡<14>、本戸城跡<34>、篠沢塚群<51>、籠城跡<54>、笠間城主下席敷跡<57>、時習館跡<58>、大王塚<63>、荒地前塚<64>がある。

※ 文中の（ ）内の番号は、第1～3図、表1の遺跡番号と同じである。

- 1) 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月
- 2) 西野 元『笠間市遺跡分布調査報告書』笠間市史編さん委員会 1992年3月
- 3) 成島一也『中山遺跡』『茨城県教育財団文化財調査報告』第204集 (財)茨城県教育財団 2003年3月
- 4) 萩原義郎『福原原遺跡』『笠間市埋蔵文化財調査報告書』第8集 笠間市教育委員会 福原原遺跡発掘調査会 1995年3月
- 5) 井川正一・白川正子他「茨城県域における文字資料集成 1」『研究ノート』9号 (財)茨城県教育財団 2000年6月
- 6) 茨城県教育財団「平成14年度調査遺跡の概要 小堀遺跡」『年報』22 (財)茨城県教育財団 2003年6月
- 7) 大川 清『石井古遺跡』『考古学研究家報告』2種3冊 鷹島書房
- 8) 川井正一「主要遺跡 石井古遺跡、『茨城県史料考古史料編奈良・平安時代』茨城県 1995年3月
- 9) 茨城県教育財団「平成14年度調査遺跡の概要 石井遺跡群」『年報』22 (財)茨城県教育財団 2003年6月
- 10) 笠間市史編さん委員会『笠間市史』上巻 笠間市 1993年12月
- 11) これらの細石刃の属する時代について註2文献の中で山川康弘氏は、「確実に旧石器時代の所産とは断言できかねるが、一応ここに記しておく」と旧石器時代の節で扱っている。また、細石刃核が確認できていないことから、「形態上の特徴から細石刃と判断することは難しく、本資料も石器製作時の初期調整削片である可能性も指摘しておきたい」と述べている。
- 12) 茨城県教育財団「平成14年度調査遺跡の概要 中山遺跡」『年報』22 (財)茨城県教育財団 2003年6月



第1図 中山遺跡、福原打越塚群周辺遺跡位置図

(図中の●は古墳(群)、▲は塚、■は城館を示す。)

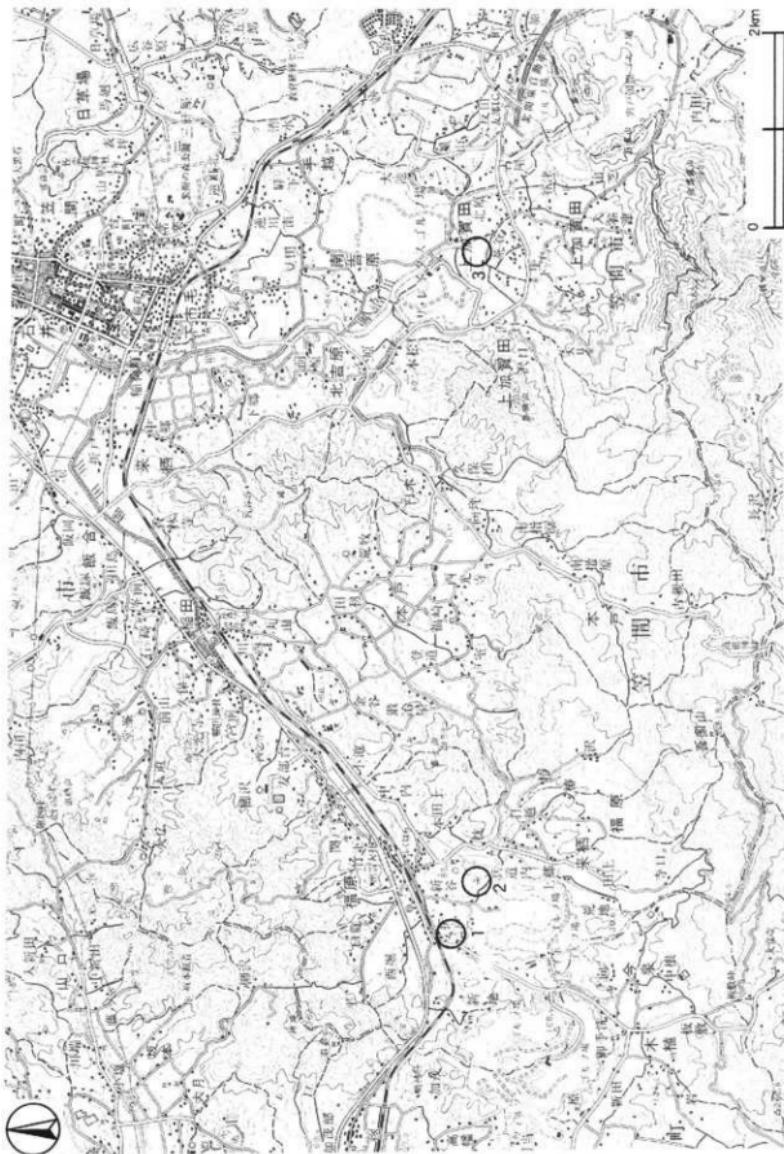


第2図 上加賀田宮後東遺跡周辺遺跡位置図

(図中の●は古墳(群)、▲は塚、■は城館を示す。)

表1 中山遺跡、福原打越塚群、上加賀山宮後東遺跡周辺遺跡一覧表

番 号	遺跡名	時代					番 号	時代					番 号	時代				
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	中世	近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	中世	近世			
①	中山遺跡	○		○	○	○	○	38	巖後遺跡	○	○	○	○					
②	福原打越塚群						○	39	石楠遺跡	○	○			○				
③	上加賀山宮後東遺跡	○	○	○	○	○	○	40	向原遺跡					○	○			
4	瓢磨古墳			○				41	大日後遺跡	○				○	○	○		
5	西沢古墳		○					42	本戸宮前遺跡	○				○	○			
6	羽黒山城跡				○			43	谷中遺跡					○	○			
7	棟峯城跡					○		44	木根平遺跡	○								
8	加茂遺跡	○	○	○				45	紙沢遺跡	○								
9	加茂B古墳群		○					46	上ノ台遺跡	○				○				
10	木植古墳群		○					47	古坪遺跡	○				○				
11	福原城跡				○			48	尚坂原遺跡	○				○	○			
12	福原平原遺跡	○		○				49	添川遺跡	○				○				
13	袁遺跡	○		○				50	添川古墳					○				
14	稻田城跡				○			51	滝尻塚群									○
15	白石南遺跡				○			52	上折遺跡					○	○			
16	白石塚				○			53	川東遺跡	○				○	○			
17	樅畠遺跡		○					54	菟城跡						○			
18	大塚古墳		○					55	愛宕台遺跡	○								
19	森川遺跡	○						56	大石郵跡									○
20	峰前遺跡	○		○				57	笠岡城主下屋敷跡									○
21	高坂遺跡				○			58	時習館跡									○
22	中野古墳群		○					59	鐵治屋遺跡									○
23	中野遺跡	○						60	竹ノ内遺跡					○				
24	上ノ平古墳群			○				61	鐵治倉遺跡	○				○	○			
25	飯合宮前遺跡			○				62	向山遺跡	○								
26	飯岡館跡					○		63	天王塚									○
27	石井遺跡群	○	○	○	○			64	荒地前塚									○
28	十二書遺跡	○	○	○				65	下市毛逆川北遺跡									○
29	谷原遺跡				○	○		66	下市毛逆川遺跡									○
30	種荷古墳群			○				67	人台遺跡	○				○	○			
31	山池遺跡				○			68	久保遺跡						○			
32	鍛冶内遺跡	○						69	近藤峰遺跡	○				○	○			
33	鍛冶内古墳群			○				70	大早遺跡	○				○	○			
34	本戸城跡	○	○		○	○		71	荒谷北遺跡									○
35	荒牧遺跡群		○		○	○		72	荒谷遺跡	○								
36	本ノ塚ノ内遺跡				○			73	上加賀田河後跡	○								
37	手越原遺跡	○		○														



第3圖 中山遭跡、福原打越塚群、上加賀田宮後東遺跡位置図

## 第3章 中山遺跡

### 第1節 遺跡の概要

中山遺跡は、笠間市の南西部に位置し、吉田山から北西に延びる標高90m前後の丘陵性の台地上に立地している。調査面積は1,850.58m<sup>2</sup>で、調査前の現況は山林であった。

今回の調査では、縄文時代早期後半から前期後半にかけての竪穴住居跡1軒、陥れ穴6基、土坑8基、古墳時代中期の土坑1基、さらに、時期不明の土坑29基も確認された。住居跡と土坑は、調査区のほぼ中央部に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面に立地していた。陥れ穴は、主に調査区南部から西部にかけて位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面および緩斜面に立地していた。

遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)に2箱出土している。縄文時代の遺物は、縄文土器片(深鉢)、石器(右鍬、石匙、凹石、石皿、剥片)である。古墳時代の遺物は、土師器片(壇・甌)、須恵器片(甌)である。

このように、当遺跡は縄文時代には狩猟場と集落の一部として、また、古墳時代にも生活の場として利用されていたことが確認され、縄文時代と古墳時代の複合遺跡であることが明らかになった。

### 第2節 基本層序

調査区北側中央部(J4号区)に深さ約2mのテストピットを設定して、基本土層の観察を行った。(第4図)  
第1層 暗褐色の表土層で、腐植土が混じる。層厚は20~40cmである。

第2層 灰褐色の凹表土層で、ローム粒子を少量含む。層厚は10~28cmである。

第3層 暗褐色のソフトローム層で、砂粒と輕石粒子を極微量含む。粘性と縮まりはともに強い。層厚は5~15cmである。

第4層 暗褐色のハードローム漸移層で、輕石粒子を少量含む。粘性と縮まりは強い。層厚は15~45cmである。

第5層 黄褐色のハードローム層で、赤色粒子を微量含む。

む。粘性と縮まりはともに強い。層厚は30~45cmである。

第6層 橙褐色のハードローム層で、鹿沼バミスを中量含

み、鹿沼輕石層の漸移層と考えられる。粘性と縮  
まりはともに強い。層厚は12~32cmである。

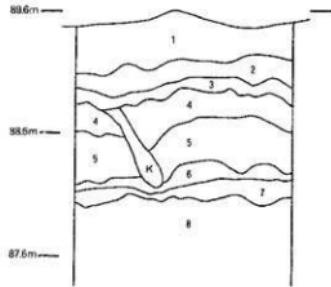
第7層 黄褐色の鹿沼輕石層である。粘性を欠くが縮ま  
りは極めて強い。層厚は36~60cmである。

第8層 にぶい褐色のハードローム層で、砂粒を微量含

む。粘性と縮まりはともに極めて強い。以下、未

掘のため本來の層厚は不明である。

遺構の多くは、第3層から第4層上面で確認され、第3層から第6層を掘り込んでいる。



第4図 基本土層図



第5図 中山遺跡調査区設定図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 縄文時代の遺構と遺物

今回の調査で、竪穴住居跡1軒、廻し穴9基、土坑8基が確認された。住居跡と土坑は、調査区のほぼ中央部に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面に立地していた。廻し穴は、主に調査区南部から西部にかけて位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面および緩斜面に立地していた。以下、遺構と主な出土遺物について記述する。

##### (1) 竪穴住居跡

###### 第1号住居跡(第6図)

位置 調査区中央部のK4m区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面に立地している。

重複関係 潜在部の壁と床の一部を、第33号土坑に掘り込まれている。南東側の一部は、擾乱を受けている。

規模と形状 南東側の壁は遺存していないが、長径4.95m、短径3.58mの約円形と考えられる。長径をもとにした主軸方向は、N=35°正である。壁は外傾して立ち上がり、確認された盛高は5~10cmである。

床 南東側から北西側に向かって緩やかに傾斜している。柱穴と考えられるビットに削まれた内側に、部分的に硬化面が確認された。

炉 確認されなかった。

ビット 8か所。P1~P7は深さ10~35cmで、その規模と配置から主柱穴と考えられる。また、P8は柔さ12cmで、P6に沿った位置に存在することから補助柱穴と考えられる。

###### P1~P8土層解説

1	褐	色	コーム粒子中量
2	灰	色	コームブロック中量

3	灰	褐色	ロームブロック多量
4	灰	色	ロームブロック少量

覆土 5層に分層される。全体的に褐色土を基調とし、粘性としまりは強い。壁際から中央部に向かってレンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積と考えられる。

###### 土層解説

1	褐	色	コーム粒子少量
2	褐	色	ロームブロック中量
3	灰	褐色	ロームブロック少量

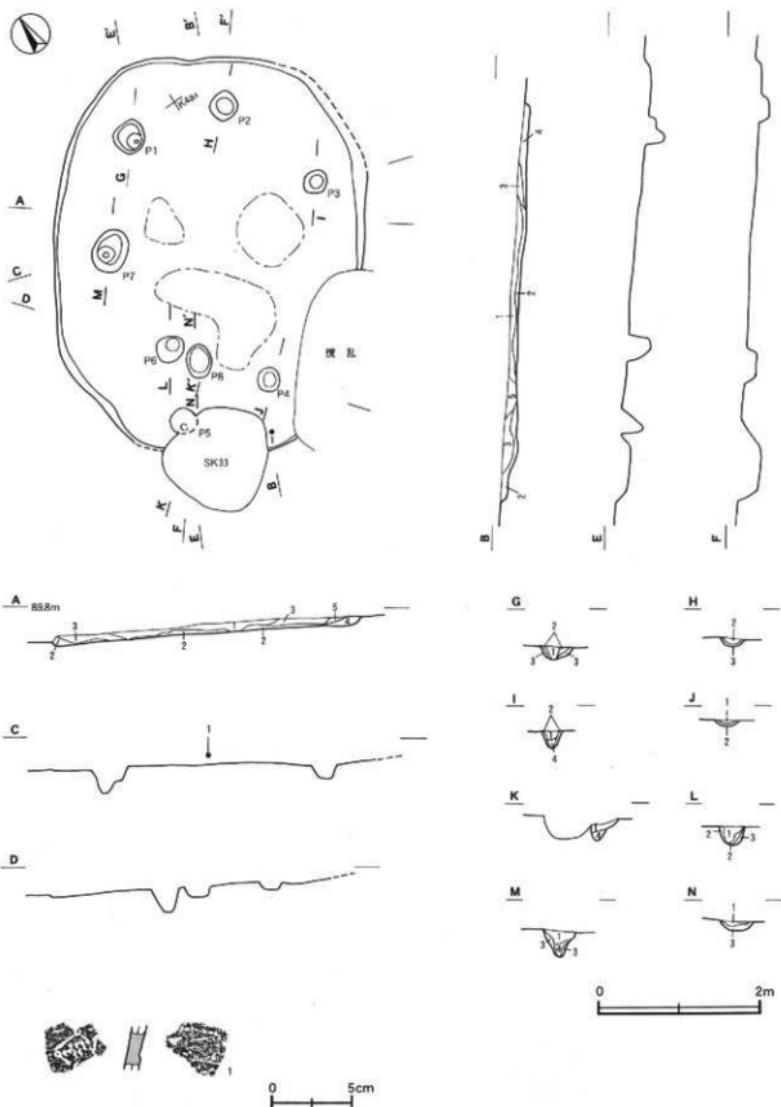
4	褐	色	ローム粒子中量
5	褐	色	ロームブロック中量、横肉粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片1点(胴部片)、剥片3点と混入と考えられる土器片3点が出土している。遺物はわずかで、第6図1も細片であり、南東部の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器及び遺構の形態と、周辺に分布する土坑と合わせて判断すると、縄文時代早期後半と考えられる。

第1号住居跡出土遺物観察表(第6図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深杯	石英・隕石	にじみ	普通	差形の先端に円形孔洞突き出る構造	調査区南東部裏側 土坑上部	TP1 P1.1



第6図 第1号住居跡・出土遺物実測図

## (2) 陥し穴

### 第1号陥し穴 (SK 1) (第7図)

位置 調査区西部のK 3 b4 区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北西向き斜面に立地している。

規模と形状 長径0.96m、短径0.78mの不整円形で、深さは104cmである。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。短径方向の断面形はU字状を呈している。底面の中央部には、逆茂木を立てたと考えられる深さ19cmのピットが1か所検出された。長径方向はN-76° Eである。

覆土 6層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

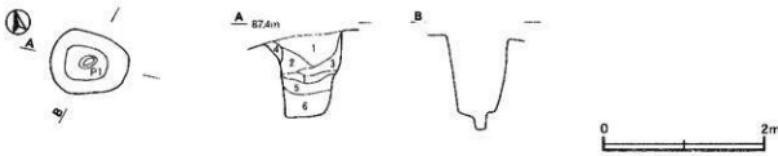
#### 土層解説

1	赤褐色	コーム粒子微量
2	黒褐色	コームブロック微量
3	暗褐色	コーム粒子少量

4	灰褐色	ロームブロック少量
5	暗褐色	ロームブロック中量
6	暗褐色	ローム粒子中量

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。



第7図 第1号陥し穴実測図

### 第2号陥し穴 (SK 12) (第8図)

位置 調査区南部のK 3 c8 区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北西向き緩斜面に立地している。

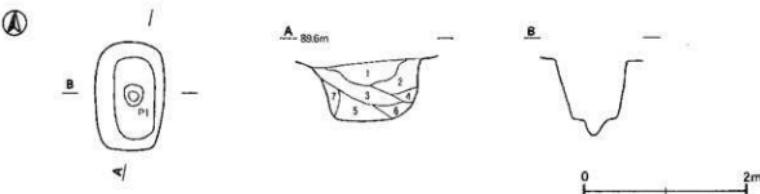
規模と形状 長軸1.32m、短軸0.86mの楕円形で、深さは76cmである。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。短軸方向の断面形はU字状を呈している。底面の中央部には、逆茂木を立てたと考えられる深さ17cmのピットが1か所検出された。長軸方向はN-2° Wである。

覆土 7層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1	赤褐色	ロームブロック少量、機土粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子少量
3	暗褐色	ロームブロック中量
4	赤褐色	ロームブロック少量

5	暗褐色	ローム粒子中量
6	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
7	褐色	ローム粒子多量



第8図 第2号陥し穴実測図

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。

### 第3号陥し穴 (SK13) (第9図)

位置 調査区南部のK 3 c区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い北西向き緩斜面に立地している。

規模と形状 長径1.62m、短径0.96mの長椭円形で、深さは98cmである。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。

短径方向の断面形はJ字状を呈している。長径方向はN-53-Wである。

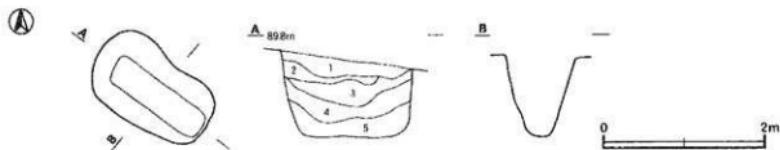
覆土 5層に分層される。壁際からレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

#### 土質解説

1 黒	色 ローム粒子少量、灰土粒子極微量	4 塗	色 ロームブロック中量、灰土粒子少量
2 海	色 ロームブロック中量、灰土粒子極微量	5 細	色 ロームブロック・疊層バミス少量、炭化粒子少量
3 暗	色 ロームブロック・炭化粒子少量		

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。



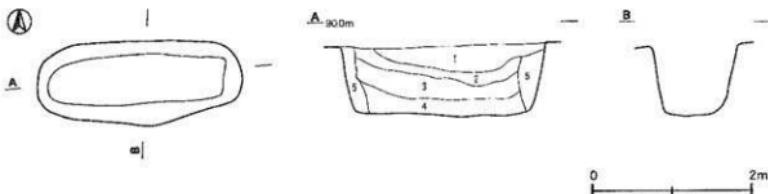
第9図 第3号陥し穴実測図

### 第4号陥し穴 (SK14) (第10図)

位置 調査区中央部のK 4 c区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面に立地している。

規模と形状 長径2.58m、短径1.06mの楕円形で、深さは88cmである。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。

短径方向の断面形は逆台形状を呈している。長径方向はN-85-Eである。



第10図 第4号陥し穴実測図

**覆土** 5層に分層される。第5層は崖際からの崩落土と考えられ、第1～4層がレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

**土層解説**

1 黒褐色 ローム粒子微量、堆土粒子極微量	4 黑褐色 ロームブロック少量、腐泥バクテリア量
2 灰褐色 ローム粒少量、堆土粒子極微量	5 黑褐色 ローム粒多量、堆土粒子、炭化粒子微量
3 黑褐色 ロームブロック少量、堆土粒子微量	

**遺物出土状況** 出土していない。

**所見** 時期は、造構の形態から縄文時代と考えられる。

**第5号陥し穴 (SK25) (第11図)**

**位置** 調査区中央部のK4b2区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面に立地している。

**規模と形状** 長軸1.54m、短軸0.83mの隅丸長方形で、深さは80cmである。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。短軸方向の断面形はU字状を呈している。長軸方向はN-84°-Wである。

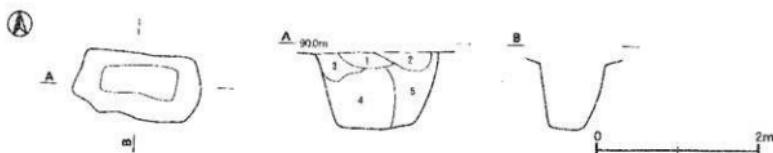
**覆土** 5層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

**土層解説**

1 岩褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量	4 黑褐色 ロームブロック微量
2 灰褐色 ロームブロック少量、堆土粒子、炭化粒子微量	5 黑褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
3 黑褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量	

**遺物出土状況** 出土していない。

**所見** 時期は、造構の形態から縄文時代と考えられる。



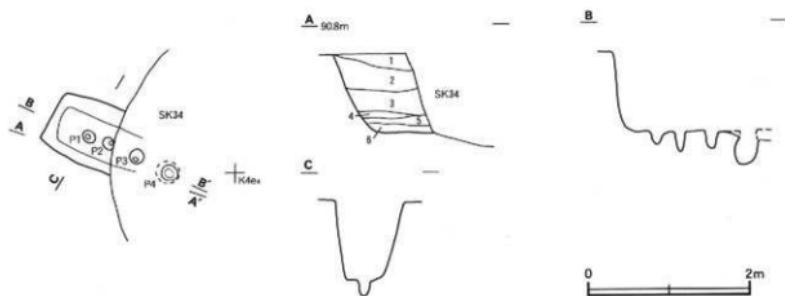
第11図 第5号陥し穴実測図

**第6号陥し穴 (SK44) (第12図)**

**位置** 調査区南部のK4d2区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面に立地している。

**重複関係** 南東側の大半を、第34号土坑に埋り込まれている。

**規模と形状** 推定される長軸2.06m、短軸0.80mの隅丸長方形と考えられ、深さは98cmである。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。短軸方向の断面形はU字状を呈している。底面の中央部には、ピットが4か所検出された。P1～P4の深さは16～28cmで、いずれも逆茂木を立てたピットと考えられる。長軸方向はN-62°-Wである。



第12図 第6号陥し穴実測図

**覆土** 6層に分層される。壁際からレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

**土層解説**

1	褐	色	ローム粒子中量
2	褐	色	ロームブロック少量
3	灰	褐色	ロームブロック中量

4 褐 色 ロームブロック・鹿沼バミス中量

5 褐 色 鹿沼バミス中量、ローム粒子少量

6 黄 褐 色 鹿沼バミス多量、ローム粒子中量

**遺物出土状況** 出土していない。

**所見** 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。

(3) 土 坑

第20号土坑（第13図）

**位置** 調査区中央部のK 4 as 区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面に立地している。

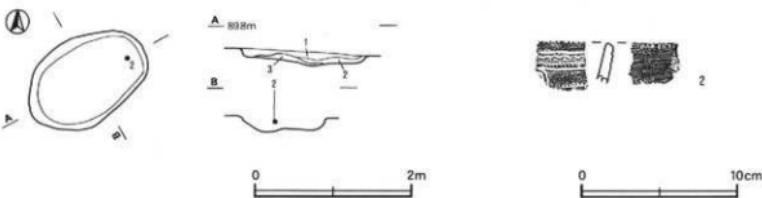
**規模と形状** 長径1.64m、短径1.09mの楕円形で、深さは15~20cmである。壁は外傾して立ち上がり、底面はわずかに凹凸が見られる。長径方向はN-60°-Eである。

**覆土** 3層に分層される。壁際からレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

**土層解説**

1	褐	色	ローム粒子中量
2	褐	色	ロームブロック中量

3 褐 色 ローム粒子多量



第13図 第20号土坑・出土遺物実測図

**遺物出土状況** 第13図2の縄文土器片1点(口縁部片)が、北東部の覆土中層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から縄文時代早期後半と考えられる。

第20号土坑出土遺物観察表(第13図)

番号	種別	埋種	粒土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	縄文土器	深鉢	石英・長石	灰褐色	普通	口縁部放散縄文。口縁部横位の波状と波状の沈線文。沈線間にキザミと貝殻縄文施文。	北東部覆土中層	TP2 PL4

第23号土坑(第14図)

**位置** 調査区東部のK 4 bs 区に位置し、丘陵性台地の尾根部平坦面に立地している。

**規模と形状** 長径2.00m、短径1.18mの梢円形で、深さは25cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面は北東側から南西側に向かって傾斜している。長径方向はN-64°-Eである。

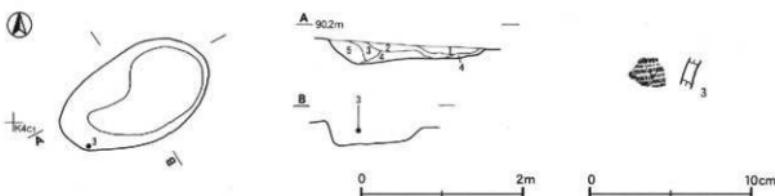
**覆土** 5層に分層される。各層に炭化粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

**土層解説**

1	暗褐色	ローム粒子微量、炭化粒子極微量	4	明褐色	ロームブロック少量、炭化粒子極微量
2	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量、燒土粒子極微量	5	褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
3	褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・燒土粒子極微量			

**遺物出土状況** 第14図3の縄文土器片1点(胸部片)と剥片3点が、南西部の覆土中層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から縄文時代前期後半と考えられる。



第14図 第23号土坑・出土遺物実測図

第23号土坑出土遺物観察表(第14図)

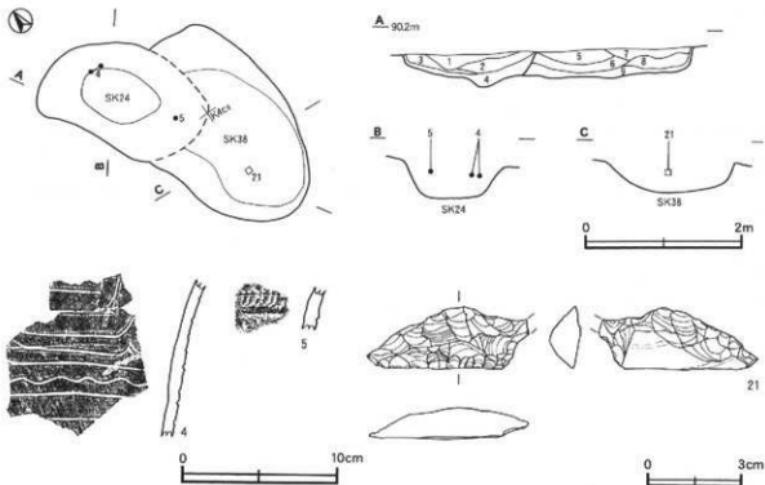
番号	種別	埋種	粒土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3	縄文土器	深鉢	石英・長石	にぶい黄褐色	普通	条線状の平行沈線文施文。	南西部覆土中層	TP3

第24号土坑(第15図)

**位置** 調査区東部のK 4 bs 区に位置し、丘陵性台地の尾根部平坦面に立地している。

**重複関係** 南東側は、第38号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 推定される長径2.07m、短径1.22mの不整梢円形で、深さは46cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面は平坦である。長径方向はN-32°-Wである。



第15図 第24・38号土坑・出土遺物実測図

覆土 4層に分層される。壁際からレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 紺 暗色 ローム粒子少量、炭化粒子極微量  
2 暗 暗色 ローム粒子中量

3 褐 色 ローム粒子多量  
4 灰 黄色 ロームブロック中量

遺物出土状況 繪文土器片4点(胴部片)が出土している。第15図4は北西部の覆土中層から、5は南東部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代早期後半と考えられる。

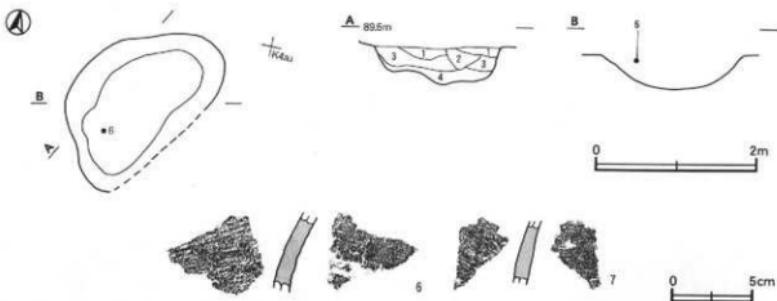
第24号土坑出土遺物観察表(第15図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4	縄文土器	深鉢	石英・長石	にじみ、黄褐色	普通	沈線による棒状の文様と横位の波状文施文。沈線に沿って具殻腹縫文施文。	北部覆土中層	TP4 PH.4
5	縄文土器	深鉢	石英・長石	暗	普通	貝殻腹縫利用の爪形文施文。	南部覆土中層	TP5

第28号土坑 (第16図)

位置 調査区中央部のK 4az 区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面に立地している。

規模と形状 長径2.12m、短径1.46mの楕円形で、深さは42cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面は皿状を呈している。長径方向はN-50°-Eである。



第16図 第28号土坑・出土遺物実測図

**覆土** 4層に分層される。炭化粒子を含む層が多く、ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

**土層解説**

- 1 線 暗色 炭化粒子少量、ローム粒子微量  
2 線 暗色 ローム粒子少量、炭化粒子極微量

- 3 線 色 ロームブロック少量、炭化粒子極微量  
4 明 暗色 ロームブロック中量

**遺物出土状況** 繩文土器片2点（胴部片）と自然礫1点が出土している。第16図6は、南西部の覆土中層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から縄文時代早期後半と考えられる。

第28号土坑出土遺物観察表(第16図)

番号	種 別	器種	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 権	出土位置	備 考
6	縄文土器	深鉢	石英・長石・繊維	黒褐	普通	表裏面兼縄文施文。	南部覆土中層	TP6 PL4
7	縄文土器	深鉢	石英・赤色粒子・繊維	明赤褐	普通	表裏面兼縄文施文。	覆土中	TP7

第32号土坑（第17図）

**位置** 調査区東部のK 4 da 区に位置し、丘陵性台地の尾根部平坦面に立地している。

**規模と形状** 長径2.57m、短径1.82mの楕円形で、深さは13~23cmである。壁は外傾して立ち上がり、底面はわずかに凹凸が見られる。長径方向はN-55°-Wである。

**覆土** 3層に分層される。壁際からレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

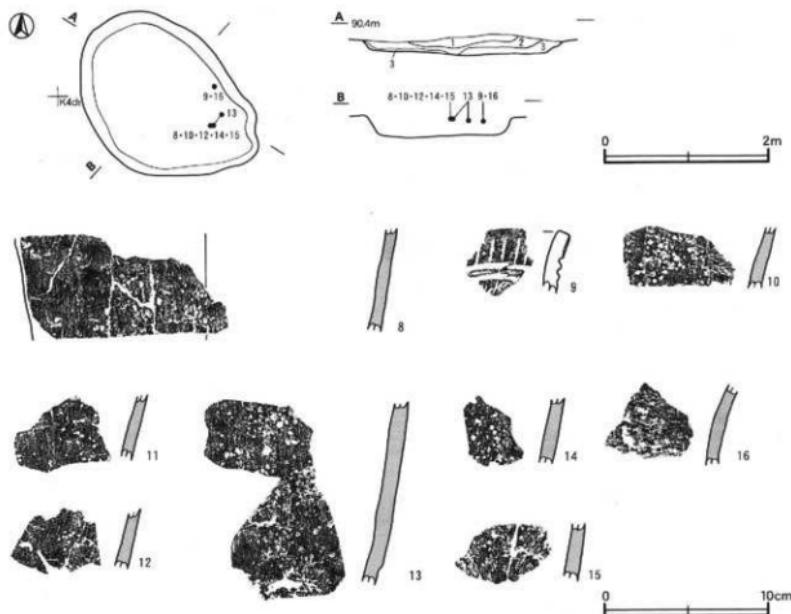
**土層解説**

- 1 線 暗色 ローム粒子・炭化粒子少量  
2 線 色 ローム粒子中量、炭化粒子極微量

- 3 明 暗色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 縄文土器片17点（口縁部片1、胴部片16）と混入と考えられる土師器片2点が出土している。また、自然礫5点が覆土中で確認された。第17図8・10・12~16は同一個体と考えられ、主に南東部に集中して覆土中層から底面にかけて出土している。

**所見** 時期は、出土土器から縄文時代前期前半と考えられる。



第17図 第32号土坑・出土遺物実測図

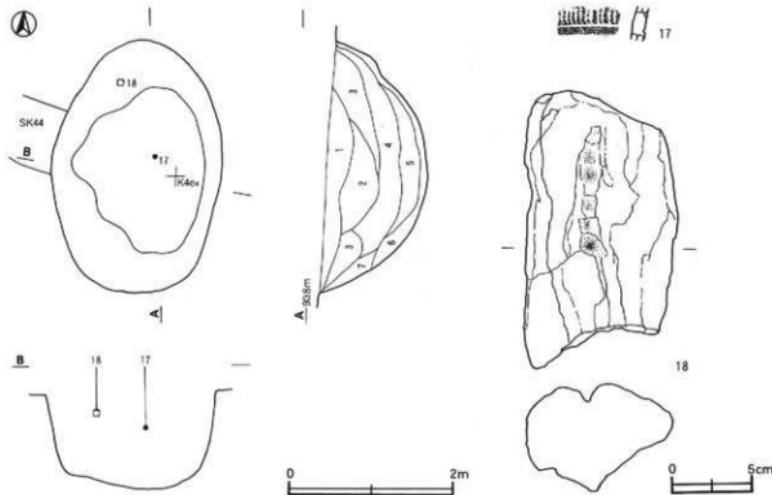
第32号土坑出土遺物観察表(第17図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
8	圓文土器	深鉢	-	(6.4)	-	石英・長石・鐵錐	にぶい褐色	普通	無文。表裏面ミガキ。	南東部覆土中 層	TP8 PL4
9	圓文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部に複数の短沈縫と横模の平行沈痕施文。	北東部覆土中 層	TP9 PL4			
10	圓文土器	深鉢	石英・長石・鐵錐	明赤褐色	普通	無文。表裏面ミガキ。	南東部覆土中 層	TP10			
11	圓文土器	深鉢	石英・長石・鐵錐	明赤褐色	普通	無文。表裏面ミガキ。	覆土中	TP11			
12	圓文土器	深鉢	石英・長石・鐵錐	明赤褐色	普通	無文。表裏面ミガキ。	南東部覆土中 層	TP12			
13	圓文土器	深鉢	石英・長石・鐵錐	にぶい赤褐色	普通	無文。表裏面ミガキ。	南東部覆土中 層	TP13 PL4			
14	圓文土器	深鉢	石英・長石・鐵錐	明赤褐色	普通	無文。表裏面ミガキ。	南東部覆土中 層	TP14			
15	圓文土器	深鉢	石英・長石・鐵錐	にぶい赤褐色	普通	無文。表裏面ミガキ。	南東部覆土中 層	TP15			
16	圓文土器	深鉢	石英・長石・鐵錐	にぶい赤褐色	普通	無文。表裏面ミガキ。	北東部覆土中 層	TP16			

第34号土坑 (第18図)

**位置** 調査区南部のK 4 ds 区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面に立地している。

**重複関係** 西側は、第6号陥落穴を掘り込んでいる。



第18図 第34号土坑・出土遺物実測図

**規模と形状** 長径1.54m、短径1.05mの楕円形で、深さは50~60cmである。壁は外傾して立ち上がり、底面は皿状を呈している。長径方向はN-4°-Eである。

**覆土** 7層に分層される。炭化粒子を含む層が多く、ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

**土層解説**

1 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、炭化物微量	5 暗褐色	ロームブロック中量、鹿沼バミス少量、炭化粒子微量
2 黒褐色	炭化粒子少量、ロームブロック微量	6 暗褐色	ロームブロック・鹿沼バミス中量
3 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	7 明褐色	ロームブロック中量
4 褐色	ロームブロック・鹿沼バミス少量、炭化粒子微量		

**遺物出土状況** 第18図17・18の縄文土器片1点(胴部片)と石器1点(圓石)が、中央部と北部の覆土中層からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から縄文時代前期後半と考えられる。

第34号土坑出土遺物観察表(第18図)

番号	種別	器種	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
17	縄文土器	深鉢	石英・長石	にぬけ性	普通	横位の平行沈線文と貝殻模様文施文。	中央部覆土中層	TP17

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
18	圓石	(17.1)	9.4	6.6	(0.540)	凝灰岩	表面に4か所穿孔。	北部覆土中層	PL5

### 第36号土坑（第19図）

**位置** 調査区東部のK 4 ds 区に位置し、丘陵性台地の尾根部平坦面に立地している。

**規模と形状** 長径1.30m、短径1.16mの不整梢円形で、深さは10cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。長径方向はN-25°-Eである。

**覆土** 3層に分層される。各層に炭化粒子を含み、ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

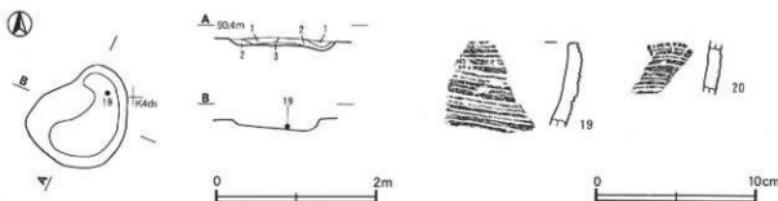
#### 土層解説

1	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
2	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量

3	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子極微量
---	----	-------------------

**遺物出土状況** 繩文土器片2点（口縁部片1、腹部片1）が出土している。第19図36は、北東部の底面から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から縄文時代前期後半と考えられる。



第19図 第36号土坑・出土遺物実測図

### 第36号土坑出土遺物観察表(第19図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
19	縄文土器	深鉢	石英・長石	にい・黄橙	普通	条線状の平行沈薙施文。	北東部底面	TP19 PL.4
20	縄文土器	深鉢	石英・長石	にい・黄橙	普通	条線状の平行沈薙施文。	覆土中	TP20 PL.4

### 第38号土坑（第15図）

**位置** 調査区東部のK 4 cs 区に位置し、丘陵性台地の尾根部平坦面に立地している。

**重複関係** 北西側は、第24号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径2.72m、短径1.70mの梢円形で、深さは40cmである。壁は外傾して立ち上がり、底面は皿状を呈している。長径方向はN-0°である。

**覆土** 5層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

5	灰褐色	ローム粒子中量、炭化粒子極微量
6	褐色	ロームブロック中量
7	灰褐色	ロームブロック少量

8	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子極微量
9	にい褐色	ロームブロック多量

**遺物出土状況** 石器1点（石匙）と剥片3点が出土している。第15図21は、中央部の覆土中層から出土している。

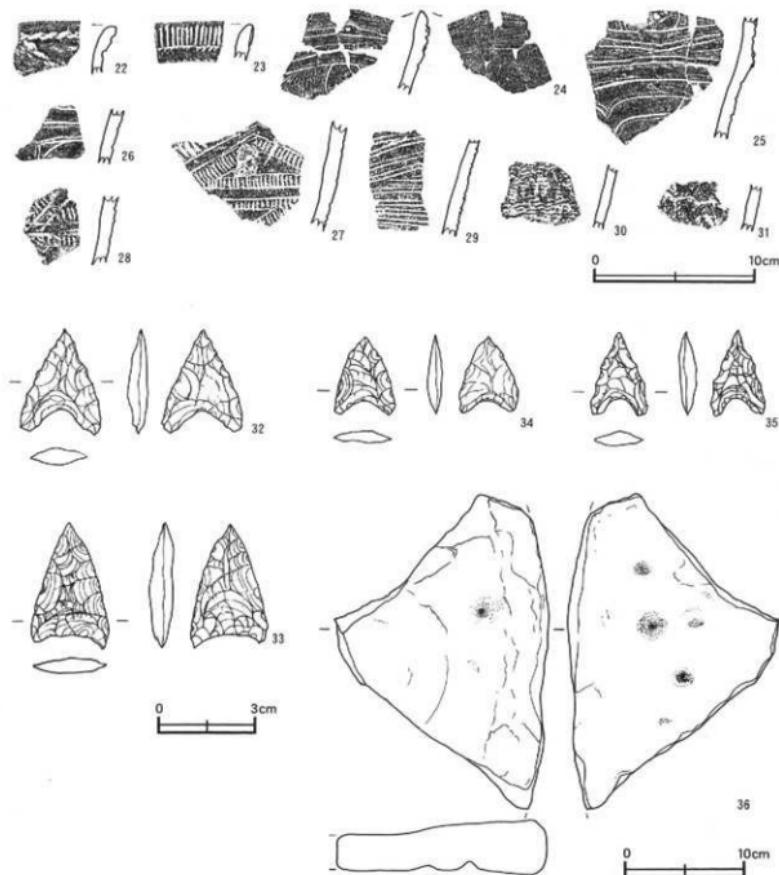
**所見** 出土土器がなく明確ではないが、第24号土坑に掘り込まれていることから、時期は、縄文時代早期後半以前と考えられる。

第38号土坑出土遺物観察表(第15図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
21	石匙	(5.1)	1.9	1.0	(8.4)	頁岩	横型石匙。刃縁は両面調整。つまみ部欠損。	中央部覆土中 層	Q21 Pt.5

## (4) 遺構外出土遺物(第20図)

ここでは、調査区内の表土中から出土した遺物や、他時期の遺構への流れ込みまたは混入と判断された遺物のうち、特徴的なものを実測図と観察表で記載する。



第20図 遺構外出土遺物実測図

遺構・出土・遺物観察表(第20図)

番号	種別	器種	胎土	色調	特徴	手法の特徴	出土位置	備考
22	縄文土器	圓鉢	石英・長石	褐色	普通	レバ留痕により底面に複数の凹部形成。	表土中	TP22 PL.4
23	縄文土器	圓鉢	長石	褐灰	普通	内面に複数の凹部と移位の差異の凹部形成。	表土中	TP23 PL.4
24	縄文土器	圓鉢	石英・長石	褐色・黄褐色	普通	底面に複数の凹部と移位の差異の凹部形成。	表土中	TP24 PL.4
25	縄文土器	圓鉢	石英・長石	にごり・黒褐色	普通	底面の凹部と移位の差異の凹部形成。	表土中	TP25 PL.4
26	縄文土器	圓鉢	石英・長石	にごり・黒褐色	普通	底面の凹部と移位の差異の凹部形成。	表土中	TP26 PL.4
27	縄文土器	圓鉢	石英・長石	にごり・黄褐色	普通	底面の凹部と移位の差異の凹部形成。	表土中	TP27 PL.4
28	縄文土器	深鉢	長石	にごり・黒褐色	普通	平行弦文による凹部形成。内側面に複数の凹部形成。	表土中	TP28 PL.4
29	縄文土器	深鉢	石英・長石	明褐色	普通	垂直弦文による凹部形成。内側面に複数の凹部形成。	表土中	TP29 PL.4
30	縄文土器	圓鉢	石英・長石	にごり・黒褐色	普通	底面に凸部と形成した乳頭状突起。	表土中	TP30 PL.4
31	縄文土器	圓鉢	石英・長石	にごり・褐色	普通	底面文と底部文残存。	表土中	TP31

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重味	材質	特徴	出土位置	備考
32	石礫	2.2	1.7	0.1	0.92	チャート	四基無基盤。表面新鮮調査。基部の抉りは深い。	表土中	Q32 PL.5
33	石礫	2.6	1.6	0.1	1.52	黒褐色	四基無基盤。表面剥離調査。基部の抉りは浅い。	表土中	Q33 PL.5
34	石礫	1.6	1.2	0.4	0.43	黒褐色	四基無基盤。表面剥離調査。基部の抉りは浅い。	表土中	Q34 PL.5
35	石礫	1.7	1.3	0.4	0.82	チャート	四基無基盤。表面剥離調査。基部の抉りは深い。	表土中	Q35 PL.5
36	石皿 (陶石)	(26.3)	(17.7)	4.5	(2.330)	花崗岩	表面に2か所、裏面に3か所穿孔。	表土中	Q36 PL.5

## 2 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で、土坑1基が確認された。以下、遺構と山上遺物について記述する。

### (1) 土坑

#### 第43号土坑(第21図)

位置 調査区南東部のK45区に位置し、丘陵性台地の尾根部に近い平坦面に立地している。

重複関係 西側は、第42号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径3.73m、短径1.76mの不規格円形で、深さは28~34cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面は皿状を呈している。長径方向はN=83°~Wである。

覆土 4層に分層される。水平およびブロック状の不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

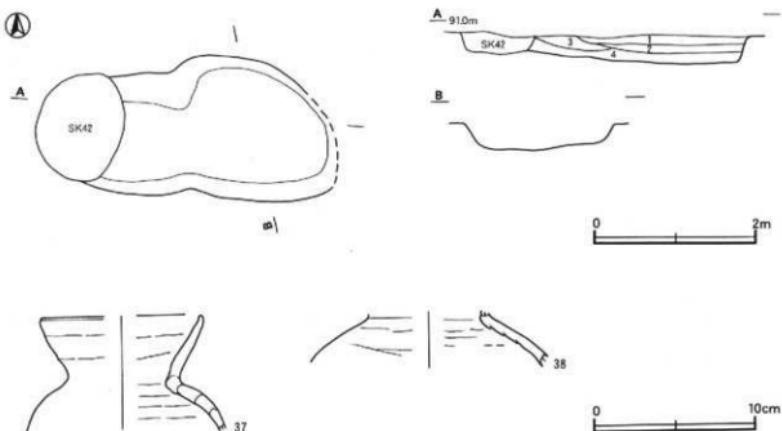
#### 土層解説

- 1 層 全 ハーモニクス中量
- 2 灰褐色 ロームブロック少量

- 3 層 色 ハーモニクス多量
- 4 層 色 ハーモニクス中量

遺物出土状況 1.師器片4点(堆)が出土している。第21図37・38は、被損した状態で覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から古墳時代中期と考えられる。



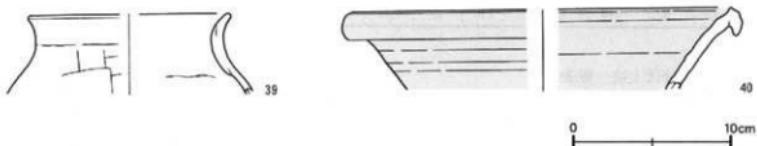
第21図 第43号土坑・出土遺物実測図

第43号土坑出土遺物観察表(第21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 権	出土位置	備 考
37	土師器	壺	[10.0]	(7.2)	-	赤色粒子・雲母	橙	普通	口縁部外側ナデ。体部外面、口縁部内面ヘラナデ。 体部内面擦痕斑。	覆土中	P37 PL.5 30%
38	土師器	壺	-	(3.4)	-	石英・長石	橙	普通	底部外面ヘラナデ。体部内面擦痕。	覆土中	P38 5%

#### (2) 遺構外出土遺物 (第22図)

ここでは、調査区内の表土中から出土した遺物や、他時期の遺構への流れ込みまたは混入と判断された遺物のうち、特徴的なものを実測図と観察表で記載する。



第22図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表(第22図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 権	出土位置	備 考
39	土師器	甕	[12.8]	(6.1)	-	石英・長石・赤色 粒子	に赤い赤褐色	普通	口縁部外側ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	表土中	P39 5%
40	須恵器	甕	[24.0]	(5.2)	-	長石	黒	普通	口縁部内・外面擦ナデ。内・外面自然縫。	表土中	P40 5%

### 3 その他の造構

今回の調査で、時期および性格不明の土坑29基が確認された。一覧表で掲載し、平面図については全体図（第23図）で示すことにする。

表2 繩文時代住居跡一覧表

番号	位置	長径(輪)方向	平面形	馬 墓		底面	壁面	内部装設			覆土	土な出土遺物	時 期	参考 新石器時代～古 代		
				長径 (幅)(m)	短径(m)			底面 (幅)(m)	壁面 (幅)(m)	柱 (幅)(m)						
1	K4am	N-35-E	楕円形	4.98	3.08	3~10	緩斜	7	-	1	-	-	自然	縄文土器(火深鉢)	早摺後半	本跡→SK33

表3 陥し穴一覧表

番号	位置	長径(輪)方向	平面形	馬 墓		壁面	底面	覆土	ビット	土な出土遺物	参考 新石器時代～古 代	
				長径 (幅)(m)	短径(m)							
1	K3b	N-76-E	不整地内部	0.96	0.78	101	直立	平坦	人為	1	-	(SK1)
2	K3e	N-2'-W	圓丸改良形	1.32	0.86	26	直立	平坦	人為	1	-	(SK02)
3	K3o	N-53-W	長方形	1.02	0.96	96	直立	平垣	自然	-	-	(SK03)
4	K4n	N-85-E	楕円形	2.08	1.06	88	直立	平坦	自然	-	-	(SK04)
5	K4at	N-87-W	圓丸改良形	1.51	0.89	80	直立	平坦	人為	-	-	(SK05)
6	K1b	N-62-W	[圓丸改良形]	2.00	0.80	98	直立	平緩	自然	4	-	本跡→SK34 (SK14)

表4 繩文時代土坑一覧表

番号	位置	長径(輪)方向	平面形	馬 墓		壁面	底面	覆土	ビット	土な出土遺物	参考 新石器時代～古 代	
				長径 (幅)(m)	短径(m)							
20	K4as	N-60-E	楕円形	1.64	1.09	15~30	外傾	堆積	自然	-	縄文土器片	
23	K4ic	N-61-E	楕円形	2.00	1.18	25	外傾	緩斜	人為	-	縄文土器片	
24	K4ig	N-32-W	不整地内部	2.07	1.22	46	外傾	平坦	自然	-	縄文土器片	SK38→本跡
28	K4is	N-90-E	楕円形	2.12	1.46	52	緩斜	直状	人為	-	縄文土器片	
32	K4ds	N-55-W	楕円形	2.67	1.82	13~23	外傾	直状	自然	-	縄文土器片	
34	K4db	N-1-E	楕円形	1.54	1.05	50~60	外傾	直状	自然	-	縄文土器片	SK44→本跡
36	K4gi	N-25-E	不整地内部	1.30	1.16	30	外傾	直状	人為	-	縄文土器片	
38	K4ix	N-0'	楕円形	2.72	1.70	40	緩斜	直状	人為	-	石器, 刃片	本跡→SK24

表5 古墳時代土坑一覧表

番号	位置	長径(輪)方向	平面形	馬 墓		壁面	底面	覆土	ビット	土な出土遺物	参考 新石器時代～古 代	
				長径 (幅)(m)	短径(m)							
43	K4is	N-83-W	不整地円形	3.73	1.76	28~34	緩斜	直状	人為	-	土師器片	本跡→SK42

表6 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径(横)方向	平面形	周囲		底面	底面	墳上	ビット	手な出土遺物	備考 新規開発(1~4), その他
				長径(横)×短径(横)	深さ(cm)						
2	K3b	N-71°-E	不整円形	1.97 × 1.03	13~25	緩斜	平坦	自然	—	—	
3	K3a	N 28° E	(複円形)	2.68 × 1.26	24~28	緩斜	平坦	自然	—	—	
4	J3j	N-78°-E	椭円形	1.87 × 0.68	24	緩斜	凹状	自然	—	—	
5	K3a	N 0°	椭円形	2.00 × 0.94	18	緩斜	直状	自然	—	—	
6	K3a	N-60° W	椭円形	2.78 × 1.32	8~14	緩斜	平坦	自然	—	—	
7	K3a	N-52°-W	椭円形	2.32 × 1.17	12~17	緩斜	平坦	自然	—	—	
8	K3a	N-56° E	不整椭円形	2.03 × 1.04	9~40	緩斜	凹状	人為	—	—	
9	J3j	N 70° W	不整形	1.38 × 0.66	30	緩斜	直状	自然	—	—	
10	J3j	N-66°-E	不整形	1.10 × 0.71	11~21	緩斜	平坦	自然	—	—	
11	J4j	N-37° W	不整椭円形	2.48 × 1.04	15~51	外傾	平坦	人為	—	—	
15	K4i	N-17°-W	不整椭円形	2.32 × 1.05	25	緩斜	直状	自然	—	—	SK27→本跡
16	J4i	N 65° W	椭円形	1.32 × 0.85	22~66	緩斜	直状	人為	—	—	
17	J4i	N-30°-E	椭円形	1.28 × 0.96	9~21	緩斜	直状	人為	—	—	
18	J4j	N-28° E	椭円形	1.08 × 0.85	18~48	外傾	凹状	角燃	—	—	
19	J4j	N-48°-E	椭円形	1.93 × 1.18	14~21	緩斜	平坦	自然	—	—	
21	K4b	N-31°-W	椭円形	1.60 × 1.14	25	緩斜	平坦	自然	—	—	SK22-39と重複
22	K4b	N-37°-W	椭円形	1.27 × 0.98	40	緩斜	直状	自然	—	—	SK21-39と重複
26	J4j	N-62°-W	不整形	1.87 × 1.43	28~38	緩斜	直状	自然	—	—	
27	K4h	N-90°-E	椭円形	1.87 × 1.15	28~32	緩斜	平坦	自然	—	—	本跡→SK5
28	J4e	N-90°-E	椭円形	1.63 × 1.20	42	緩斜	直状	人為	—	—	
30	K4a	N-40°-E	不整椭円形	2.66 × 1.18	21	緩斜	平坦	自然	—	—	
31	K4a	N 76° W	椭円形	1.40 × 1.04	18	緩斜	平坦	人為	—	—	
33	K4a	N-80°-E	不整形	1.32 × 1.23	28~38	緩斜	平坦	自然	—	—	
35	K4e	N-90°-E	椭円形	2.98 × 1.68	28~30	緩斜	直状	自然	—	—	
37	K4e	N 90°-E	椭円形	1.26 × 0.53	15	緩斜	直状	自然	—	—	
38	K4b	N-29°-W	楕円良方形	1.95 × 1.25	18~20	緩斜	平坦	自然	—	—	
40	K4a	N-10°-E	不整形	1.43 × 1.25	25~30	緩斜	平坦	自然	—	—	
41	K4e	N 13°-E	楕丸長方形	2.60 × 1.18	40	緩斜	直状	自然	—	—	本跡・SK39
42	K4f	N-7°-W	椭円形	1.30 × 1.03	19~27	緩斜	平坦	自然	—	—	SK43→本跡

#### 第4節 まとめ

今回の調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡1軒、陥れ穴6基、土坑8基、古墳時代の土坑1基、時期不明の土坑29基が確認された。当遺跡の一部は、すでに平成13年度に当財團がI~V区の調査区を設定して一部発掘調査を実施している<sup>11</sup>。今回の調査区は、第5図に示したように、Ⅲ区に隣接する位置に当たる。これまでの調査結果を含めると、当遺跡は縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡であることが明らかになった。ここでは、確認された遺構と遺物の主体をなす縄文時代について概要を述べ、まとめとしたい。

#### 1 縄文時代の遺構について

確認された縄文時代の遺構のうち、竪穴住居跡は1軒である。平面形は椭円形で、ビットは8か所確認されたが、炉は確認されなかった。時期は遺物がほとんどないため明確ではないが、周辺に散布していた上器や土坑の分布などから、鶴ガ台式または茅山式などの条痕文系土器を有する早期後半と考えられる。周辺遺跡の

ほぼ同時期の住居跡としては、女都町東平遺跡<sup>2)</sup>で1軒、岡町石山神遺跡<sup>3)</sup>で5軒確認されている。当遺跡の住居跡分布や集落構成は明確ではないが、尾根部平坦面を中心にさらに広がっているものと推定される。

土坑のうち、形状と規模から陥し穴と推定される遺構は、6基が確認された。開口部の形状は、梢円形または圓丸長方形で、深さは76~104cmであった。すべて壁面は直立しており、短辺または短軸方向の断面形は、匁字状または逆台形状を呈していた。さらに、6基のうち3基の底面には、逆茂木を立てたと考えられるピットが検出された。これらの陥し穴の分布が、対の配置あるいは列状の配置<sup>4)</sup>となっていたのかなどを捉えることは、調査区域が既定されるため困難であった。しかし、いずれも標高88~91mの範囲内である。丘陵性台地の尾根部に近い緩斜面に立地していた。また、構築方法を見ると、長辺あるいは長軸方向を等高線に対して直交させているものが多い。捕獲の対象となった動物の通り道などを想定したものと考えられる。これらの陥し穴からの遺物はほとんどないため、時期の特定は困難であるが、前述の石山神遺跡や東平遺跡、岩瀬町松田古墳群<sup>5)</sup>など、周辺地域で調査されている例と比較すると、立地や構築状況、規模や形状が類似していることから、概ね早期後半から前期後半の時期と考えられる。さらに、陥し穴が確認された周辺の遺跡として、笠間市小糸遺跡、向原遺跡<sup>6)</sup>、岩瀬町高幡遺跡<sup>7)</sup>などが挙げられる。

今回の調査では住居跡と陥し穴などを確認したが、周辺遺跡の調査結果も含めて捉えると、吉田山北麓一帯の丘陵性台地上には陥し穴を構築した狩猟場が広く分布し、土地利用の様子をうかがうことができる。

## 2 繩文時代の遺物について

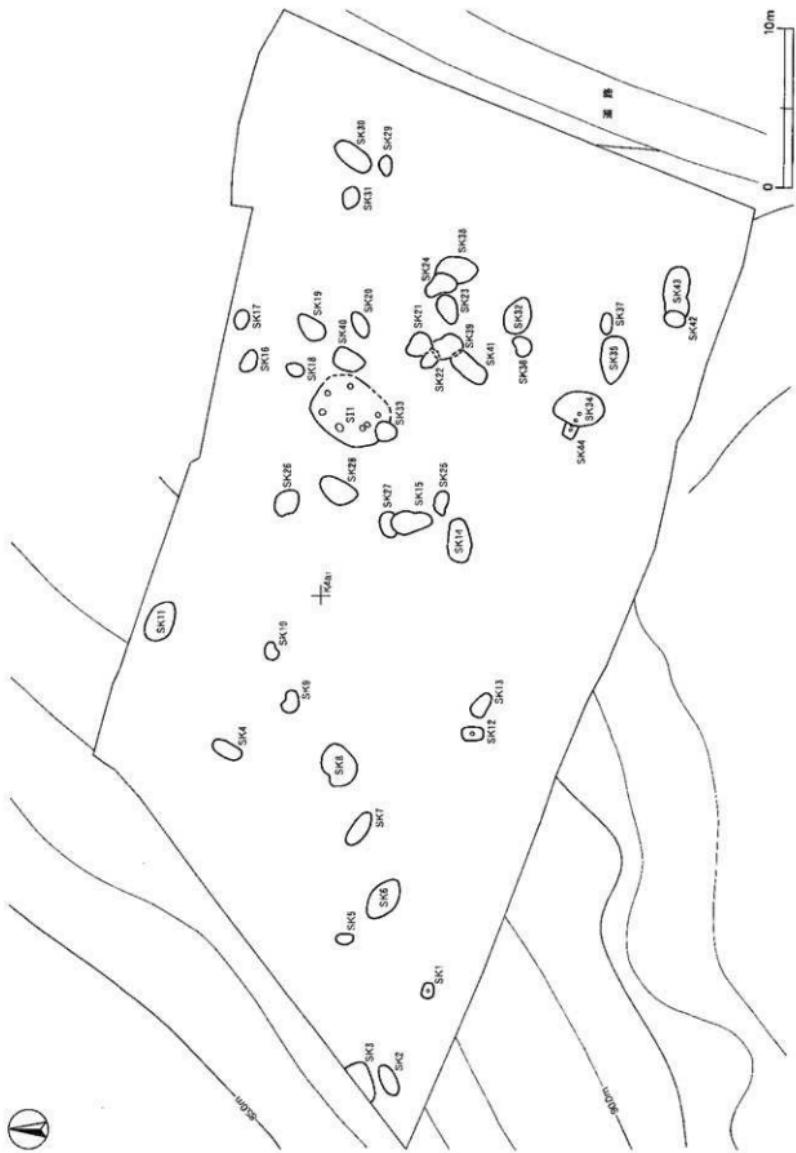
縄文時代の遺物は、縄文土器（深鉢）と石器（右鏡・石匙・凹石・石皿）などが出土している。これらの遺物は、遺構の覆土中および遺構確認時の表土中から出土したものが大半である。平成13年度の当財団調査によって出土した遺物を調査区別に見た場合、隣接のⅢ区から最も多く縄文土器と石器（右鏡）が出土している<sup>8)</sup>。出土した縄文土器を時期と上器型式にしたがって分類した結果では、早期後半の鶴ヶ島台式期・広義の茅山式期、前期後半の浮島式期・興津式期、中期の加曾利式期、後期の網取式期・堀之内式期の土器が確認されている。

今回の調査で出土した上器も、細片がほとんどであるが、早期と前期の土器を型式別に観察した結果では、早期中葉の田」「上層式期が加わるもの、同じ様相が見られた。中期と後期の土器は確認されなかった。

石器は石鑿の他に、今回の調査で新たに石匙、凹石、石皿が確認された。狩猟具である右鏡、動物の加工具としての右匙、堅果類や根茎の加工具と考えられる凹石・石皿などは、陥し穴の存在とともに、当遺跡における縄文時代の狩猟と植物採取を中心とした、牛業の一端を示していると言えよう。

- 1) 成島一也「中山道路 国道新第14-03-020-0-051号埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財团文化財調査報告』第204集（財）茨城県教育財团 2003年3月
- 2) 平松孝志「北関東台動車道（女都～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書III 寺山遺跡 東平遺跡 坂ノ上塚群」『茨城県立総合教育研究センター（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書 石山神遺跡』『茨城県教育財团文化財調査報告』第62集（財）茨城県教育財团 1990年9月
- 3) 上野修生「茨城県立総合教育研究センター（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書 石山神遺跡」『茨城県教育財团文化財調査報告』第62集（財）茨城県教育財团 1990年9月
- 4) 鈴木泰行「武田石高遺跡の陥し穴状遺構について」『武田石高遺跡 右鏡・縄文・弥生時代編』（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 1998年1月
- 5) 横倉要次「松田古墳群 北関東台動車道（女都～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書V」『茨城県教育財团文化財調査報告』第226集（財）茨城県教育財团 2004年3月
- 6) 茨城県教育財团「平成14年度調査遺跡の概要」『年報』22（財）茨城県教育財团 2003年6月
- 7) 6) に同じ
- 8) 1) に同じ

第23図 中山道跡遺跡全体図



A

## 第4章 福原打越塚群

### 第1節 遺跡の概要

福原打越塚群は、笠間市の南西部に位置し、吾国山から北西に延びる標高80m前後の丘陵性台地上に立地している。調査面積は577.0m<sup>2</sup>で、調査前の現況は山林であった。

今回の調査では、縄文時代の竪穴住居跡2軒、奈良・平安時代の土坑1基、近世の塚4基と墓壙2基、時期不明の土坑6基と構築1条が確認された。竪穴住居跡は、調査区のほぼ中央部と東部に位置し、時期はいずれも縄文時代の前期と考えられる。塚は調査区の中央部を南北に走る道路に沿って、列状に並んで構築されていた。墓壙は調査区南部の丘陵性台地の尾根部に近い緩斜面上に、2基が隣接して構築されていた。また、遺構や文化層は確認されなかつたが、旧石器時代の遺物も出土した。

遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)に1箱出土している。旧石器時代の遺物は、石器(剥片)である。縄文時代の遺物は、縄文土器片(深鉢)、石器(石鏃)である。奈良・平安時代の遺物は、土師器片(壺、甕)、須恵器片(壺、高台付壺、蓋)、土製品(紡錘車)である。近世の遺物は、瓦質土器(鉢)、陶器(小皿)、金属製品(鉛釘、煙管)、古錢(寛永通寶)などである。

このように、当遺跡は近世に塚が構築されるとともに、墓域が形成されていた。また、縄文時代には集落の一部であり、奈良・平安時代においても生活の痕跡が確認された。さらに、出土遺物からは旧石器時代から近世までの複合遺跡であることも明らかになった。

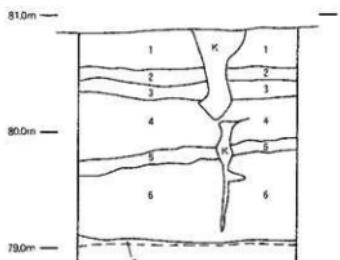
### 第2節 基本層序

調査区の西部(B 1c6 [X])に深さ約2mのテストピットを設定して、基本土層の観察を行った。(第24図)  
第1層 褐色の表土層で、鹿沼バミスが混じる。層厚は30~35cmである。

第2層 桂色のソフトローム層で、鹿沼バミスを少量含む。粘性と締まりはともに弱い。層厚は10~15cmである。

第3層 褐色のハードローム層である。粘性と締まりはともに強い。層厚は10~18cmである。

第4層 明褐色のハードローム層で、赤色粒子を中心含む。粘性と締まりはともに強い。層厚は35~60cmである。



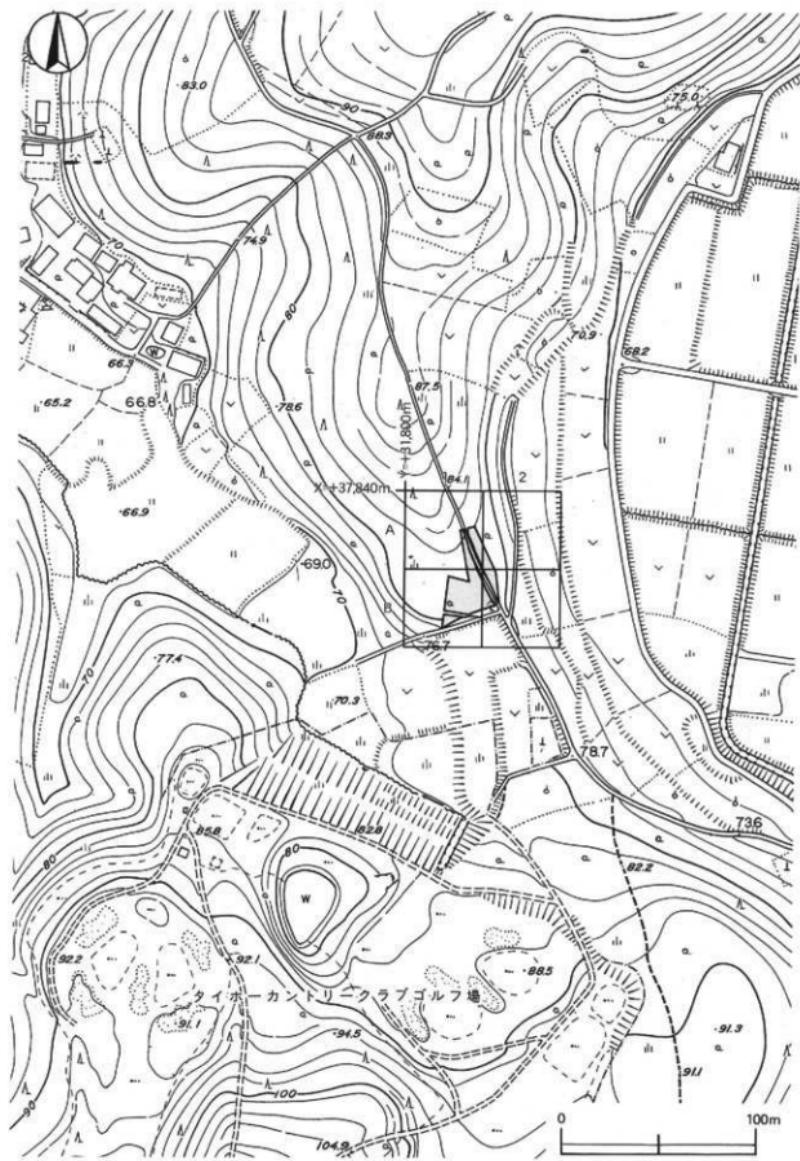
第24図 基本土層図

第5層 にぶい褐色のハードローム層で、鹿沼バミスを中量含み、鹿沼軽石層の漸移層と考えられる。粘性と締まりはともに強い。層厚は8~12cmである。

第6層 桂色の鹿沼軽石層である。粘性を欠くが締まりは強い。層厚は55~70cmである。

第7層 にぶい褐色のハードローム層で、鹿沼バミスを少量含む。粘性と締まりはともに極めて強い。以下、未掘のため木米の層の厚さは不明である。

遺構の多くは、第2層上面で確認され、第3層から第5層を掘り込んでいる。

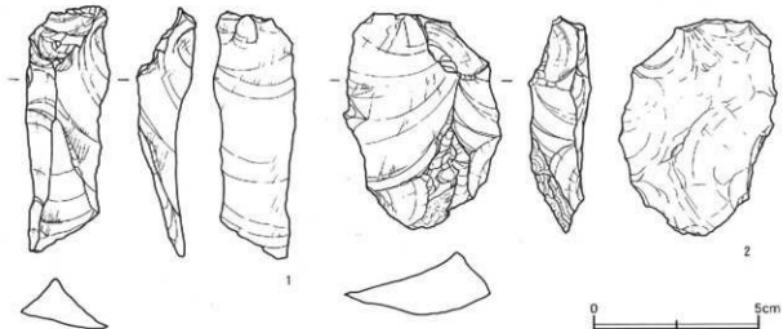


第25図 福原打越稼群調査区設定図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 旧石器時代の遺物（第26図）

調査区内の中央部に立地する塚群の調査の際に、第2号塚の南東部盛土下層から旧石器時代のものと考えられる剥片2点が出土した。そこで、塚群及び旧石器時代以外の遺構調査終了後、剥片の出土地点であるB 1c区を中心に、B 1bi区～B 2di区間に2m四方の調査グリッドを9か所設定し、基本層序の第5層上面までを掘り下げた。しかし、いずれの調査グリッドにおいても、旧石器時代の遺構や文化層は確認されなかった。また、石器や剥片等も出土しなかった。ここでは、第2号塚の南東部盛土下部から出土した剥片2点を、実測図と観察表で記載する。



第26図 旧石器時代の遺物実測図

#### 旧石器時代の遺物観察表(第26図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	剥片	7.7	2.6	1.8	16.4	頁岩	細長剥片。上部に打突痕、自然面残存。二次調整なし。	塚盛土下部	Q1 PL12
2	剥片	6.7	4.9	2.0	43.0	瑪瑙	大型剥片。裏面に自然面残存。二次調整なし。	塚盛土下部	Q2 PL12

#### 2 縄文時代の遺構と遺物

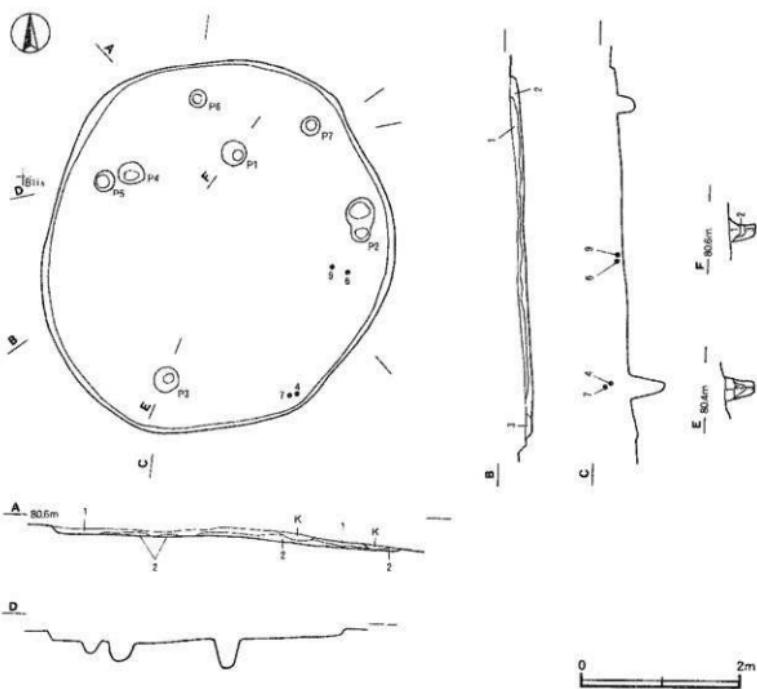
今回の調査で、竪穴住居跡2軒が確認された。調査区のほぼ中央部と東部に位置し、丘陵性台地の尾根部に立地していた。以下、遺構と主な出土遺物について記述する。

##### (1) 竪穴住居跡

###### 第1号住居跡（第27・28図）

**位置** 調査区中央部のB 1is区に位置し、丘陵性台地の尾根部上の緩斜面に立地している。

**規模と形状** 平面形は長径4.80m、短径4.28mの楕円形である。長径をもとにした主軸方向は、N-21°-Eである。壁は外傾して立ち上がり、確認された壁高は8~16cmである。



第27図 第1号住居跡実測図

**床** 地形に合わせて北東側から南西側に向かって、わずかに傾斜しているもののほぼ平坦である。床面は比較的綺麗が見られたが、硬化面は確認されなかった。

**炉** 確認されなかつた。

**ピット** 7か所。P1～P4は深さ10～46cmで、その規模と配置から主柱穴と考えられる。また、P5～P7は深さ16～24cmで、主柱穴と考えられるピットに沿った位置に存するところから補助柱穴と考えられる。

#### P1・P3土層解説

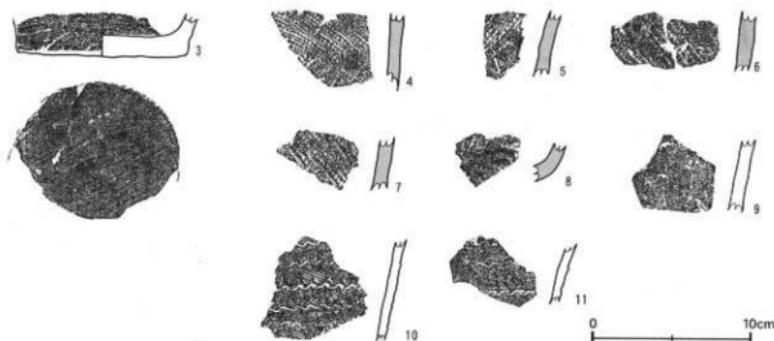
- |   |    |         |
|---|----|---------|
| 1 | 褐色 | コーム粒子中量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子中量 |

- |   |       |         |
|---|-------|---------|
| 3 | に赤・黄生 | ローム粒子多量 |
|---|-------|---------|

**覆土** 3層に分層される。全体に褐色土を基調とし、壁際から中央部に向かってレンズ状の堆積状況を示すことがから、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

- |   |    |         |        |   |    |         |        |
|---|----|---------|--------|---|----|---------|--------|
| 1 | 褐色 | コーム粒子中量 | 炭化粒子微量 | 3 | 褐色 | ローム粒子少量 | 炭化粒子微量 |
| 2 | 褐色 | に・ム粒子中量 |        |   |    |         |        |



第28図 第1号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 繩文土器片16点(胴部片15、底部片1)、自然縫5点が出土している。遺物は少量で、ほとんどが小破片である。第28図3・5・8・10・11は覆土中から、6・9は主に南東部を中心とした床面から、4・7は覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 出土土器の時期は、前期から中期まで時間的な幅が見られた。床面上からの出土土器及び遺構の形態から、時期は概ね縄文時代前期前半と考えられる。

第1号住居跡出土遺物観察表(第28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 滴	燒成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
3	縄文土器	深鉢	-	(2.7)	(0.8)	石英・長石・雲母	暗	普通	無文、胴部表裏面、底面ミガキ。	南東部覆土中	P3 10%

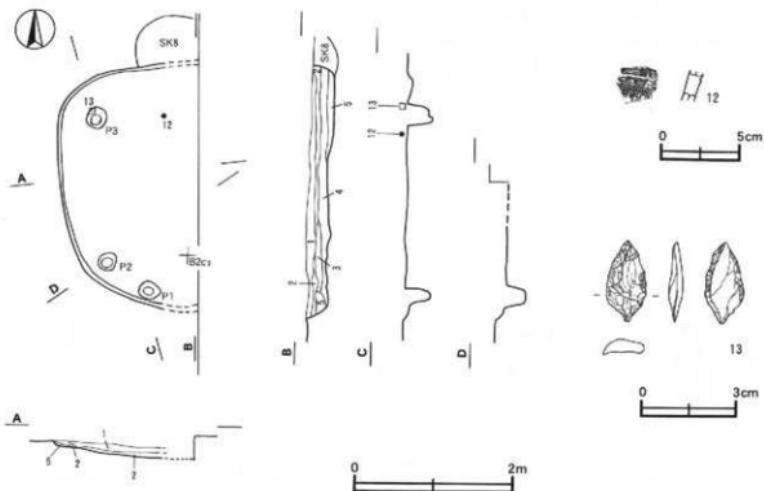
番号	種 別	器種	胎 土	色 滴	燒 成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
4	縄文土器	深鉢	長石・雲母・鐵錐	にぶい櫛	普通	附加条縄文施文、羽状構成。	南東部覆土下層	TP4 PL10
5	縄文土器	深鉢	長石・雲母・鐵錐	にぶい櫛	普通	附加条縄文施文、羽状構成。	覆土中	TP5
6	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母・鐵錐	にぶい櫛	普通	単節縄文施文。	東部床面	TP6 PL11
7	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母・鐵錐	にぶい櫛	普通	単節縄文施文。	南東部覆土下層	TP7 PL11
8	縄文土器	深鉢	長石・鐵錐	にぶい櫛	普通	単節縄文施文。	覆土中	TP8
9	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	櫛	普通	貝殻痕跡による爪形文施文。	東部床面	TP9
10	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	櫛	普通	羽状構成の単節縄文と横位の結節縄文施文。	覆土中	TP10
11	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にぶい赤櫛	普通	単節縄文と横位の結節縄文施文。	覆土中	TP11 PL10

第2号住居跡(第29図)

位置 調査区東部のB 2 bz 区に位置し、丘陵性台地の尾根部上の平坦面に立地している。

重複関係 北部の壁と床の一部は、第8号土坑を掘り込んで構築されている。

規模と形状 東側は調査区域外のため、全体の規模は明確にできないが、南北3.12mで、東西は1.78mまでが確認された。平面形は圓丸形または長方形と推定される。主軸方向は不明である。壁は外傾して立ち上がり、確認された壁高は20~31cmである。



第29図 第2号住居跡・出土遺物実測図

**床** ほぼ平坦である。調査した範囲内で、硬化面などは確認されなかった。

**炉** 調査した範囲内では、確認されなかった。

**ピット** 調査した範囲内では、3か所が確認された。P 1～P 3は深さ28～35cmで、その規模と配置から主柱穴と考えられる。

**覆土** 5層に分層される。全体的に褐色土を基調とし、粘性としまりは強い。壁際から中央部に向かってレンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1	褐	ローム粒子中量、炭化物極微量
2	褐	ロームブロック微量、炭化粒子極微量
3	暗褐	ローム粒子中量

4	褐	ロームブロック中量、炭化粒子極微量
5	褐	ロームブロック少量

**遺物出土状況** 繩文土器片1点(胴部片)、石器1点(石鏃)と、混入と考えられる土器片1点、須恵器片1点が出土している。第29図12は北部の覆土下層から、13は北西部の覆土下層からそれぞれ出土している。

**所見** 遺物がほとんどなく時期は明確ではないが、遺構の形態や第1号住居跡の立地と合わせ、縄文時代前期と考えられる。

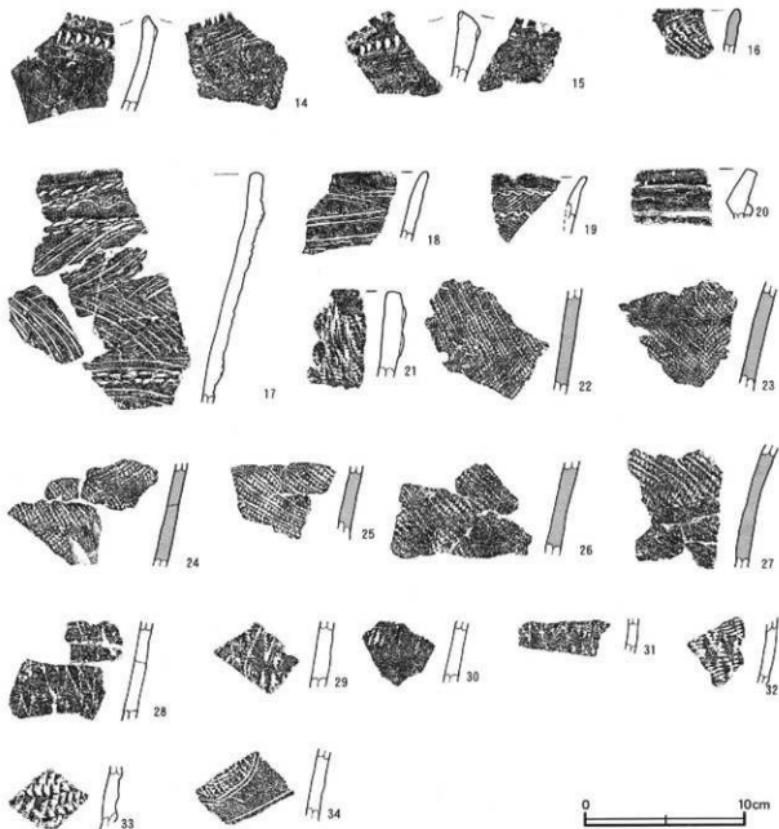
第2号住居跡出土遺物観察表(第29図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手 法 の 特徴	出土位置	備考
12	調文土器	深鉢	石英・長石	にせい黄褐色	普通	横位の沈鉢文底文。	北部覆土下層	TP12

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
13	石鏃	2.46	1.26	0.44	1.16	チャート	凸基有茎微。側縁押圧剥離。	北西部覆土下層	Q13 PL12

(2) 遺構外出土遺物 (第30図)

ここでは、調査区内の表土中から出土した遺物や、他時期の遺構への流れ込みまたは混入と判断された遺物のうち、特徴的なものを実測図と観察表で記載する。



第30図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表(第30図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
14	縄文土器	深鉢	石英・長石	に赤い褐色	普通	口唇部内外面に連続するキザミ施文。胴部表裏面擦痕状。	表土下	TP14 PL10
15	縄文土器	浅鉢	石英・長石	に赤い黃褐色	普通	口唇部内外面に連続するキザミ施文。胴部表裏面擦痕状。	表土中	TP15 PL10
16	縄文土器	深鉢	石英・鐵錆	に赤い褐色	普通	R.L.単頭縄文施文。	表土中	TP16 PL10
17	縄文土器	深鉢	石英・長石・雪母・赤色斑子	に赤い黃褐色	普通	半段竹管による方向の異なる平行比線文と横位の平行刺突文や文様構成。	表土中	TP17 PL10
18	縄文土器	深鉢	石英・長石・眞母	灰褐色	普通	模様の半截焼等による平行比線文施文。	表土中	TP18 PL10
19	縄文土器	深鉢	石英・長石・眞母	灰褐色	普通	口唇部押印。半状焼成の単頭縄文と横位の結節文施文。	表土中	TP19 PL10
20	縄文土器	深鉢	石英・長石・雪母	に赤い褐色	普通	無文。模様の陰燃貼付。	表土中	TP20 PL10
21	縄文土器	深鉢	石英・長石・眞母	に赤い黃褐色	普通	貝殻施錠による爪形文施文。	表土中	TP21 PL10
22	縄文土器	深鉢	石英・鐵錆	に赤い黃褐色	普通	附加条縄文施文。羽状構成。	表土中	TP22 PL11
23	縄文土器	深鉢	石英・鐵錆	に赤い黃褐色	普通	附加条縄文施文。羽状構成。	表土中	TP23 PL11
24	縄文土器	深鉢	石英・長石・赤色斑子・鐵錆	に赤い黃褐色	普通	附加条縄文施文。羽状構成。	表土中	TP24
25	縄文土器	深鉢	石英・長石・鐵錆	に赤い黃褐色	普通	附加条縄文施文。羽状構成。	表土中	TP25
26	縄文土器	深鉢	石英・長石・鐵錆	に赤い黃褐色	普通	R.L.単頭縄文施文。	表土中	TP26
27	縄文土器	深鉢	石英・長石・鐵錆	に赤い黃褐色	普通	R.L.単頭縄文施文。	表土中	TP27 PL11
28	縄文土器	深鉢	石英・長石・眞母	に赤い黃褐色	普通	貝殻施錠による爪形文施文。	表土中	TP28 PL10
29	縄文土器	深鉢	石英・長石・眞母	に赤い黃褐色	普通	貝殻施錠による爪形文施文。	表土中	TP29
30	縄文土器	深鉢	石英・長石・眞母	に赤い黃褐色	普通	貝殻施錠による爪形文施文。	表土中	TP30
31	縄文土器	深鉢	石英・長石・眞母	に赤い黃褐色	普通	貝殻施錠による爪形文施文。	TK1壁土中	TP31
32	縄文土器	深鉢	石英・長石・眞母	黒	普通	貝殻施錠による爪形文施文。	SK2壁土中	TP32
33	縄文土器	深鉢	石英・長石・眞母	に赤い黃褐色	普通	貝殻施錠による爪形文施文。	SK2壁土中	TP33
34	縄文土器	深鉢	石英・長石・赤色斑子	に赤い黃褐色	普通	平行凹凸による曲線状の区画と貝殻施錠による文様構成。	表土中	TP34 PL11

### 3 奈良・平安時代の遺構と遺物

今回の調査で、土坑1基が確認された。調査区の北部に位置し、丘陵性台地尾根部上の平坦面に立地している。以下、遺構と主な出土遺物について記述する。

#### (1) 上坑

##### 第6号土坑(第31図)

位置 調査区北部のA 2f: 1に位置し、丘陵性台地の尾根部上の平坦面に立地している。

規模と形状 長径1.64m、短径0.68mの長方形形で、深さは87cmである。壁は直立し、底面は平坦である。長径方向はN-72°Eである。

覆土 3層に分層される。壁際からレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

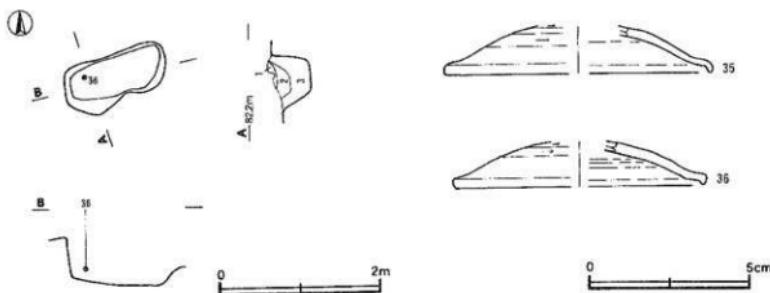
##### 土層解説

1 黒色 ローム粒子中量、鐵錆バミス少量  
2 白色 ロームブリッカ少量

3 に赤い褐色 ローム粒子多量、鐵錆バミス少量

遺物出土状況 積憲器片4点(蓋)が出土している。第31図35は覆土中、36は覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 性格は不明であるが、埋没過程で土器が投棄されたものと推定される。時期は、出土土器から8世紀後半と考えられる。



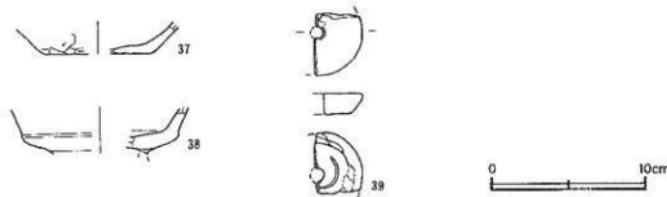
第31図 第6号土坑遺物実測図

第6号土坑出土遺物観察表(第31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
36	須恵器	盃	[6.2]	(2.9)	-	石英-長石-砂粒	灰	普通	ロクロ成形、天井斜面軸へラ削り、	現土中	P35 25%
36	須恵器	盃	[5.3]	(2.7)	-	石英-砂粒	灰-青緑	普通	ロクロ成形、天井斜面軸へラ削り、	内部覆土下部	P36 30%

#### (2) 遺構外出土遺物 (第32図)

ここでは、調査区内の表土中から出土した遺物や、他時期の遺構への流れ込みまたは混入と判断された遺物のうち、特徴的なものを実測図と観察表で記載する。



第32図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表(第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
37	須恵器	杯	(2.0)	[6.8]	石英-長石	灰-青緑	普通	ロクロ成形、体底部端子持ちへラ削り。	TK1盛土中	P37 15%	
38	須恵器	高台付壺	-	(3.0)	-	石英-長石-砂粒	灰-青	普通	ロクロ成形、体底部端子持ちへラ削り、	表土中	P38 10%

番号	種別	器種	幅	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
39	粘土車輪	(4.0)	(3.1)	1.4	(20.9)	長石-砂粒	灰	普通	上面へラナデ、下面手持ちへラ削り、車輪溝	TK1盛土中	P39 PLII

#### 4 近世の遺構と遺物

今回の調査で、塚4基と墓壙2基が確認された。塚は調査区の南部から北部に、墓壙は調査区の南部にそれぞれ位置し、丘陵性台地の尾根部平坦面に立地していた。以下、遺構と主な出土遺物について記述する。

##### (1) 塚

###### 第1号塚（第33図）

**位置** 調査区南部のB 2 di 区に位置し、丘陵性台地の尾根部上の平坦面に立地している。

**規模と形状** 基底部の平面形は、長径4.3m、短径3.9mのほぼ円形で、基底部から塚頂部までの高さは70cmである。北側の盛土部は、一部削平され原形をとどめていない。また、塚上部には2株の木根が覆っていた。

**構築状況** 4層からなる。旧表土面を基底部とし、褐色土を主体として盛上している。中央部から山状に積み上げているが、木根による搅乱も確認され、全体的に縮まりに欠ける歓らかい層からなる。

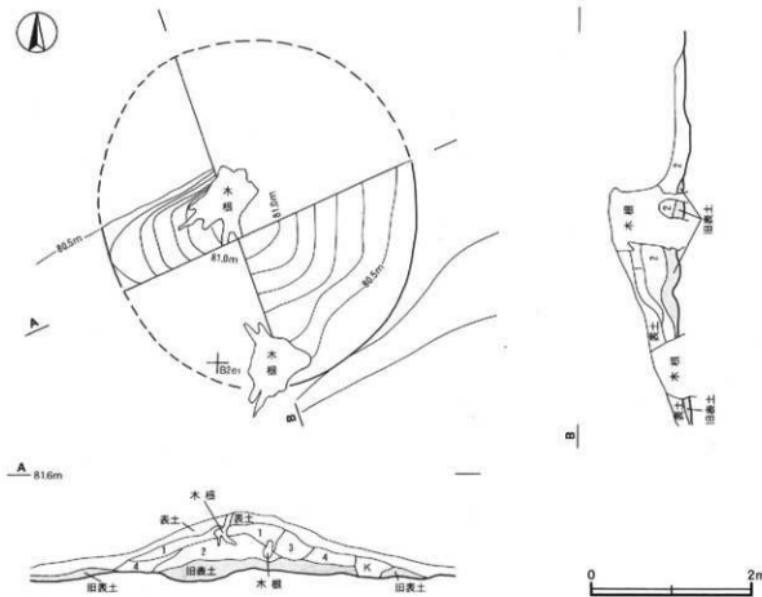
##### 土壤解説

1	褐	色	ローム粒子中量
2	褐	色	ロームブロック微量

3	褐	色	ローム粒子少量
4	褐	色	ロームブロック少量

**遺物出土状況** 盛土中から、築造時の混入と考えられる縄文土器片9点、土師器片4点、須恵器片4点、土製品1点（紡錘車）が出土している。

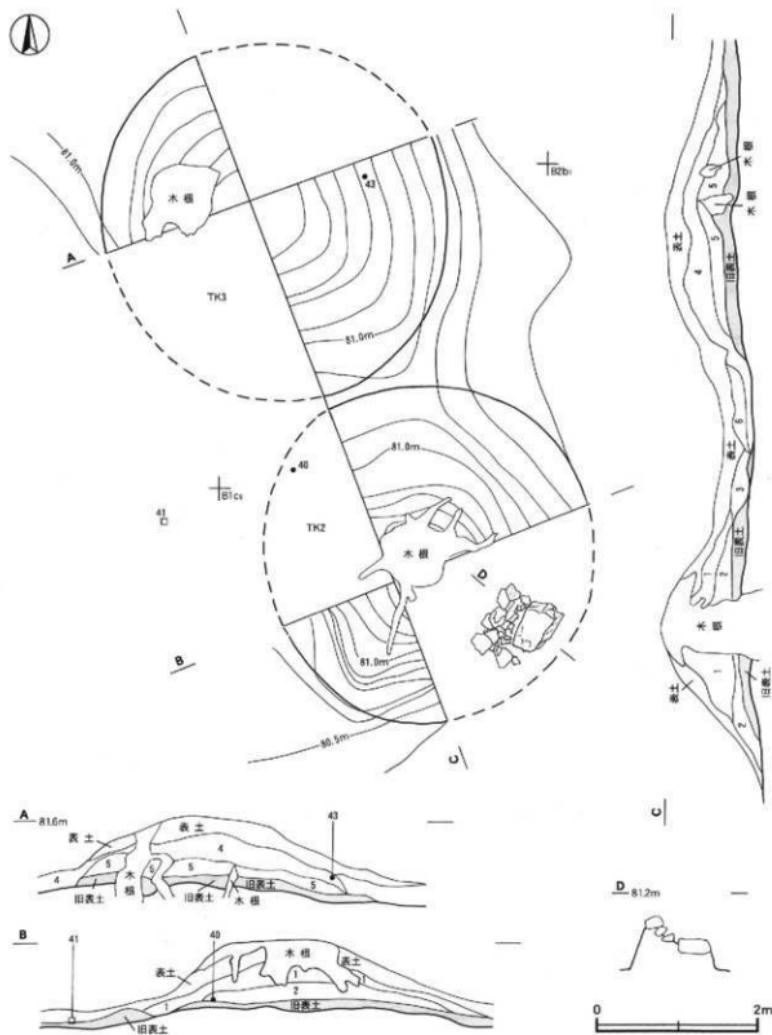
**所見** 時期は、築造状況から近世と考えられる。



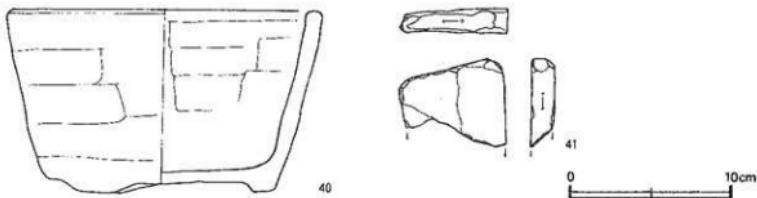
第33図 第1号塚実測図

第2号塚（第34・35図）

位置 調査区中央部のB 1 co 区に位置し、丘陵性台地の尾根部上の平坦面に立地している。



第34図 第2・3号塚実測図



第35図 第2号塚出土遺物実測図

**規模と形状** 基底部の平面形は、長径4.2m、短径4.0mの円形である。塚頂部は木根1株が覆っているため、基底部から塚頂部までの高さは明確でないが、約90cmである。裾部のくずれは比較的少ない。

**構築状況** 3層からなる。旧表土面を基底部とし、褐色土と灰褐色土を主体として盛土している。中央部から山状に積み上げているが、木根による擾乱も確認され、1・3層は縦まりに欠ける軟らかい層からなる。2層は比較的縦まりが見られる。また、南東部の盛土内からは、大形の自然石を平坦に掘え、周囲に自然縫を造られた階段状の石組みが確認された。

#### 土層解説

1	褐色	ローム段子多量
2	褐色	ローム段子少量

#### 3 段 色 コームブロック少量

**遺物出土状況** 南西側裾部の盛土上層から瓦質土器1点（鉢）と、焼造時の混入と考えられる繩文土器片2点、土師器片1点、陶器片2点、右製品1点（砥石）、剥片2点が出土している。第35図40は、塚の裾部から正位で出土している。信仰または供養に伴って掘えられたものと推定される。

**所見** 地元の方の話では、かつて石塔が建立されていたといでの、盛土内で確認された右組みは、建立時の基礎部分と推定される。時期は、築造状況から近世と考えられる。

第2号塚出土遺物観察表(第35図)

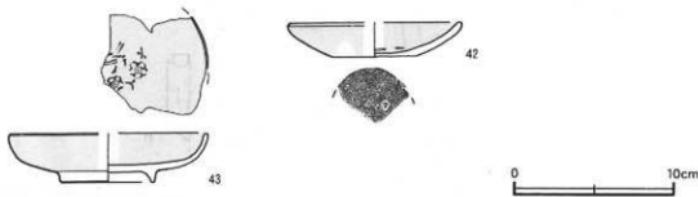
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重積	器種	底形	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
40	瓦質土器	身	19.1	11.3	13.6	石灰・黄土	灰黄褐色	普通	赤褐色・外側コロナグリ	深・内面・部剥起	北西側部盛土上 下層	P40	90%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重積	材質	特 池	出土位置	備考	
41	砥石	(5.4)	6.6	(1.5)	156.0	基灰骨	表面石粉附、2側面を砥面に使用	北西側部表土 中	P41	P41

第3号塚 (第34・36図)

**位置** 調査区中央部のB1b区に位置し、丘陵性台地の尾根部上の平坦面に立地している。

**規模と形状** 基底部の平面形は、長径4.5m、短径4.3mのほぼ円形である。基底部から塚頂部までの高さは80cmである。塚頂部付近には木根2株が存在しているが、全体の形状を比較的よくとどめている。



第36図 第3号塚出土遺物実測図

**構築状況** 3層からなる。旧表土面を基底部とし、褐色土を主体として盛土している。中央部から山状に積み上げているが、全体的に縮まりに欠ける軟らかい層からなっている。

**土層解説 (第1～3層は、第2号塚盛土)**

4 棕色 ローム粒子中量  
5 棕色 ロームブロック少量

6 褐色 ローム粒子多量

**遺物出土状況** 南西側裾部の盛土中から、第36図に示した陶器片2点が出土している。また、構築時の混入と考えられる須恵器片1点が出土している。

**所見** 時期は、築造状況から近世の塚と考えられる。また、裾部盛土中から出土した陶器片からは、長期間にわたって供養または信仰の対象となっていたことがうかがわれる。

第3号塚出土遺物観察表(第36図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
42	陶器	皿	[10.6]	2.2	[5.2]	長石・砂粒	にじい・黄橙	良好	底部回転ヘラ削り。体部内・外面錐削。内面重ね塗き痕有り。	盛土中	P42 30%
43	陶器	皿	[12.2]	3.1	[5.8]	砂粒	浅黄色	良好	底部回転ヘラ削り。体部内・外面錐削。井粒。内面錐削による梅花文。	東部盛土中	P43 30%

第4号塚 (第37図)

**位置** 調査区北部のA 2 es 区に位置し、丘陵性台地の尾根部上の平坦面に立地している。

**規模と形状** 北側と東側の裾部は調査区域外に伸び、西側は道路によって削平されている。また、塚頂部は削平され、盛土の崩落も著しい。そのため、基底部の平面形は明確にできない部分があるが、径約4.0mで、基底部から塚頂部までの高さは30cmほどが確認された。

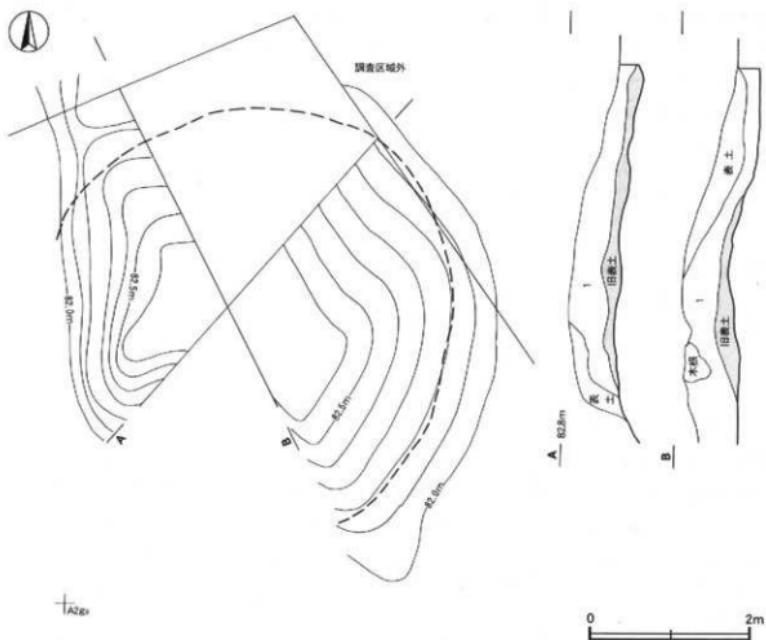
**構築状況** 単一層である。上層は削平と崩落により遺存していない。旧表土面を基底部とし、褐色土を盛土している。中央部から山状に積み上げているが、全体的に縮まりに欠ける軟らかい層からなっている。

**土層解説**

1 棕色 ローム粒子少量

**遺物出土状況** 盛土中から、構築時の混入と考えられる土師器片3点が出土している。

**所見** 時期は、築造状況から近世の塚と考えられる。

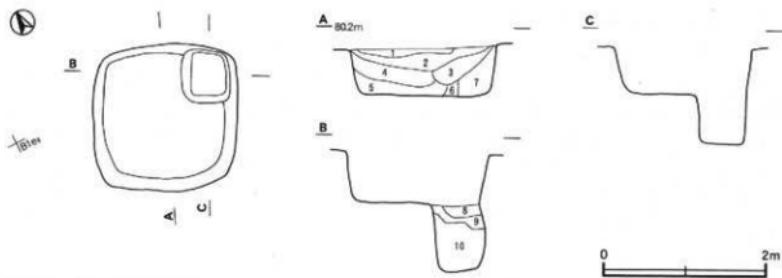


第37図 第4号塚実測図

## (2) 墓 塚

### 第1号墓塚（SK1）（第38図）

位置 調査区南部のB1es区に位置し、丘陵性台地の尾根部上の緩斜面に立地している。



第38図 第1号墓塚実測図

**規模と形状** 一边が1.80mの方形で、南北軸をもとにした主軸方向は、N-27°-Eである。二段の掘り込みを有し、上段部の深さは65cmである。壁はほぼ直立しており、底面は平坦である。下段部の掘り込みは北東コーナー部に位置し、一边が0.6mの方形で深さは80cmである。壁は直立しており、底面は平坦である。

**覆土** 10層に分層される。ブロック状に人為的な埋設がなされたと考えられる。

#### 土層解説

1	褐	色	ローム粒子多量、鹿沼バミスブロック少量	6	褐	色	ローム粒子少量、鹿沼バミスブロック少量
2	褐	色	ロームブロック・鹿沼バミスブロック少量	7	褐	色	ロームブロック多量
3	褐	色	ロームブロック中量、鹿沼バミスブロック少量	8	褐	色	ローム粒子「輪」
4	褐	色	ロームブロック・鹿沼バミスブロック中量	9	褐	色	ローム粒子中量、鹿沼バミス少量
5	褐	色	ローム粒子多量、鹿沼バミスブロック少量	10	褐	色	鹿沼バミスブロック・ローム粒子中量

**遺物出土状況** 下段部掘り込みの底面から、鉄製品（釘片）と人骨片が出土している。また、上段部の覆土中から、埋設時の混入と考えられる甌文土器片1点が出土している。

**所見** 時期は、隣接する第2号墓塙と類似の形態を呈していることから、近世と考えられる。

#### 第2号墓塙（SK2）（第39図）

**位置** 調査区南部のB 1m 区に位置し、丘陵性台地の尾根部上の緩斜面に立地している。

**規模と形状** 一边が1.90mの隅丸方形で、南北軸をもとにした主軸方向は、N-10°-Eである。二段の掘り込みを有し、上段部の深さは60cmである。壁はほぼ直立しており、底面は平坦である。下段部の掘り込みは中央部に位置し、一边が0.7mの方形で深さは65cmである。壁は直立しており、底面は平坦である。

**覆土** 10層に分層される。ブロック状に人為的な埋設がなされたと考えられる。

#### 土層解説

1	暗	色	ローム粒子・鹿沼バミス少量、炭化粒子少量	6	明	色	ロームブロック・鹿沼バミスブロック少量
2	暗	褐色	ローム粒子・鹿沼バミス中量、炭化粒子中微量	7	暗	色	ローム粒子多量、炭化粒子中微量
3	褐	色	ローム粒子中量、鹿沼バミス少量	8	褐	色	ローム粒子中量、鹿沼バミス少量
4	褐	色	ローム粒子中量、鹿沼バミス少量、炭化粒子微量	9	褐	色	ローム粒子「輪」、鹿沼バミスブロック微量
5	褐	色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	10	褐	色	ローム粒子中量、鹿沼バミス少量

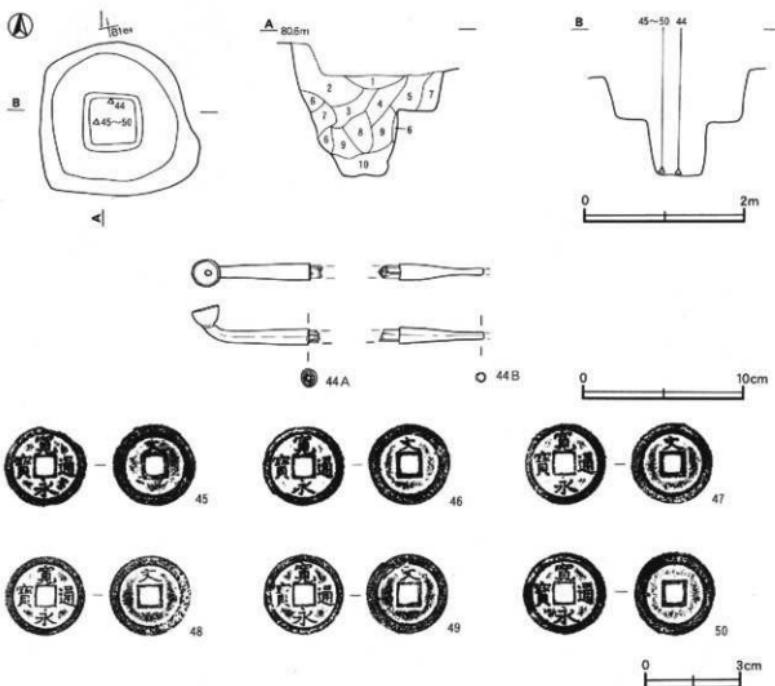
**遺物出土状況** 下段部掘り込みの底面から、鉄製品1点（釘片）、銅製品1点（煙管）、古錢6点（寛永通寶）と人骨片が出土している。

**所見** 時期は、出土遺物及び構造の形態から、17世紀末以降と考えられる。

#### 第2号墓塙出土遺物観察表（第39図）

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	種類	出土位置	備考
44A	煙管(銀削)	(7.2)	1.7	2.4	9.25	銀	リク付管残存、大正御門形。	銀煙管	中央部底面	M44 PL12
44B	煙管(銀)	(6.5)	1.0	1.0	4.46	銀	リク付管残存、藤垂御。被口部分崎欠損。	銀煙管	中央部底面	M44 PL12

番号	類名	径	丸幅	重巻	初期年	材質	特	種	出土位置	備考
45	寛永通寶	2.53	0.59	3.16	1668	銅	新寛永、文鏡、銅一文鏡。	新寛永	中央部底面	M45 PL12
46	寛永通寶	2.54	0.58	4.22	1668	銅	新寛永、文鏡、銅一文鏡。	新寛永	中央部底面	M46 PL12
47	寛永通寶	2.54	0.59	4.20	1668	銅	新寛永、文鏡、銅一文鏡。	新寛永	中央部底面	M47 PL12
48	寛永通寶	2.50	0.60	3.70	1668	銅	新寛永、文鏡、銅一文鏡。	新寛永	中央部底面	M48 PL12
49	寛永通寶	2.52	0.61	3.60	1668	銅	新寛永、文鏡、銅一文鏡。	新寛永	中央部底面	M49 PL12
50	寛永通寶	2.59	0.60	3.50	1667	銅	新寛永、無背鏡、銅一文鏡。	新寛永	中央部底面	M50 PL12



第39図 第2号墓壙・出土遺物実測図

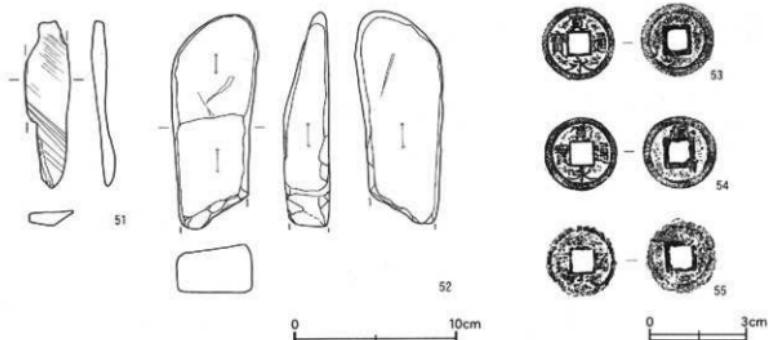
### (3) 遺構外出土遺物（第40図）

ここでは、調査区内の表土中から出土した遺物や、他時期の遺構への流れ込みまたは混入と判断された遺物のうち、特徴的なものを実測図と観察表で記載する。

遺構外出土遺物観察表(第40図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特　　徴	出土位置	備　　考
51	砾石	(0.2)	2.80	(1.0)	(21.5)	粘板岩	表面剥離。1面を砥面に使用。	表土中	M51 PL11
52	砾石	(3.2)	(5.4)	2.8	(320)	砂岩	4面を砥面に使用。	表土中	M52 PL11

番号	銭名	径	孔幅	重減	初期年	材　質	特　　徴	出土位置	備　　考
53	寛永通寶	2.29	0.67	1.96	1697	銅	新寛永。無背銘。闕一文銭。	表土中	M53 PL12
54	寛永通寶	2.29	0.65	2.34	-	銅	新寛永。背面□。闕一文銭。	表土中	M54 PL12
55	江戸通寶	2.26	0.70	1.34	-	銅	銭種不明。無背銘。	表土中	M55 PL12



第40図 遺構外出土遺物実測図

## 5 その他の遺構

今回の調査で、時期および性格不明の土坑6基と溝跡1条が確認された。これらの遺構については、一覧表で掲載し、平面図は全体図（第41図）で示すことにする。

表7 繩文時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規 模		床面	壁構	内部施設				覆土	主な出土遺物	時 期	備 考 新旧関係(↓→ 新),その他	
				長径×短径(m)	深さ(cm)			三式	竪穴	ヒト	三脚					
1	B1ia	N-21°-E	椭円形	4.80 × 4.28	8~16	平坦	-	4	-	3	-	-	自然	縄文土器(深鉢)	前期前半	
2	B2bu	-	圓角方形 (3.22) × (1.70) ±1.82m	20~31	平坦	-	3	-	-	-	-	-	自然	縄文土器(深鉢), 石器	前期	S88→木葬

表8 奈良・平安時代土坑一覧表

番号	位置	長径(輪)方向	形 状	規 模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備 考 新旧関係(↓→ 新),その他
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
6	A2f1	N-72°-E	長楕円形	1.64 × 0.68	87	直立	平坦	自然	須恵器(蓋)	

表9 塚一覧表

番号	位置	長径(輪)方向	平面形	規 模		主な出土遺物	時 期	備 考 新旧関係(↓→ 新),その他
				長径×短径(m)	高さ(cm)			
1	B2di	-	円形	4.30 × 3.90	70	-	-	近世
2	B1ce	-	円形	4.20 × 4.00	90	瓦質土器(鉢)	-	近世
3	B1be	-	円形	4.60 × 4.30	80	陶器(小皿)	-	近世
4	A2e1	-	[円形]	[4.00] × [4.00]	[30]	-	-	近世

表10 墓壙一覧表

番号	位置	長径(幅)方向	形状	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係(付・ 新),その他
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	B10e	N 27° E	方形	1.90 × 1.90	65~145	直立	平坦	人為	鉄片, 人骨片	
2	B10e	N-10°-E	楕円形	1.80 × 1.80	60~125	直立	平坦	人為	吉賀(鹿児島), 墓石, 鉄片, 人骨片	

表11 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径(幅)方向	形状	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係(付・ 新),その他
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
3	B11e	N 43° E	椭円形	1.25 × 0.64	38	外傾	亂状	自然		SD-L-木砂
4	B14e	-	円形	1.12 × 1.10	22	縦斜	凹凸	自然		
5	A2e	N 33° E	長楕円形	2.45 × 1.10	25	縦斜	平坦	人為		
7	B1de	N 16° E	椭円形	0.88 × 0.62	32	外傾	平坦	人為	-	
8	B2he	-	円形	0.82 × (0.38)	30	縦斜	乱状	自然	-	本跡-S12
9	B11e	N 87° E	椭円形	1.32 × 0.90	46	平坦	外傾	自然		

表12 溝跡一覧表

番号	位置	長径(幅)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係(付・ 新),その他	
				長さ(m)	上幅(m)						
1	B12e <sup>a</sup> B12d <sup>b</sup>	N-16°-W	直線状	5.5	0.36~ 0.65	0.20~ 0.45	18~38	縦斜	亂状	自然	本跡-S3

## 第4節 まとめ

今回の調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡2軒、奈良・平安時代の上坑1基、近世の塚4基と墓壙2基、時期不明の上坑6基と溝跡1条が確認された。また、遺構に伴わないものの、旧石器時代の剥片も出土したことから、旧石器時代から近世までの複合遺跡であることが明らかになった。ここでは、各時代別に遺構と遺物について概要を述べ、まとめとしたい。

### 1 旧石器時代

旧石器時代の遺物は、第2号塚の下部から貝殻と瑪瑙製の剥片2点が出土している。調査では出土地点を中心とし、基本層序の第5層であるハードローム層上面まで掘り下げたが、遺構や文化層、共存する石器群などを確認することはできなかった。笠間市内で旧石器時代単独の遺跡は未確認であるが、縄文時代などと複合した遺跡から遺物が出土している。本戸地区の石崎遺跡と本戸城跡<sup>21</sup>では細石刃が、片庭地区の西田遺跡<sup>22</sup>では御子柴型の石斧がそれぞれ確認されている。また、隣接する岩瀬町東部の高幡地<sup>23</sup>からは槍先形尖頭器が、松田古墳群<sup>24</sup>からはナイフ形石器と石核、剥片などが出土している。

このように周辺地域の丘陵性の台地上において、旧石器時代の遺物が確認された遺跡は確実に増えている。今後は、安定した層位において石器群などが発見され、詳細な検討が進められることに期待したい。

## 2 縄文時代

縄文時代の堅穴住居跡2軒は、調査区中央部と東部に位置し、いずれも丘陵性台地の尾根部上に立地していた。第1号住居跡は楕円形で、ピット7か所が確認されたが、がは確認されなかった。出土土器は、前期前半の関山式と中期初頭の下小野式が主体であるが、床面上から出土した土器から、時期は前期前半と考えられる。第2号住居跡は、一部調査区域外ではあるが、隅丸方形または長方形と推定される。遺物がほとんどないが、時期は第1号住居跡とほぼ同時期と推定される。

遺構に伴わない縄文土器は、早期後葉の条痕文系、前期前半の関山式・黒浜式、前期後半の浮島式・興津式、中期初頭の下小野式期の土器などが確認された。住居跡の時期と比較すると、時期的な幅に広がりが見られる。

縄文時代の遺跡は、笠間市内で71遺跡、岩瀬町内で19遺跡ほどが、これまでに確認されている。笠間市内における縄文時代の遺跡の立地環境を見ると、早・前期の遺跡は、市域北部や南部の標高75m以上の丘陵性台地上に立地する傾向が捉えられている<sup>3)</sup>。当遺跡も同様な立地条件のもとに、生活の場が形成されていたことが明らかになった。早・前期以外では、中期初頭の下小野式と考えられる土器が含まれていた。この時期の土器が確認された遺跡としては、隣接する友部町寺山遺跡<sup>4)</sup>などがあるが、遺跡数は少なく貴重な資料である。

## 3 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構としては、調査区北部で土坑1基が確認された。性格は不明であるが、埋没過程で須恵器の蓋が投棄されたと考えられる。遺構外からも須恵器の壺や紡錘車が出土している。居住活動を示す住居跡などは調査区内で確認されなかつたが、当遺跡に近接して福原原遺跡が所在している。平成3年度に発掘調査が実施され、8世紀後葉の住居跡4軒が確認されている<sup>5)</sup>。時系列的にも位置的にも、関連性が十分に示唆される。

## 4 近世

近世の遺構は、塚4基と墓壙2基が確認された。塚は、調査区中央を南北に通る道路に面して、南部に3基と北部に1基が築造されていた。第1～3号塚はほぼ同じ規模を有し並んで立地していた。第4号塚は、道路の改修などによって一部削平されているとともに、盛土の崩落も見られ遺存状態は良好ではなかつた。

特に、第2号塚の道路に面した南東部盛土内からは、石塔建立時の基礎部分と考えられる石組が確認された。いずれの塚にも右塔自体は存在しなかつたが、北側の調査区域外には、平保元(1716)牛建立の「南無阿弥陀佛」と刻まれた百万遍供養塔、安永6(1777)年に建立された如意輪觀音像の十九夜供養塔、天明元(1781)牛建立の廿三夜供養塔などが祀られている。これらの右塔は、笠間市内では比較的多く確認されている種類<sup>6)</sup>であり、かつては塚に伴っていたものが移設された可能性も十分に考えられる。塚の周囲からは、わずかに遺物も出土しており、長期間にわたって人々の信仰の対象であったことがうかがわれる。

墓壙2基は、2段掘り込みの形態を有していた。笠間市内では向原遺跡<sup>7)</sup>でも確認されており、類例の増加によって、埋葬方法や形態について詳細な検討が可能になると思われる。

1) 笠間市史編さん委員会「笠間市道路分布調査報告書」『笠間市史資料』第5集 笠間市史編さん委員会 1992年3月  
2) 内野 元 加藤博文著「笠間市内丘崩跡の研究—縄文時代における石壠の製作と流通に関する研究—」『筑波大学先史学・考古学研究調査報告』7 筑波大学歴史・人類学系 1996年3月

3) 岩瀬町史編さん委員会「岩瀬町史 通史編」岩瀬町 1987年3月

4) 横倉要次「松田古墳群 北関東自動車道(友部～水戸)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書V」『茨城県教育財团文化財調査報告』第226集 (財)茨城県教育財团 2004年3月

5) 1)に同じ

6) 平松孝志「北関東自動車道(友部～水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書III 寺山遺跡 東平遺跡 坂ノ上塚群」『茨城県教育財团文化財調査報告書』第150集 (財)茨城県教育財团 1999年3月

7) 萩原義典「福原原遺跡」『笠間市埋蔵文化財調査報告書』第8集 笠間市教育委員会 福原市福原原遺跡発掘調査会 1995年3月

8) 石塚光男「笠間の礼寺と庶民の信仰」『笠間市史 上巻』笠間市 1993年12月

9) 茨城県教育財团「平成14年度調査遺跡の概要 向原遺跡」『年報』22 (財)茨城県教育財团 2003年6月



第41図 福原打越塚群遺構全体図

## 第5章 上加賀田宮後東遺跡

### 第1節 遺跡の概要

上加賀田宮後遺跡は、平安時代と近世の複合遺跡である。調査前の現況は畠地で、調査面積は1861.68m<sup>2</sup>である。調査の結果、平安時代の遺構は堅穴住居跡6軒、土坑1基。近世の遺構は掘立柱遺物跡3棟、井戸跡1基、また時期不明の遺構として土坑47基、ピット群1群を確認した。

遺物は、遺物コンテナ(60×40×20cm)に6箱出している。出土した主な遺物は土師器(环、碗、高台付皿、瓶)、須恵器(环、蓋)、灰釉陶器(碗)、土師質土器(火鉢、櫛鉢)、瓦質土器(火鉢)、石製品(支脚、砥石)、漆製品(支脚)である。

### 第2節 基本層序

B-2b区にテストピットを設定し、約1.9m掘り下げる基本土層の観察を行った。

第1層は表土で、層厚は25~30cmである。暗褐色で炭化粒子、焼土粒子を含み縮まりはあるが粘性はない。

第2層は、褐色をしたソフトローム層で、層厚は25~62cmである。炭化粒子、焼土粒子、白色粒子を含み粘性・縮まりがある。

第3層は、第2層よりやや暗い褐色をしたソフトローム層で、層厚は20~35cmである。白色粒子などを多く含んでおり、粘性・縮まりがある。

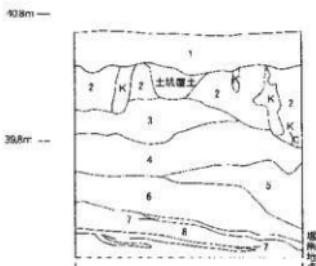
第4層は、浅黄橙色をした粘土層で、層厚は、10~35cmである。白色粒子・赤色粒子などを含んでおり、粘性・縮まりがある。

第5層は、黄橙色をした粘土層で、層厚は15~55cmである。直径1~5mmほどの白色粒子などを非常に多く含んでいる。また、鉄分を斑点状に含有しており粘性・縮まりがある。

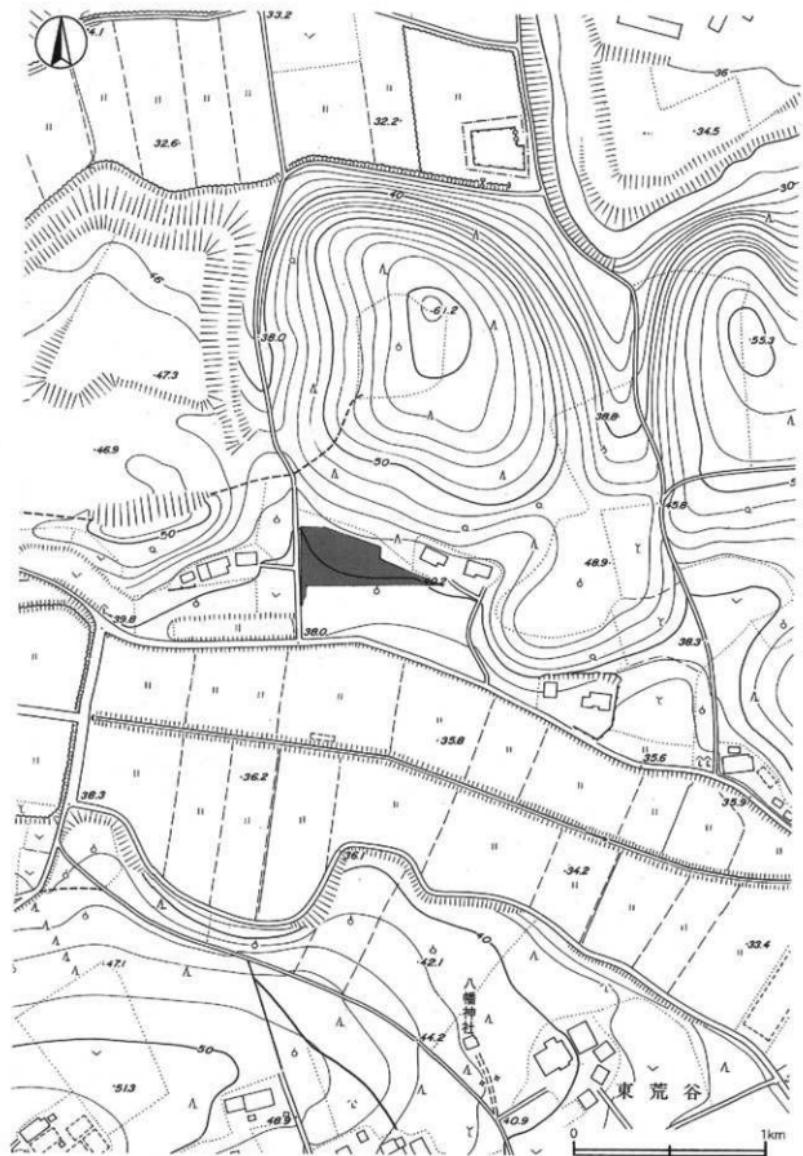
第6層は、第5層よりもやや暗い黄橙色をした砂層で、層厚は10~35cmである。直径1~5mmほどの白色粒子、石英粒を非常に多く含んでいる。鉄分が多いためやや赤みを帯びており、縮まりはあるが粘性はない。

第7層は、黄色を呈しており、鉄分で形成されている層であり、層厚は5cmほどである。縮まりがある。

第8層は、灰白色をした砂層で、層厚は約20cmである。直径5mmほどの白色粒子、石英粒などで形成されており、鉄分を斑点状に含有している。



第42図 基本土層図



第43図 上加賀田宮後遺跡調査区位置図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 平安時代の遺構と遺物

今回の調査では、堅穴住居跡6軒、土坑1基が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。

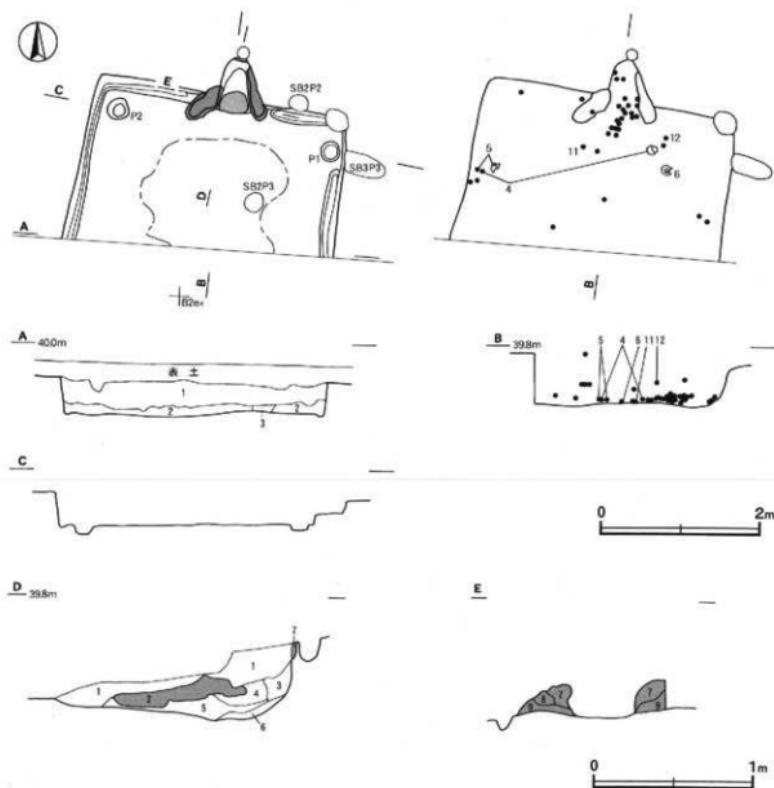
##### (1) 堅穴住居跡

###### 第1号住居跡(第44・45図)

位置 B2d区に位置し、丘陵裾部に立地している。

重複関係 第2号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 南壁側が調査区域に延びている。南北軸は2.10mのみ確認され、東西軸が3.34mの方形と推定され、主軸方向はN-6°-Eである。壁高は40~45cmであり、垂直に立ち上がっている。



第44図 第1号住居跡実測図

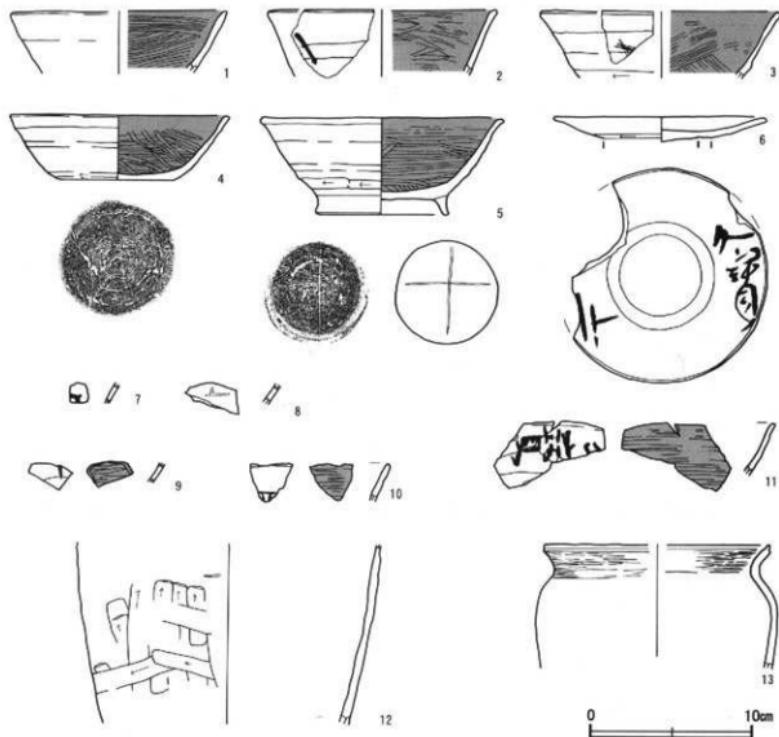
**床** 平坦である。硬化面は竈前方から中央部にかけて確認された。壁溝は北東コーナー一部で途切れているが、各壁に巡っている。

**竈** 北壁中央部に付設されており、焚き口部から煙道部まで70cm、壁外への掘り込みは54cmである。袖部幅は44cmであり、床面に砂質粘土を貼り付け構築されている。火床部は床面と同じ高さであり、火床面が弱く赤変している。

#### 竈土層解説

1	暗褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子少量	6	暗褐色	焼土粒子多量、炭化粒子微量
2	西黄褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量	7	赤褐色	焼土粒子多量
3	赤褐色	焼土粒子多量	8	赤褐色	ローム粒子・焼土粒子中量
4	暗褐色	焼土・粘土ブロック中量、炭化粒子微量	9	黄褐色	ローム粒子中量
5	褐色	焼土粒子中量、炭化粒子・粘土粒子少數、ローム粒子微量			

**ピット** 2か所。P1・P2は主柱穴と考えられ、それぞれ北東・北西コーナー部付近にある。深さは18~22cmである。



第45図 第1号住居跡出土遺物実測図

**覆土** 3層からなる。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 基盤色 ローム粒子・焼土粒子・小礫
- 2 基盤色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・鐵粉

3 地質名 鉛質粘土中量

**遺物出土状況** 士師器片104点(环45, 楔21, 高台付近11, 燐27), 須恵器片2点(燒)が出土している。各壁際の床面および覆土下層から出土しており、中央部からの出土はわずかである。特に窓内および竪前方の覆土下層に集中している。1・2・7・9・10・13は覆土から、3は窓内側上と北西壁付近の覆土から出土した破片が接合したものであり、4は西壁際と竪前方の覆土下層から出土した破片が接合したものである。5は西壁際の覆土下層から斜傾で、6は竪前方や東壁寄りの床面から、8は竪右袖内から、11・12は竪前方の床面および竪上層から出土している。

**所見** 時期は、須恵器供器具が出土していないことおよび出土土器から9世紀末葉と考えられる。

第1号住居跡出土遺物観察表(第45図)

番号	種別	基盤	目録	器名	底質	着上	色調	施成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
1	土師器	环	13.4	(3.9)	-	赤色粒子・焼土・小礫	にぶい粒	普通	内面ハラミガキ	覆土	20% 内面黒色地斑
2	土師器	环	13.2	(4.1)	-	石英・長石・漂母	にぶい粒	普通	表面ハラミガキ	覆土	5% 黑色 体色 模様 7% 内面黒色地斑
3	土師器	外	13.0	(4.2)	-	石英・長石・漂母	にぶい粒	普通	内面ハラミガキ、底面ハラミガキ	窓内・北西壁 付近・覆土	10% 黑色 体色 模様 内面黒色地斑
4	土師器	环	13.6	4.0	6.8	石英・白色粒子	にぶい粒	普通	内面ハラミガキ、底面ハラミガキへ 刷毛、毛刷痕・小切欠	土師器・埴輪 方墻土下層	95% 内面黒色地斑
5	土師器	窓	15.0	5.9	8.0	赤色粒子・白色 粒子	にぶい粒	普通	内面ハラミガキ、底面下端ハラ ミガキへ、底面下部へより底面むき 出し	窓側・覆土 下層	90% ハラミガキ 黑色 10% 内面黒色地斑 H.23
6	土師器	高台付近	13.3	(1.1)	-	石英・長石・漂母	にぶい粒	普通	内面ハラミガキ、本体下端ハラ ミガキへ、底面下部へより底面むき 出し	竪前方床面 付近	70% 黑色 体色 模様 10% 黑色 体色 模様 内面黒色地斑 H.21
7	土師器	环	-	(1.3)	-	長石	にぶい粒	普通	コクロナギ	覆土	5% 黑色 体色 「口」 内面黒色地斑
8	土師器	环	-	(1.1)	-	石英・長石・漂母	にぶい粒	普通	ロコロナギ	竪右袖内	5% 黑色 体色 「口」
9	土師器	环	-	(1.1)	-	石英・長石・漂母	にぶい粒	普通	内面ハラミガキ、底面下端ハラ ミガキへ	覆土	5% 黑色 体色 「口」 内面黒色地斑
10	土師器	环	-	(2.2)	-	石英・長石	明るめ	普通	内面ハラミガキ	覆土	5% 黑色 体色 模様 5% 黑色 体色 模様 内面黒色地斑
11	土師器	外	-	(3.3)	-	長石・漂母・小礫	にぶい粒	普通	内面ハラミガキ	竪前方床面	10% 黑色 体色 模様 内面黒色地斑 H.21
12	土師器	窓	-	(1.2)	-	石英・赤色粒子・ 小礫	粗	普通	内面ハラミガキ	竪前方覆土 上層	10% 外面糊付着・被熱 内面黒色地斑物有
13	土師器	小形器	14.0	(7.7)	-	白色粒子	赤化	普通	内面ハラミガキ	漆土	10%

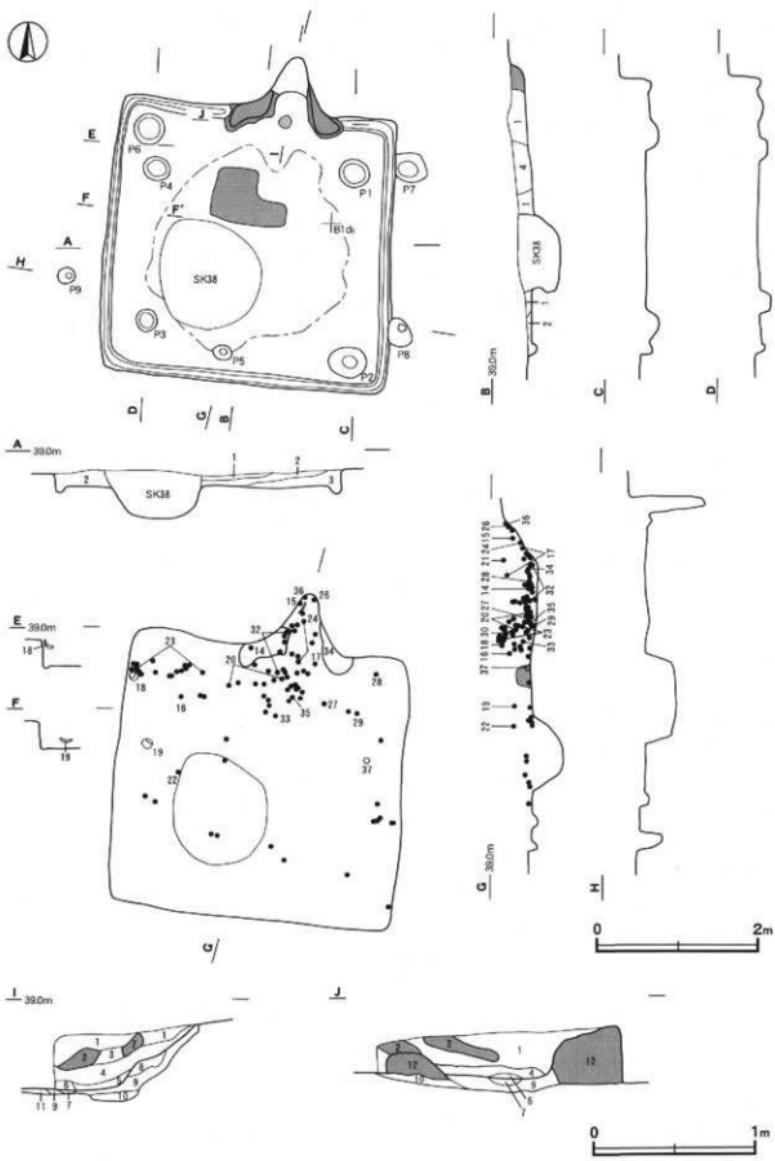
第2号住居跡(第46~48図)

**位置** B1e4区に位置し、丘陵断面に立地している。

**重複関係** 第38号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸3.56m, 短軸3.42mの方形で、土軸方向はN-14°-Eである。壁高は16~38cmであり、垂直に立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で、硬化面は主柱穴に開まれた中央部で確認された。壁溝は各壁際によく巡っている。



第46図 第2号住居跡実測図

■ 北壁中央部に付設されており、焚き口部から煙道部まで100cm、煙外への掘り込みは80cmである。袖部幅は64cmであり、左袖部は暗褐色の上に砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床部はわずかにくぼみ、火床面が赤変化している。

#### 遺土層解説

1 黒褐色 粘土粒子多量、燒土粒子・炭化粒子微量	7 淡褐色 砂上ブロック多量
2 黄褐色 烧土粒子・炭化粒子少量	8 青褐色 烧土ブロック微量
3 深褐色 烧土粒子多量、ローム粒子微量	9 暗褐色 烧土粒子・炭化粒子少量
4 赤褐色 發土・炭化粒子少量、ローム粒子微量	10 暗褐色 炭化粒子微量
5 灰褐色 灰土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量	11 黑褐色 ローム粒・少量
6 黑褐色 灰土粒子・炭化粒子微量	12 黄褐色 ロームブロック少量

ピット 9か所、半柱穴はP 1～P 4で、深さは14～22cmである。出入り口施設に伴うピットはP 5が相当し、深さは8cmである。P 7～P 9は34～78cmであり、重複關係がみられないことから壁外柱穴の可能性がある。

覆土 4層からなる。ロームブロックが各層とも多く含まれていることから人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

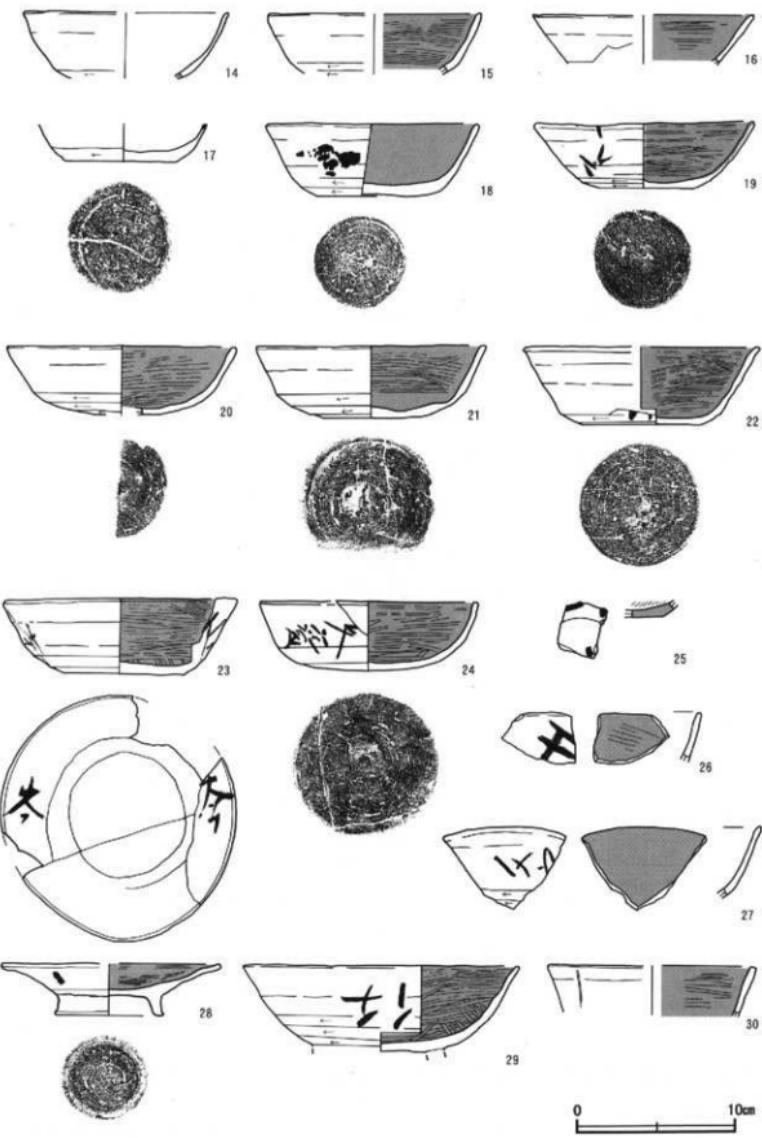
1 暗褐色 ロームブロック多量、炭化粒子・灰土粒子・少量	3 品褐色 ロームブロック多量、炭化粒子・少量
2 黄褐色 ロームブロック多量、燒土粒子・炭化粒子・微量 小量少量	4 黄褐色 灰土・ブロック多量

遺物出土状況 十師器片227点(坪63、桶45、高台付皿10、甕108)、須恵器片3点(甕)、土製支脚1点が出土している。竈内および竈前方、北西コーナー部の床面から覆土下層に集中している。14は竈左袖部内から、15・17・21・24・26・31・34・36は竈内から、16は西壁寄りの竈上中層から、18は西壁際の覆土上層から斜位で、19は西壁際の覆土下層から斜位で出土している。20は竈前方の覆土中層と下層の破片が接合したものである。22は中央部の覆土中層から、23は北西コーナー部の覆土上層と覆土下層の破片が接合したものである。25は覆土から、27・29・33・35は竈前方の覆土上層から床面にかけて、28は北東コーナー部付近の竈下下層から、30は竈上からそれぞれ出土している。32は竈左袖部内と竈前方の破片が接合したものである。37は東壁寄りの床面から出土している。

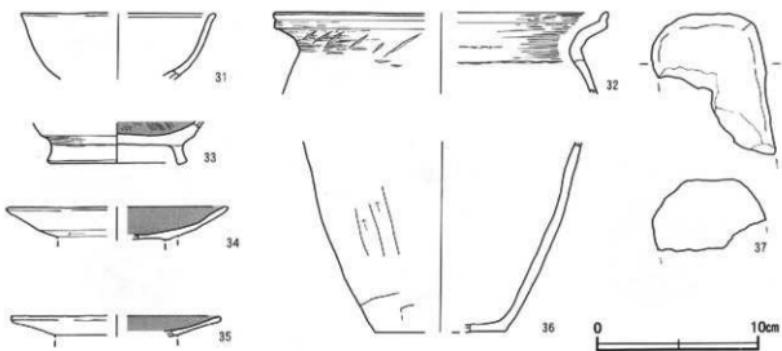
所見 時期は、須恵器併膳其が出土していないことや出土土器から9世紀末葉と考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表(第47・48図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	床土	色調	焼成	手 法 の 異 個	出土位置	備考
14	七輪器	坪	12.8	4.2	7.5	石英・長石・赤色 焼土・灰土・小量	にふい黄褐色	普通	移出下部断面ハラ晒り	竈左袖内	20% 内面抹付系・赤色・ 黒褐色混在
15	土師器	坪	13.2	3.8	7.0	石英・長石・赤色 焼土・灰土・小量	にふい黄褐色	普通	内面ハラミガキ、移出下部断面ハラ 晒り	竈内	20% 内面抹付系
16	土師器	坪	13.8	3.1	7.0	石英・赤褐色子 焼土	にふい黄褐色	普通	内面ハラミガキ	竈土中層	10% 内外石付系・赤色 内面黒褐色處理
17	土師器	坪	-	6.6	6.6	石英・長石・赤色 焼土・灰土・小量	にふい黄褐色	普通	移出下部断面ハラ晒り、底部直断面 ハラ晒り	竈内	30% 内外石付系・赤色 内面黒褐色處理
18	土師器	坪	13.2	4.7	5.5	石英・長石・ 赤褐色子 焼土	にふい黄褐色	普通	内面手直し板ハラ晒り、底部直断面ハラ 晒り	西壁際覆土 上層	95% 体部外側付系 内面赤色處理 PL23
19	土師器	坪	13.7	4.2	6.0	石英・長石・赤色 焼土・灰土・小量	にふい黄褐色	普通	内面ハラミガキ、底部手直し板ハラ 晒り、底部直断面ハラ晒り、内面一色 板ハラミガキ	西壁際覆土 下層	100% 蓋付、体部「コ 」内面黒褐色處理
20	土師器	坪	14.2	4.3	6.0	石英・長石・ 赤褐色子 焼土	赤褐色	普通	内面ハラミガキ、底部手直し板ハラ 晒り、底部直断面ハラ晒り、内面一色 板ハラミガキ	竈前左覆土 中・下層	50% 内面黒褐色 外面黒色(次回)
21	土師器	坪	14.4	4.5	7.8	石英・長石・赤色 焼土	にふい黄褐色	普通	内面ハラミガキ、底部手直し板ハラ 晒り、底部直断面ハラ晒り、内面一色 板ハラミガキ	竈内	50% 内面黒褐色



第47図 第2号住居跡出土遺物実測図(1)



第48図 第2号住居跡出土遺物実測図(2)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
22	土師器	坏	[14.6]	4.9	7.4	石英・長石・雲母・小穢	にぶい・黄橙	普通	内面ヘラミガキ、体部下端四角へフリ前切り、直腹四角へフリ切り、内面一定方向ヘラミガキ	中央部覆土 中層	50% 体部外面墨痕 内面黒色処理
23	土師器	坏	14.6	4.8	7.5	石英・長石	にぶい・棕	普通	内面ヘラミガキ、体部下端四角へフリ前切り、直腹四角へフリ切り、内面不足方向ヘラミガキ	北西角覆土 上・下層	85% 墨書、体部 横位 「等」等 PL.22
24	土師器	坏	13.5	4.4	8.8	石英・長石・赤色粒子	にぶい・棕	普通	内面ヘラミガキ、体部下端四角へフリ前切り、直腹四角へフリ切り、内面一定方向ヘラミガキ	罐内	80% 黒書、体部 横位 「久實」 内面黒色処理 PL.23
25	土師器	坏	-	(1.0)	-	石英・長石・赤色粒子・雲母	にぶい・棕	普通	底内面一定方向ヘラミガキ、底筋四角へフリ前切り	覆土	5% 体部・底部外面墨痕 内面墨色処理
26	土師器	坏	-	(3.0)	-	長石	にぶい・棕	普通	内面ヘラミガキ	罐内	5% 黑書、体部 横位 「久」 内面黒色処理 PL.23
27	土師器	坏	-	(4.5)	-	石英・長石・赤色粒子・雲母	にぶい・棕	普通	内面ヘラミガキ、底筋下端四角へフリ前切り	罐前方覆土 中層	5% 墨書、体部 横位 「久實」 内面黒色処理 PL.23
28	土師器	高台付鉢	13.5	3.3	6.6	石英・長石・雲母	にぶい・棕	普通	内面ヘラミガキ、体部下端四角ナデ、直腹四角へフリ前切り後高台貼り付け	北西角覆土 下層	60% 体部外面墨痕 内面黒色処理 PL.23
29	土師器	高台付鉢	17.4	(5.5)	-	石英・長石・赤色粒子・小穢	にぶい・棕	普通	内面ヘラミガキ、体部下端四角へフリ前切り後高台貼り付け、内面不定方向ヘラミガキ	罐前方覆土 面	80% 墨書、体部 横位 「仔」 内面黒色処理 PL.22
30	土師器	鉢	[13.2]	(3.1)	-	石英・長石・雲母・小穢	にぶい・棕	普通	内面ヘラミガキ	漫土	10% ヘラ書き 体部 「」 PL.23 黒色処理
31	土師器	小鉢	[12.0]	(4.1)	-	長石・赤色粒子	にぶい・棕	普通	ロクロナメ	罐内	15% 体部内外赤素
32	土師器	甕	[20.6]	(5.0)	-	赤色粒子・白色粒子	にぶい・白	普通	口縁内外面墨痕ナデ、頭部下端四角ナデ、直腹四角へフリ前切り、直腹四角へフリ前切り後高台貼り付け	罐左袖内・罐 前方	10%
33	土師器	高台付鉢	-	(2.5)	8.4	石英・長石・赤色粒子・雲母・小穢	にぶい・棕	普通	内面ヘラミガキ、体部下端四角ナデ、直腹四角へフリ前切り後高台貼り付け、直腹四角へフリ前切り後高台貼り付け	罐前方覆土 中層	20% 内面黒色処理
34	土師器	高台付鉢	[13.6]	(2.1)	-	石英・長石・赤色粒子・雲母・小穢	にぶい・黄棕	普通	体部下端四角へフリ前切り、直腹四角へフリ前切り後高台貼り付け	罐内	25% 内面黒色処理
35	土師器	高台付鉢	[13.0]	(1.3)	-	石英・長石・赤色粒子	にぶい・黄棕	普通	ロクロナメ	罐前方覆土 下層	10% 内面黒色処理
36	土師器	甕	-	(11.8)	[8.0]	赤色粒子・雲母	黒褐	普通	体部・直部外縁へフリ前切り	罐内	30% 外縁土付着 内面灰化物付着 内外側表面黒色

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重畠	材質	特 徴	出土位置	備 考
37	支脚	(8.7)	7.7	(4.5)	(396.6)	粘土	全面強く赤変	東壁付近床面	

#### 第4号住居跡（第49～51回）

位置 B1a区に位置し、丘陵裾部に立地している。

重複関係 第6号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東西軸5.60m、南北軸6.00mの方形で、主軸方向はN-5°-Eである。壁高は10～40cmほどで、床面に立ち上がりっている。

床 ほぼ平坦で、硬化面は竈前方から中央部にかけて確認された。壁構は各壁際に巡っている。

竈 北壁中央部に付設されており、犬矢部が遺存していた。焚き口部から煙道部まで105cm、壁外の掘り込みは80cmである。袖部幅は50cmであり、土師器瓶片を芯材として床面に砂質粘土を貼り付けて構築されている。

竈の両側の北壁には、砂質粘土が部分的に貼り付いているのが確認された。

##### 竈土層解説

1 黒褐色	粘土粒子中等、成土粒子少無	7 赤褐色	ロームブロック・燒土ブロック中等、炭化粒子少無
2 灰褐色	燒土粒子、炭化粒子微量	8 黄褐色	燒土粒子、炭化粒子多量
3 半褐色	成土粒子、炭化粒子少無、ローム粒子微量	9 黄褐色	燒土粒子、炭化粒子多量
4 灰褐色	燒土粒子、炭化粒子中等	10 黄褐色	燒土粒子中等
5 烧赤褐色	燒土粒子中等、炭化粒子、熟土粒子少量、ローム粒子微量	11 黄褐色	ロームブロック多量
6 哈褐色	燒土粒子、熟土粒子少無	12 黄褐色	ロームブロック中等、燒土ブロック少無

ピット 5か所。主柱穴はP1～P4で、深さ10～20cmであり、出入口施設に伴うピットはP5が相当し、深さは10cmである。

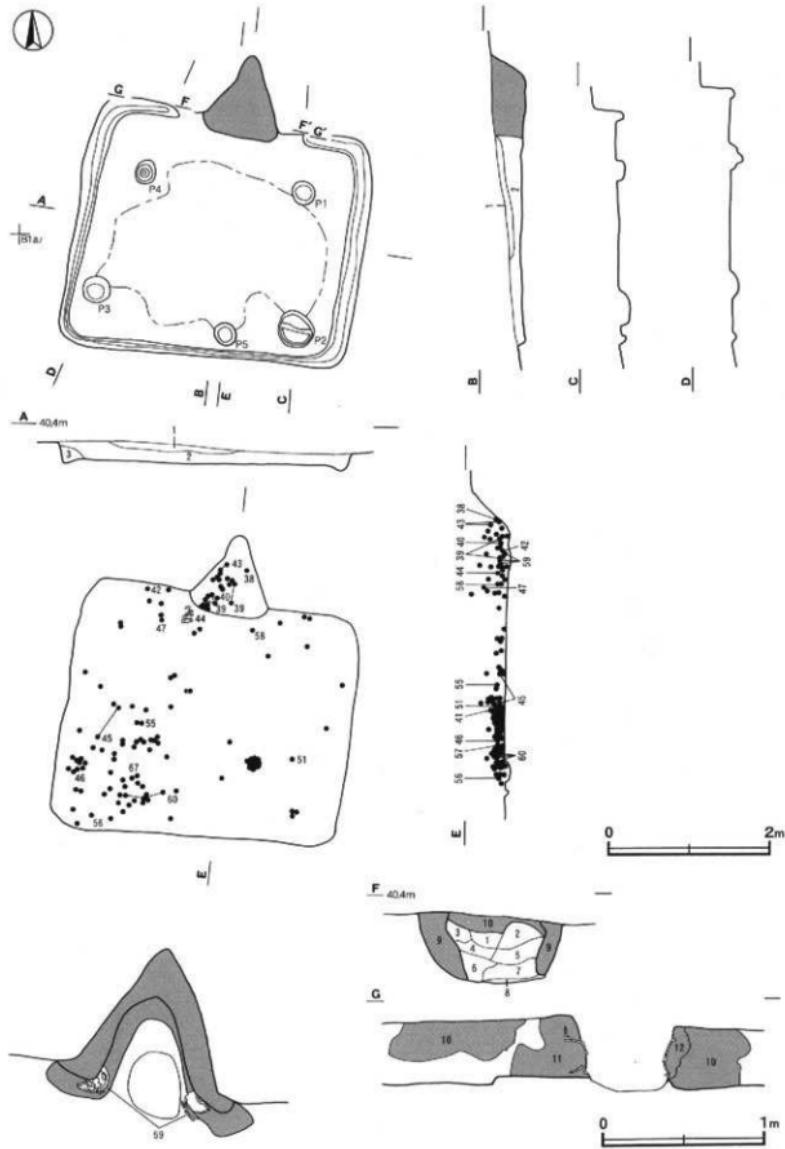
覆土 3層からなる。レンズ状の堆積をしており、自然堆積と考えられる。

##### 土層解説

1 黑褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒、	3 黑褐色	ローム粒子中等、炭化粒子微量
2 黑褐色	粘土粒子中等、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子、砂粒、小礫少量		

遺物出土状況 上部器片150点（杯53、碗45、高台付皿15、甕35、罐2）、須恵器片3点（杯1、甕2）が出土している。竈内と南西コーナー部付近の床面から覆土下層に集中している。38・39・40・43は竈内から、41・48・49・50・52・53・54・61は覆土から、42は北壁際の覆土下層から、44・47・58は竈前方覆土下層から、45・46・55は西壁付近の覆土下層から、51は東壁付近の覆土下層から、56・57・60は南西コーナー部際の覆土下層から出土している。59は竈袖部の芯材として再利用されており、逆位で出土している。

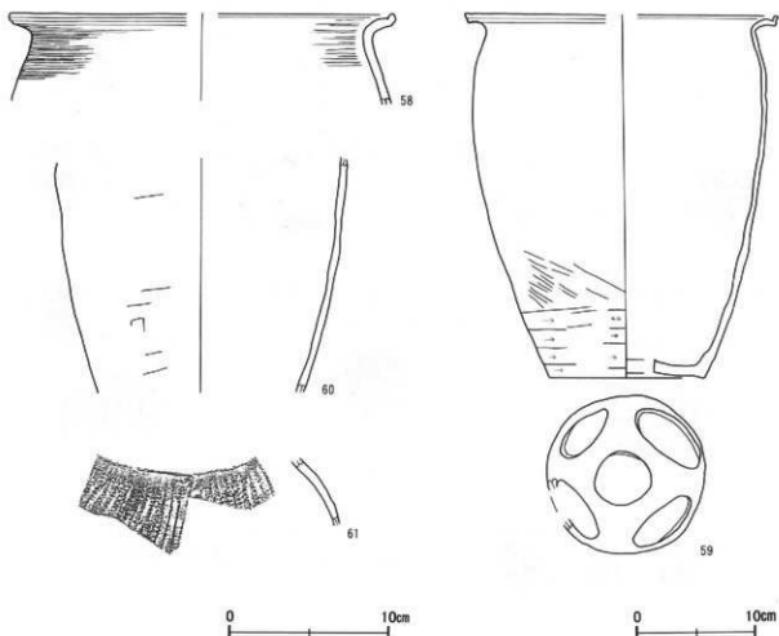
所見 上器からはほとんど時期差は見られないが、9世紀末葉の第6号住居跡を掘り込んでいることや須恵器供器具が伴わないことや出土上器から、時期は9世紀末葉から10世紀初頭と考えられる。竈両側の壁に粘土が付着していたことから、棚状施設の存在が推測される。



第49図 第4号住居跡実測図



第50図 第4号住居跡出土遺物実測図(1)



第51図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

#### 第4号住居跡出土遺物観察表(第50・51図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
38	土師器	壺	[12.8]	(4.0)	-	良石・雲母・小穢	にぶい 横	普通	体下部溶け跡へ焼け	龜内	30% 体部外器面 荒れ 外面一部剥落
39	土師器	壺	[13.2]	(3.7)	-	長石・赤色粒子	にぶい 横	普通	体下部溶け跡へ焼け	龜内	20% 体部外器面 荒れ 外面一部剥落
40	土師器	壺	[13.0]	3.6	7.0	長石・赤色粒子・ 雲母・小穢	にぶい 横	普通	内面へミガキ、体下部溶け跡へ 削り、底部溶け跡へ焼け、表部内面 一定方向へ焼け	龜内	30% 底部外器面荒れ 内面黒色処理
41	須恵器	壺	[14.2]	5.2	[7.6]	石英・長石・ 海綿骨粉	灰オリーブ	普通	底部溶け跡へ焼け	覆土	30% 刻畫 体部 [+1]
42	土師器	壺	[13.2]	(4.2)	-	赤色粒子・雲母	黒	普通	内面へミガキ、体下部溶け跡へ 削り	右切腹土下層	20% 外面抹付着 PL23
43	土師器	壺	[13.8]	4.0	7.2	石英・長石・小穢	にぶい 横	普通	内面へミガキ、体下部溶け跡へ 削り、底部溶け跡へ焼け、表部内面 一定方向へ焼け	龜内	50% 内外面器面荒れ
44	土師器	高台付 壺	13.8	2.1	5.9	長石・赤色粒子・ 雲母・小穢	にぶい 横	普通	底部溶け跡へ焼け	右切腹土下層	80% 外器面荒れ 内面黒色処理 日.23
45	土師器	壺	[12.0]	3.8	6.6	石英・長石・赤 色粒子・雲母・ 小穢	にぶい 横	普通	内面へミガキ、体下部溶け跡へ 削り、底部溶け跡へ焼け	西壁近覆 土下層	45% 黒墨 体部 □ 内面黒色処理
46	土師器	壺	[13.0]	3.7	[6.0]	石英・長石・赤 色粒子・雲母・ 小穢	にぶい 横	普通	内面へミガキ、体下部溶け跡へ 削り、底部溶け跡へ焼け。底部内面 不定方向へ焼け	西壁付近覆 土下層	35% 刻畫 体部 横 幅「久」 内面黒色処理
47	土師器	壺	[13.6]	(3.7)	-	石英・長石・赤 色粒子・雲母・ 小穢	にぶい 横	普通	内面へミガキ、体下部溶け跡へ 削り	右切腹土下層	40% 黒墨 体部 横 幅「久・寶」 内面黒色処理

番号	種別	基盤	上塗	風化	斑様	粒度	粒度	色調	集成	手法の特徴	出土位置	備考
49	上部層	塊	[14.8]	(5.5)	石英・長石・赤色粒子・小礫	にぬけ	普通	白灰ベニミガキ、供養式焼却場ヘタ 剥離	複土	4% 塗装 体部 横 内面黒色処理 月21		
50	上部層	粉	-	(2.6)	石英・長石	にぬけ	普通	白灰ベニミガキ	複土	5% 塗装 体部 月21		
51	上部層	粉	-	(2.1)	石英・長石	にぬけ	普通	白灰ベニミガキ、供養式焼却場ヘタ 剥離	複土	4% 塗装 体部 月21		
52	上部層	粉	-	(2.1)	石英・長石	にぬけ	普通	白灰ベニミガキ	複土	5% 塗装 体部 月21		
53	上部層	粉	-	(2.5)	砂砕	にぬけ	普通	白灰ベニミガキ	複土	5% 塗装 体部 月21		
54	上部層	粉	-	(1.4)	砂粒	にぬけ	普通	ワタロウゲ	複土	5% 外部表面		
55	土壤深	塊	[16.9]	(6.0)	石英・長石・小礫	塊	普通	山積状か剥離。堅密な質	西壁付近壁 下層	15% 体部外壁側に赤 茶色		
56	土壤深	塊	[16.6]	(6.2)	長石・雲母・小礫	にぬけ	普通	山積状外壁側上部、底部へラ枯工 のあたり、軽微な剥離	南西角壁上 下層	10% 体部外壁側上部 月23		
57	土壤深	塊	-	(4.4)	8.6°	長石・赤色粒子	灰褐色	骨格構造へラ枯工、重筋み縫	南西角壁上 下層	10% 体部外壁側上部 のく赤茶		
58	土壤深	塊	[24.0]	(5.0)	雲母・小礫	にぬけ	普通	山積状外壁側アラ	南東側壁上 下層	10% 屋根の内外側面 赤茶		
59	土壤器	瓶	[25.5]	29.7	12.8	石英・長石 赤色粒子・小礫	にぬけ	普通	山積状外壁側アラ	東北側	40% 体部外壁面上 面下部剥離見し底部内 壁赤茶 月24	
60	土壤器	瓶	-	(4.5)	-	長石・雲母	馬	普通	供養式焼却場ヘタ	南西角壁上 下層	10% 体部外壁側上部 燒土材等 内部剥離見 れ	
61	消音器	壳	-	(4.1)	石英・長石・雲母	灰	普通	ワタロウゲ	複土	5%		

### 第5号住居跡（第52図）

位置 A-1 j6 区に位置し、丘陵斜面に立地している。

規模と形状 東西軸が2.45m、南北軸は南側が削平されているため矩形面の範囲から1.53mのみ確認され、方形と推定される。主軸方向はN-14°-Eである。壁高は47cmであり、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、硬化面は竈前方から中央部にかけて確認された。壁溝は確認されなかった。

竈 北壁中央部に付設されており、焼き口部から煙道部まで80cm、壁外への掘り込みは60cmである。袖部幅は20cmであり、袖部は床面の上に砂質粘土を貼り付けて構築している。火床部はわずかにくぼんでおり、火床面が赤茶色化している。

#### 遺土質解説

- 1 砂 色 ローム粘子中量、燒土粒子、炭化粒子、少量
- 2 粘 粒 色 ロームブロック少量、燒土粒子微量
- 3 粘 粒 色 ローム粘子中量、燒土粒子少量
- 4 烧 土 色 烧土粒子中量
- 5 烧 土 色 ローム粘子中量、燒土粒子、炭化粒子微量
- 6 黄 粒 色 烧土ブロック少量、燒土粒子、炭化粒子少量
- 7 灰 粒 色 烧土粒子、炭化粒子、粘土粒子少量
- 8 灰 粒 色 ローム粘子中量、燒土ブロック少量、炭化粒子微量
- 9 灰 粒 色 烧土ブロック中量、炭化粒子微量
- 10 粘 粒 色 烧土
- 11 灰 粒 色 烧土ブロック多量
- 12 灰 粒 色 烧土粘子中量
- 13 灰 粒 色 ロームブロック中量

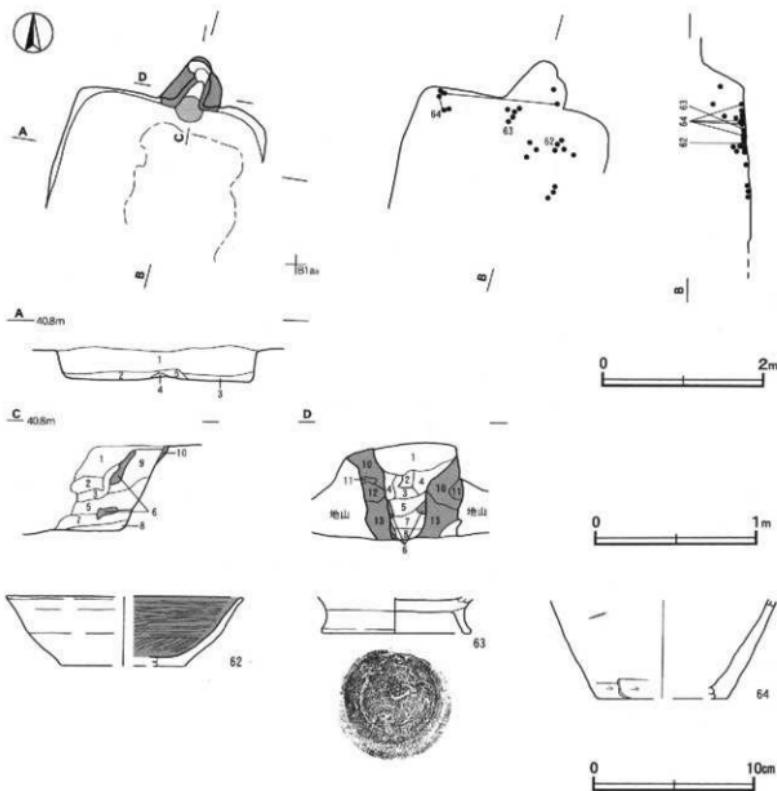
覆土 5層からなる。各層にロームブロックが含まれており、人為堆積と考えられる。

#### 土層質解説

- 1 烧 土 色 ロームブロック中量、燒土粒子、炭化粒子、砂粒少  
量、粘土粒子微量
- 2 灰 粒 色 ロームブロック少量、燒土粒子微量、砂粒微量
- 3 灰 粒 色 ロームブロック中量、燒土粒子微量
- 4 粘 土 色 烧土ブロック中量、ロームブロック少量、砂粒少  
量、烧土粒子微量
- 5 灰 粒 色 ロームブロック中量、燒土粒子、炭化粒子、砂粒少  
量、粘土粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片96点（坏63, 梗10, 盆23）、須恵器片2点（甕）、流れ込みと考えられる縄文土器片が出土している。甕前方の床面から覆土下層に集中している。62・63は甕前方の床面から、64は北西コーナー部付近の床面から出土している。

**所見** 時期は、須恵器供膳器が出土していないことや出土土器から9世紀末葉と考えられる。



第52図 第5号住居跡・出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表(第52図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
62	土師器	坏	[14.6]	(4.3)	[7.6]	石炭・長石・雲母・小礫	にじみ燒	普通	内面ヘラミガキ、底盤周縁ヘラ切り 裏ナシ	甕前方床面	50% 内面黒色処理
63	土師器	梗	-	(2.1)	9.2	石英・長石・赤色 粘土・雲母・小礫	にじみ赤褐	普通	内面ヘラミガキ、底盤周縁ヘラ切り 裏蓋台縁ヘラ付け	甕前方床面	20% 被熱痕、焼土付着 内面黒色処理
64	土師器	甕	-	(6.1)	[8.0]	石炭・長石・雲母・ 小礫	褐	普通	全体下部ヘラ削り、内面ナメ	北西角床面	20% 体部外側赤茶、内 面黒色処理、炭化物付着

### 第6号住居跡（第53・54図）

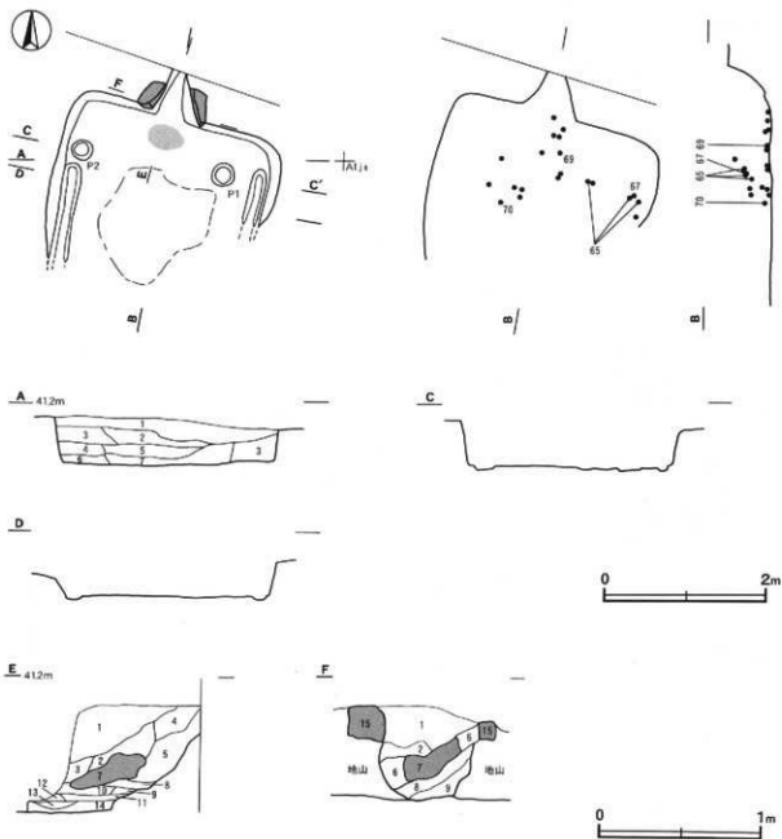
位置 A1付近に位置し、丘陵裾部に立地している。

重複関係 第4号住居に掘り込まれている。

規模と形状 東西軸が2.74m、南北軸は南側が削平されているため硬化面の範囲から2.10mのみ確認され、方形と推定される。主軸方向はN-9°-Eである。壁高は30~50cmあり、垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、硬化面は竈前方から中央部にかけて確認された。壁溝は東壁と西壁の一部で確認された。

竈 北壁中央部に付設されており、焚き口部から煙道部まで100cm、壁外への掘り込みは62cm確認され、さらに調査区域外に延びている。袖は確認されなかったが、煙道部側面は地山を掘り、砂質粘土を貼り付けている。



第53図 第6号住居跡実測図

#### 遺土層解説

1 黒褐色	焼土ブロック、炭化粒子少量	9 赤褐色	焼土ブロック多量
2 暗褐色	焼土中量、粘土ブロック少量、炭化粒子微量	10 暗褐色	焼土ブロック多量、粘土粒子少量
3 暗褐色	焼土粒子少量、炭化粒子微量	11 暗褐色	焼土ブロック少量
4 暗褐色	焼土ブロック中量、粘土ブロック微量	12 赤褐色	焼土ブロック多量
5 暗褐色	焼土ブロック多量、粘土ブロック微量	13 赤褐色	焼土粒子少量、炭化粒子微量
6 黑褐色	焼土ブロック少量	14 黄褐色	焼土粒子・炭化粒子微量
7 黄褐色	焼土ブロック多量	15 黄褐色	焼土ブロック中量
8 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子微量		

ピット 2か所。P 1・P 2は主柱穴と考えられ、それぞれ北東・北西コーナー部付近にある。深さは6~10cmである。

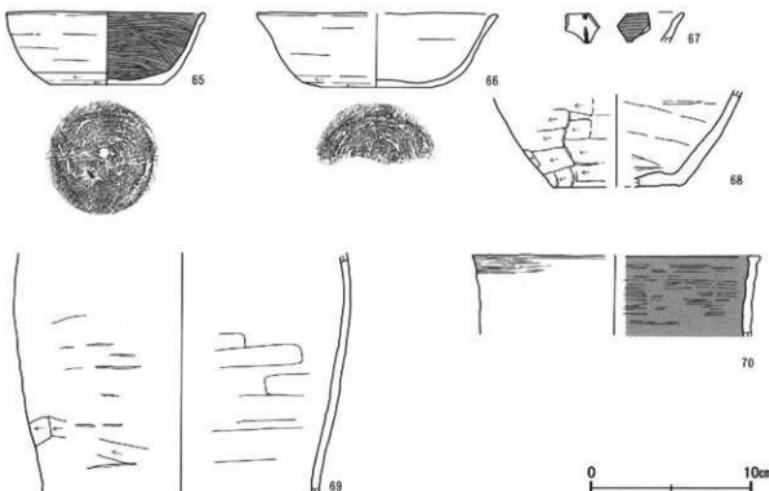
覆土 7層からなる。ブロック状に堆積していることから人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子中量
2 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
3 黑褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	7 黑褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 黑褐色	ロームブロック・炭化粒子微量		

遺物出土状況 士師器片152点(坪63, 楠45, 麻44), 須恵器片1点(甕)が出土している。竈前方および中央部付近の床面から覆土中層に集中している。65・67はP 1および東壁付近の覆土中層から, 66・68は覆土から, 69は竈前方の床面から, 70は中央部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、須恵器供膳具が出土していないことや出土土器および第4号住居との重複関係から、9世紀末葉と考えられる。



第54図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表(第54図)

番号	種別	層位	口径	高さ	形状	色調	焼成	手にのる状況	出土位置	備考	
65	土器22	平	12.4	4.6	7.0	石英・長石・赤色 焼子・雲母・小礫	にぶい模	普通	内面へりきガラス、骨質下端月輪へ うすり、表面均勻へそり。内面 一定方向へりきガラス	P1・裏壁付近 覆土上層	70% 内面黒色地
66	土器23	不	16.0	4.6	7.0	石英・長石・赤色 焼子・雲母・小礫	にぶい模	普通	内面下端半化粧へりきガラス、底面へりきガラス	覆土	40% 外面赤茶
67	土器24	36-	-	(1.8)	石英・長石	にぶい模	普通	内面下端半化粧へりきガラス	P1・裏壁付近 覆土中層	5% 外面黑色 内側黒色地	
68	土器25	37-	-	(3.0)	石英・長石・赤色 焼子・小礫	にぶい模	普通	化粧下端へりきガラス、内面へりきガラス	覆土	10% 外部外側下半焼灰 底	
69	土器26	38-	-	(3.0)	石英・長石・赤色 焼子・小礫	にぶい模	普通	底面焼子アーチナリル、内面へりきガラス	覆土方木面 底	10% 外部外側底部 底	
70	土器27	39-	-	(3.0)	石英・長石	にぶい模	普通	内面へりきガラス	中央部塊上 下層	10% 内面黒色地	

第7号住居跡(第55~57図)

位置 △1は区に位置し、丘陵斜部に立地している。

規模と形状 東西軸3.08m、南北軸2.92mの方形で、主軸方向はN 6° Eである。壁高は7~62cmであり、垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、硬化面は確認されなかった。壁構は各壁際に巡っている。

竈 北壁中央部に付設されており、焼き口部から煙道部まで102cm、壁外への掘り込みは55cmである。袖部幅は56cmあり、床面に砂質粘土を貼り付けて構築している。左袖部寄りに自然縁を立てて支脚としている。火床部はわずかにくぼんでおり、火床面が弱く赤変している。

#### 竈土解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、燒土粒子、炭化粒子多量	7 布褐色	燒土粒子、炭化粒子少量
2 紺褐色	燒土粒子、炭化粒子微量	8 赤褐色	燒土粒子、炭化粒子少量、ローム粒子微量
3 砂褐色	砂土粒子多量、ローム粒子微量	9 黑褐色	燒土粒子少量、炭化粒子微量
4 紺褐色	燒土粒子多量、燒土粒子中量、炭化粒子少量	10 黃褐色	燒土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量
5 黑褐色	燒土粒子、炭化粒子微量	11 黄褐色	ロームプロック少量
6 粉褐色	燒土粒子少量、ロームブロック少量		

ピット 4か所。主柱穴はP 1 ~ P 4で、各コーナー部寄りにあり、深さはともに約10cmである。

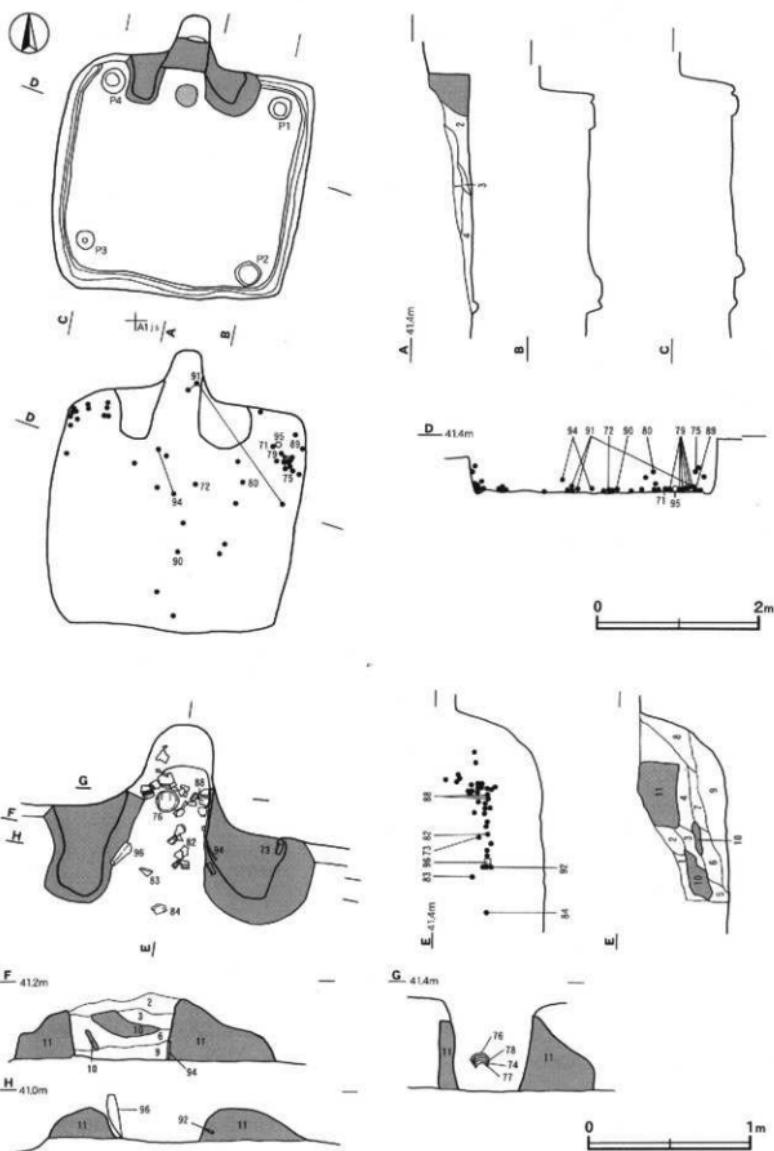
覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

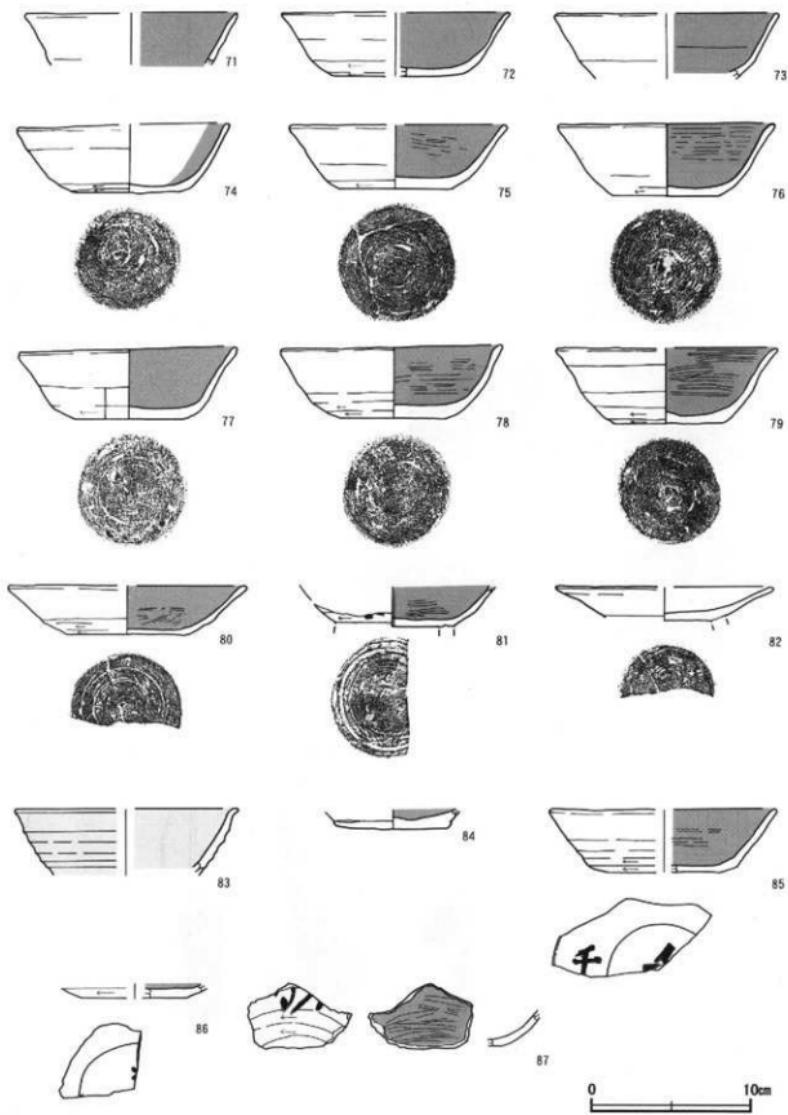
#### 土解説

1 粉褐色	ローム粒子多量、砂粒中量、漆油バニッシュ少量	4 黑褐色	ローム粒子多量、炭化粒子、燒土ブロック少量、燒土粒子微量
2 粉褐色	ローム粒子多量、砂粒中量、炭化粒子、燒土バニッシュ少量、燒土粒子微量	5 黑褐色	ローム粒子多量、砂粒中量、燒土粒子、炭化粒子
3 粉褐色	ローム粒子多量、砂粒中量、燒土粒子、炭化粒子	6 黑褐色	漆油バニッシュ少量

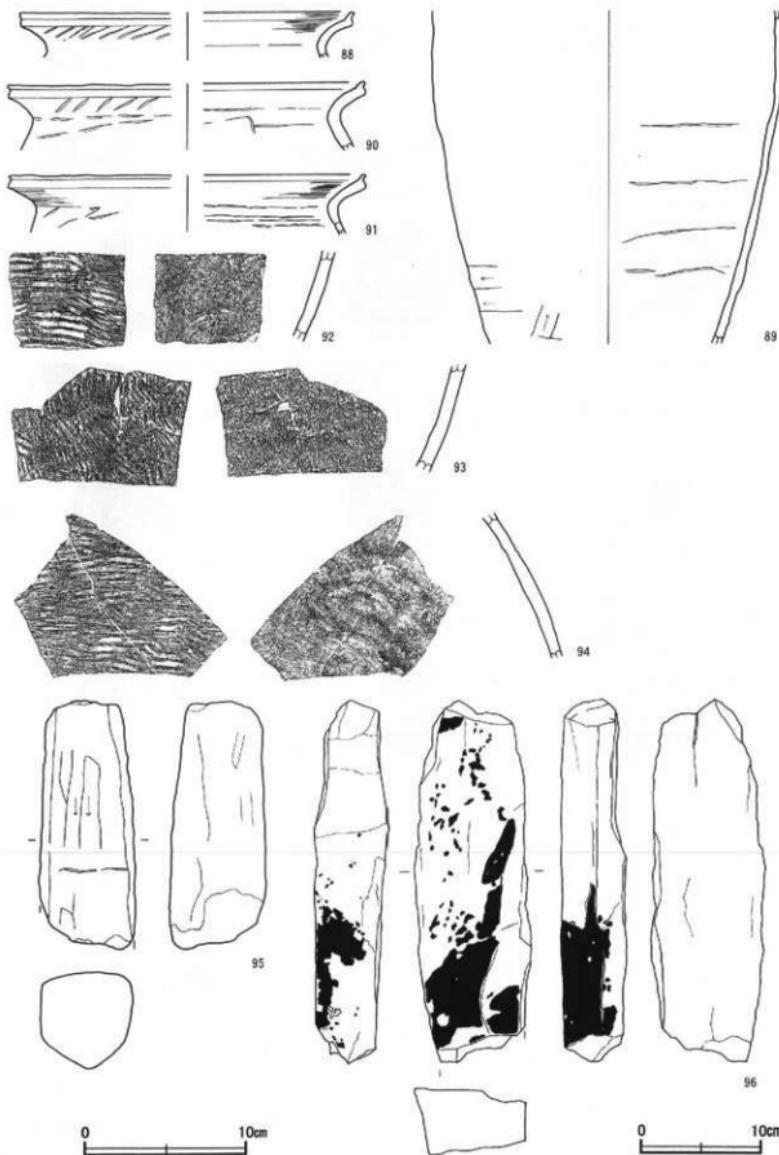
遺物出土状況 土器片281点(环121, 梢96, 壁67), 須恵器片10点(环3, 梢7), 石製支脚1点, 上製支脚1点が出土している。窓内に覆土上層および北東・北西コーナー部付近の床面から焼土下層に集中している。71・73・92・94は竈右袖内から, 72・80・94は竈前方覆土中層および床面から, 74・76・77・78は竈火床部覆土中層から逆位で重なって出土している。75・79・89・95は東壁際の覆土上層および床面から出土している。82・83・84・88は窓内から, 85・86・87・93は覆土から, 90は火床部覆土下層から出土している。91は窓内および東壁付近の覆土下層から出土した破片が接合したものである。96は火床部左袖部よりから立位で出土している。

所見 時期は、須恵器供膳具が出土していないことや出土土器から9世紀末葉と考えられる。





第56図 第7号住居跡出土遺物実測図(1)



第57図 第7号住居跡出土遺物実測図(2)

第7号住居跡出土遺物觀察表(第56、57図)

番号	種類	器種	口径	器高	底形	片手	色調	被成	手法の特徴	出土位置	備考
71	土師器	壺	13.2	3.2	-	有蓋-長石-赤色 粒子-窓母	橙	普通	ココリナギ	北東角床面	5% 内面黑色處理
72	土師器	壺	14.2	4.0	17.0	有蓋-長石-赤色 粒子-窓母	紅茶-黃褐	普通	器底下薄胎部へ向う、表面細部へ 施釉	窓母方床面	40% 内面黑色處理
73	土師器	壺	14.0	4.2	-	有蓋-長石-赤色 粒子-窓母	紅茶-黃褐	普通	小窓ナナ子	窓母袖内	30% 体部外-赤茶- 窓母部分-白付着 内面黑色處理
74	土師器	壺	12.3	4.1	6.2	有蓋-長石-赤色 粒子-窓母	紅茶-黃褐	普通	内底へ向う赤茶、外底下薄胎部へ向 う、底部細部へ施釉	窓母方床中 腰	60% 外面赤茶-燒失 量-露底出現 内面黑色處理
75	土師器	壺	13.2	4.0	7.1	有蓋-長石-赤色 粒子-窓母-小窓	灰黃陶	普通	内底へ向う赤茶、外底下薄胎部へ向 う、底部細部へ施釉	東壁腰厚土 中腰	50% 内面黑色處理
76	土師器	壺	13.6	4.1	6.8	有蓋-赤色-赤色 粒子-窓母-小窓	紅茶	普通	内底へ向う赤茶、外底下薄胎部へ向 う、底部細部へ施釉	窓母上中 腰	90% 内面赤茶-白付 内面黑色處理 M.23
77	土師器	壺	13.6	4.5	6.8	有蓋-長石-赤色 粒子-窓母-小窓	紅茶	普通	内底へ向う赤茶、底部下薄胎部へ向 う、底部細部へ施釉	窓母中腰	80% 体部外-赤茶- 窓母部分-白付 内面黑色處理 M.23
78	土師器	壺	13.0	4.6	6.6	有蓋-長石-赤色 粒子-窓母	紅茶	普通	内底へ向う赤茶、外底下薄胎部へ向 う、底部細部へ施釉	窓母中腰	85% 内面赤茶-白付 内面黑色處理 M.23
79	土師器	壺	14.0	4.7	7.0	石英-長石-赤色 粒子-窓母-小窓	灰茶	普通	内底へ向う赤茶、外底下薄胎部へ向 う、底部細部へ施釉	東壁腰厚土 中腰	50% 内面赤茶-白付 内面黑色處理
80	土師器	壺	14.8	3.1	6.8	石英-長石-赤色 粒子-窓母-小窓	紅茶	普通	内底へ向う赤茶、外底下薄胎部へ向 う、底部細部へ施釉	窓母方床土 中腰	30% 内面黑色處理
81	土師器	壺	(2.5)	-	-	石英-長石-赤茶	紅茶	普通	内底へ向う赤茶へ向う傾く、底部細部 へ施釉	腰上	30% 出井 体部 年代 内面黑色處理
82	土師器	壺	13.8	(2.1)	-	赤色-粒子-電母	灰	普通	内底へ向う赤茶へ向う傾く	腰内	30% 外面赤茶-燒失 量
83	火候調整器	壺	13.8	4.2	-	黑色罐子	灰灰	普通	ココリナギ	窓内	20% 燒成庫
84	土師器	壺	(1.0)	6.8	-	石英-長石-赤色 粒子-窓母-小窓	紅茶	普通	内底へ向う赤茶	内面黑色處理	20% 底部外-赤茶-白付 内面黑色處理
85	土師器	壺	13.2	4.0	7.2	石英-長石-赤色 粒子-窓母-小窓	紅茶	普通	内底へ向う赤茶、底部下薄胎部へ向 う、底部細部へ施釉	腰上	30% 出井 体部 年代 内面黑色處理
86	土師器	壺	(0.9)	6.6	-	石英-長石-赤色 粒子-窓母-小窓	紅茶	普通	内底へ向う赤茶へ向う傾く、底部細部 へ施釉	腰上	10% 出井 体部 年代 内面黑色處理
87	土師器	壺	(2.2)	-	-	石英-長石-赤色 粒子-窓母-小窓	紅茶	普通	内底へ向う赤茶へ向う傾く、底部細部 へ施釉	腰上	5% 楠原 体部 年代 久賀山 1号 内面黑色處理
88	土師器	壺	13.6	(2.8)	-	石英-長石-赤茶	紅茶	普通	内底へ向う赤茶へ向う傾く、底部へ向う 傾く	腰内	10%
89	土師器	壺	-	(0.5)	-	石英-長石-小窓	灰	普通	内底へ向う赤茶	東壁腰厚土 腰上付着	30% 外面赤茶-燒失 量
90	土師器	壺	(2.0)	(1.0)	-	石英-長石-赤色 粒子-窓母-小窓	紅茶	普通	内底へ向う赤茶	腰上	10% -
91	土師器	壺	(2.0)	(0.6)	-	石英-長石-赤色 粒子-窓母-小窓	紅茶	普通	内底へ向う赤茶へ向う傾く、底部細部 へ施釉	窓母-東壁付 近腰土下腰	5% 内面黑色處理
92	須恵器	大甕	-	(3.6)	-	小窓	灰	普通	内底へ向う赤茶	腰内	5% 外面赤茶-燒失 量
93	須恵器	大甕	-	(0.6)	-	小窓	灰	普通	内底へ向う赤茶	腰土	5% 外面赤茶-燒失 量
94	須恵器	大甕	-	(0.8)	-	小窓	灰	普通	内底へ向う赤茶	腰内	5% 内外面赤茶-燒失 量

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
95	支脚	(15.3)	5.9	5.8	(56)	粘土	軽土に小窓台と、ハリナリ、企理突出 部あり	北東側床面	M.24
96	支脚	(20.7)	9.5	5.5	(210)	花崗岩	丸い表面を整然としている、全曲赤茶-燒失 量	火炉部	M.24

(2) 土坑

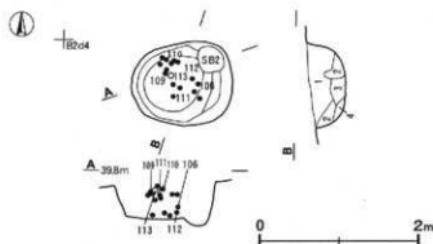
第40号土坑 (第58・59図)

位置 B 2 号区に位置し、丘陵袖部に立地している。

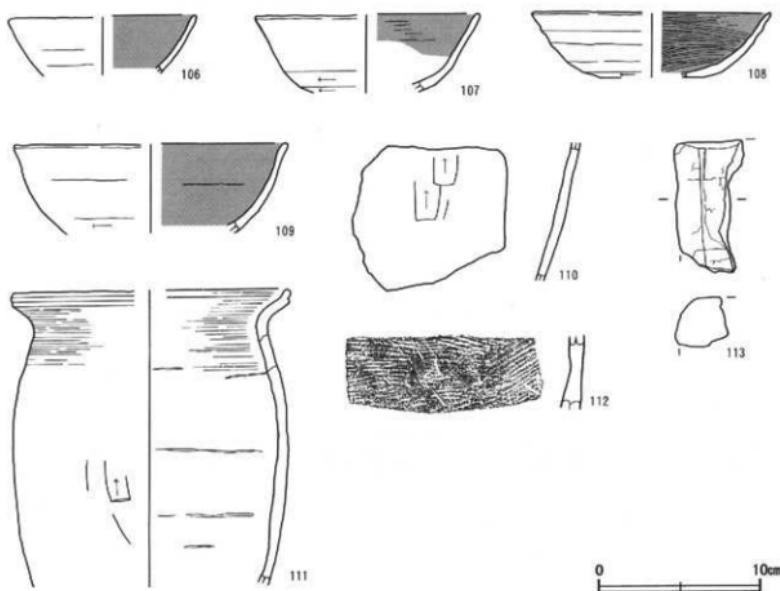
重複関係 第2号掘立柱建物のP 5に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.28m、短径1.12mの東西にやや長い楕円形で主軸方向はN-58°-Eである。底部は平坦である。深さは約45cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層からなる。ブロック状に堆積していることや含有物から人為堆積と考えられる。



第58図 第40号土坑実測図



第59図 第40号土坑出土遺物実測図

## 土器解説

- 1 岩 極 色 斧土: ツク少量、荒化物微量  
 2 岩 極 色 灰: ブラック・リ・ム灰子灰  
 3 岩 極 色 リ・ム灰子少量  
 4 岩 極 色 灰: ブラック半灰

**遺物出土状況** 複数上層から下層にかけて散布している状態で出土している。106・112は底面より若干浮いた位置から、107・108は覆土から、109・110・111・113は複数上層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀代と考えられる。

第40号土坑出土遺物観察表(第59回)

番号	種類	基種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
106	土師器	斧	[11.0]	(3.5)	-	石英・長石・麻 付小縫	にぶい青灰	雪白	斜面下端部へラ削り	覆土下層	20% 内面黒色処理
107	土師器	斧	[10.8]	(4.8)	-	石英・長石	にぶい青	普通	内面ヘラミガキ、斜面下端部へラ削り	覆土	20% 内面黒色処理
108	土師器	斧	[14.8]	4.0	6.2	長石・赤玉・和子	にぶい青	普通	内面ヘラミガキ、内面下端部へラ削り、底面斜面へラ削り、底面内面 一定方向ヘラミガキ	覆土	30% 内面黒色処理
109	土師器	梅	[16.0]	(5.6)	-	石英・長石・鈍 目・小縫	にぶい青灰	雪白	斜面下端部へラ削り	覆土上層	20% 内面黒色処理
110	土師器	堀	-	(8.5)	-	赤玉・和子・正型	青	普通	内面ヘラ削り、内面下層	覆土上層	5% 外面燒土付着
111	土師器	堀	[17.2]	(18.0)	-	赤玉・正型・ 小縫	にぶい青	普通	内面ヘラ削り、内面下層 削り、蓋のみ生	覆土上層	35% 上縫部、底部全 体外側燒土付着 PL23
112	埴輪器	妻	-	(4.0)	小縫	灰	普通	外火刷毛目	複数上層	5%	

番号	基種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
113	支脚	(8.2)	(3.0)	(3.0)	(90)	粘土	粘土に石英・長石・小縫含む、ヘラ削り	複土上層	全曲赤瓦

## 2 近世の遺構と遺物

今回の調査では、掘立柱建物跡3棟、井戸跡1基が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。

### (1) 掘立柱建物跡

#### 第1号掘立柱建物跡 (第60・61回)

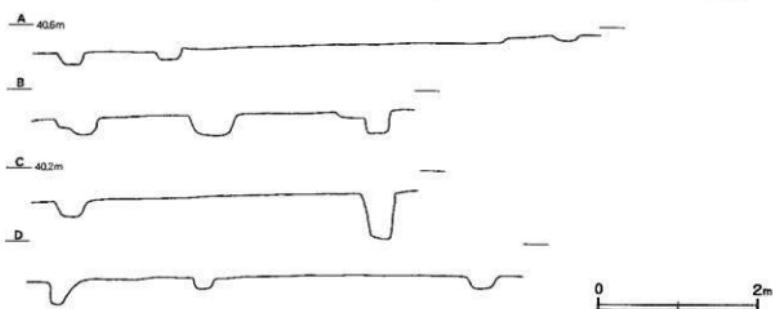
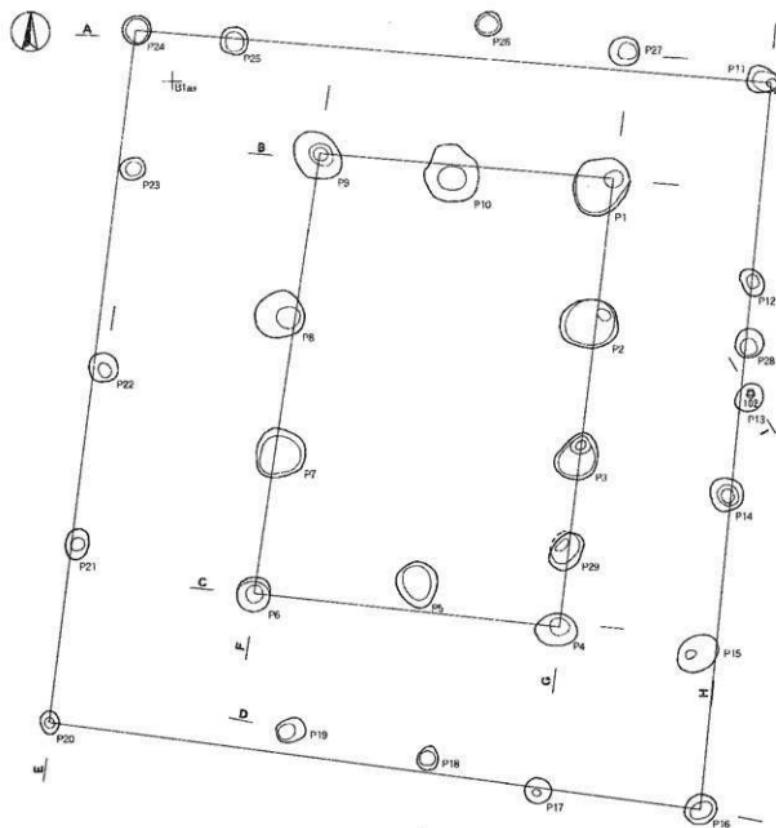
**位置** B 1 a9 [x]に位置し、丘陵裾部に立地している。

**規模と構造** 衍行4間、梁間2間の身合に、四面庇が付属する建物跡で、衍行方向をN-S-Eとする南北棟である。庇部を含めた規模は衍行長9.69m、梁間長8.28mあり、柱間寸法は衍行1.00~3.00m、梁間1.70m~2.00mで、庇の柱間は0.80m~3.00mほどである。柱筋と間尺が揃わない構造である。第2号掘立柱建物跡と軸線がほぼ揃う。

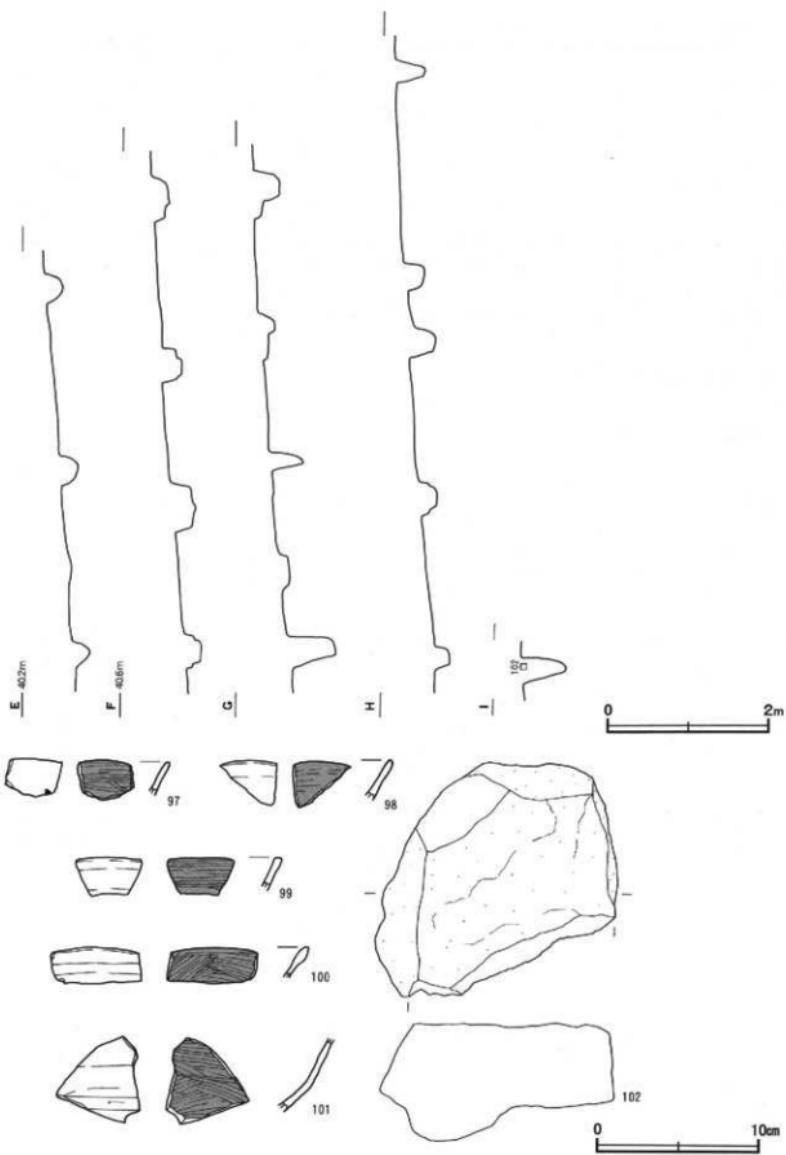
**柱穴** 平面形は円形を呈し、深さは10~48cmで一律ではない。

**遺物出土状況** 土師器片28点、縄文上器2点が出土しているがいずれも細片であり、流れ込んだものと考えられる。102がP13から出土しており、根石の可能性がある。

**所見** 出土遺物がないため時期は特定できないが、第2号掘立柱建物跡と衍行方向が揃っていることから関連性が考えられる。



第60図 第1号掘立柱建物跡実測図



第61図 第1号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第61図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
97	土師器	壺	-	(2.1)	-	小繩	にぶい緑	普通	内面ヘラミガキ	覆土	5% 黒漆、体部「□」内面黒色処理
98	土師器	壺	-	(2.3)	-	石英・長石・雲母・小繩	にぶい黄褐	普通	内面ヘラミガキ	覆土	5% 内面黒色処理
99	土師器	壺	-	(2.0)	-	石英・長石	にぶい緑	普通	内面ヘラミガキ	覆土	5% 内面黒色処理
100	土師器	壺	-	(1.9)	-	石英・長石	にぶい緑	普通	内面ヘラミガキ	覆土	5% 内面黒色処理 101と同一個体か
101	土師器	壺	-	(4.6)	-	石英・長石・小繩	にぶい緑	普通	内面ヘラミガキ、底面下端回転へり	覆土	5% 内面黒色処理 100と同一個体か

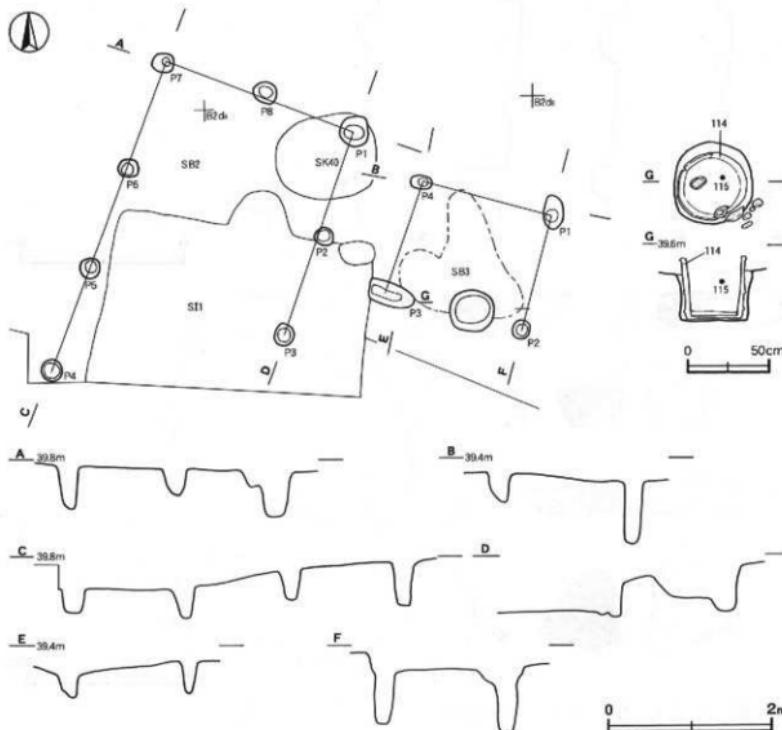
  

番号	岩種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 肖	出土位置	備 考
102	板石	(14.5)	14.3	7.2	(1020)	チャート	1面が平坦に整形されている	P13覆土上面	

第2号掘立柱建物跡 (第62図)

位置 B 2 d4 区に位置し、丘陵裾部に立地している。

重複関係 第1号住居跡、第40号土坑を掘り込んでいる。



第62図 第2・3号掘立柱建物跡実測図

**規模と構造** 柱行3間が確認され、さらに調査区域外に延びており、梁間は2間で、柱行方向をN-7°-Eとする南北棟である。確認された柱行長は3.8mで、梁間長は2.6mであり、柱間寸法は1.4mほどである。

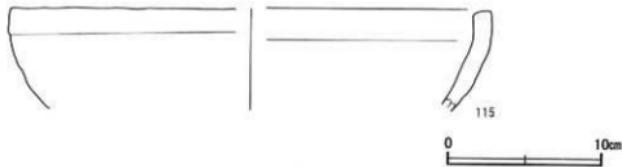
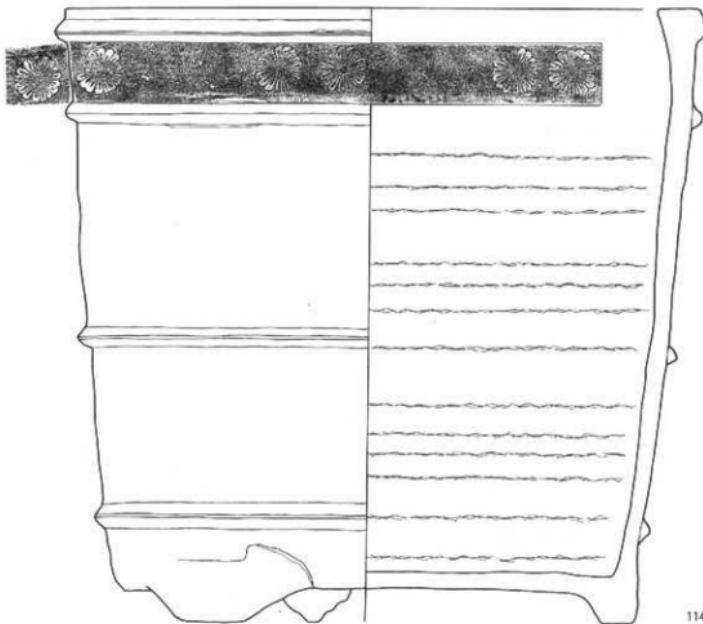
**柱穴** 平面形は円形を呈し、深さは約30~80cmで一律ではない。

**遺物出土状況** 遺物は出土していない。

**所見** 本跡は第1・3号掘立柱建物跡と柱行方向が揃っており、関連性が考えられる。

#### 第3号掘立柱建物跡（第62・63図）

**位置** B 2 dm 区に位置し、丘陵裾部に立地している。



第63図 第3号掘立柱建物跡出土遺物実測図

**規模と構造** 梁行・梁間とも 1 間 (1.7m) のみ確認されている。梁行は調査区域外に延びている可能性がある。内部に径 0.5m、深さ 0.3m の円形の掘り込みがあり、その中に 114 が埋設されている。円形の掘り込みの北側には踏み固めによる硬化面が確認されている。

**柱穴** 平面形は円形を呈し、深さが 30~80cm と一様ではない。

**遺物出土状況** 円形の掘り込みから、114 が正位で埋設された状態で出土している。115 は 114 の覆土中から出土した。

**所見** 建物は、梁行 2 間、梁間が 1 間程度の割と考えられ、その中に使材に使用されたと推測される 114 が埋設されていた。硬化面は廻への出入りに伴う踏み固めと考えられる。時期は、瓦質土器から 16 世紀後半から 17 世紀初頭頃と考えられる。

第 3 号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第63図)

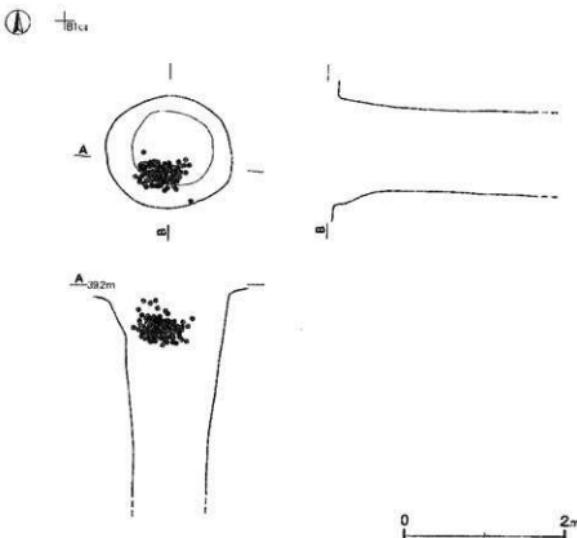
番号	種類	石種	口径	器高	底径	断面	色調	焼成	手 法 の 特 徴	土 士 位 置	備 考
114	瓦質土器	鉢	40.9	39.6	38.0	石英-長石質母岩 小粒-薄層質鉢	明褐色	普通	内側斜面-直縁内側-直縁外側-傾斜 内側及底面は皆手打	SBB内土坑	100% 在地系 内側及底面は手打
115	瓦質土器	鉢	33.0	(6.5)	-	石英-長石-雲母-小砾	褐色	普通	素手打	114内	10%

## (2) 井戸跡

第 1 号井戸跡 (第64・65図)

**位置** B 106 区に位置し、丘陵裾部に立地している。

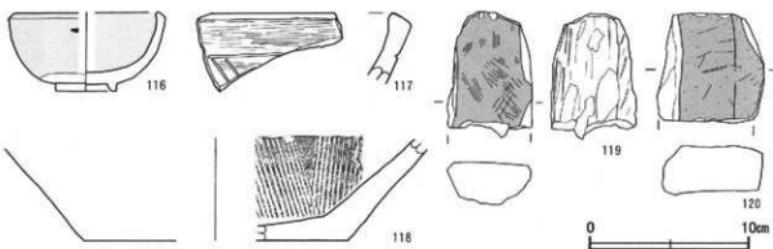
**規模と構造** 径 1.60m ほどの円形で、円筒状に掘りこまれている。深さは 2.50m ほど掘り下がたが、湧水のために下部の調査を断念した。



第64図 第 1 号井戸跡実測図

遺物出土状況 116・117・118・119・120や拳大の自然鍬が覆土上層から多量に出土しており、一括して廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器や遺構の形状から近世と推定される。



第65図 第1号井戸跡出土遺物実測図

第1号井戸跡出土遺物観察表(第65図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	新 土	色 調	焼成	手 法 の 特 標	出土位置	備 考
116	陶器	碗	[9.0]	5.0	3.8	砂粒	灰白・灰	普通	削りだし・革台・瓦軒瀬け・縁け・素面 青切面形・鉛錠付	覆土上層	70% 湾戸・美濃産
117	土師質 土器	火鉢	-	(4.4)	-	石英・長石・赤色 斑子・鵞母・小繊	明赤泥	普通	口縁部内外面縦十字	覆土上層	10%
118	陶器	擂鉢	-	(6.5)	[16.4]	石英・長石	にぬく・黄褐色 暗赤褐色	普通	体外・底盤外面に筋巻き工具による 傷目・全面に磨痕	覆土上層	20% 湾戸・美濃産
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 標	出 口 位 置	備 考		
119	砥石	(7.9)	5.3	2.7	(140)	頁岩	砥面1面、溝状の擦痕あり	覆土上層	PL24		
120	砥石	(6.8)	6.3	3.0	(270)	凝灰質頁岩	砥面1面、溝状の擦痕あり	覆土上層	PL24		

### 3 その他の遺構と遺物

今回の調査では、時期および性格不明の土坑47基とピット群1か所を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。また、遺構に伴わない遺物が出土しており、以下、特色のある遺物を抽出し、実測図を掲載する。

#### (1) 土坑

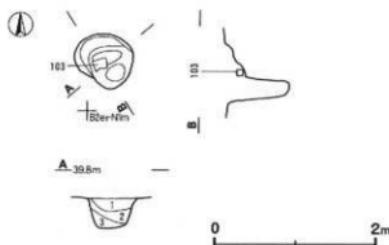
##### 第36号土坑（第66・67図）

位置 B2地形区に位置し、丘陵袖部に立地している。

規模と形状 長径0.74m、短径0.63mの楕円形で、主軸方向はN-33°-Wである。底面は皿状である。

深さは76cmで、壁は垂直に立ち上がっている。

覆土 3層からなり、レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。



第66図 第1号土坑実測図

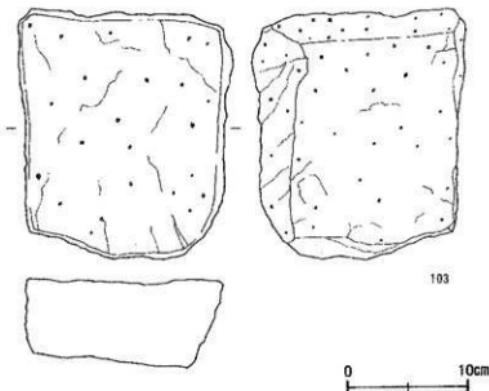
## 土層解説

1 島 色 ローム粒子多量、炭化粒子微少  
 2 島 色 ローム粒子多量、燒土粒子・炭化粒子極少

3 島 色 ローム粒子多量

遺物出土状況 103が出土しており、根石の可能性がある。

所見 土器が出土しておらず、時期を判断することができなかった。



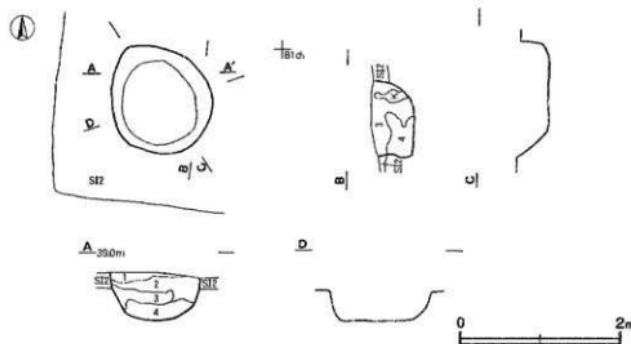
第67図 第36号土坑出土遺物実測図

第36号土坑出土遺物観察表(第67図)

番号	種類	長さ	幅	厚さ	重松	材質	特徴	出土位置	備考
103	根石	20.4	15.9	7.4	3900	花崗岩	4面を平坦に整形している	覆土上層	

第38号土坑 (第68・69図)

位置 B 1 di 区に位置し、丘陵袖部に立地している。



第68図 第38号土坑実測図

**重複関係** 第2号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径1.44m、短径1.25mの楕円形で、長径方向はN-25°-Wである。底面は皿状である。深さは45cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 4層からなる。ロームブロックを多く含む堆積状況から人為堆積と考えられる。

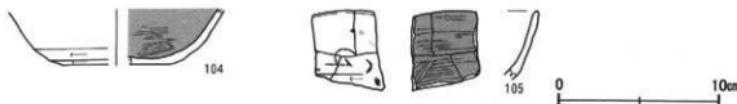
**土器解説**

1 黒褐色 ロームブロック・燒土粒子微量  
2 灰褐色 ロームブロック多量

3 黑褐色 ロームブロック多量、粘土ブロック微量  
4 黑褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック微量

**遺物出土状況** 土師器片8点(坏6, 壺2), 瓦2点が出土している。土器はいずれも覆土中から出土しており、人為堆積時の混入によるものと考えられる。

**所見** 9世紀末葉の第2号住居跡を掘り込んでいることから、時期は9世紀末葉以降と考えられる。



第69図 第38号土坑出土遺物実測図

第38号土坑出土遺物観察表(第69図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
104	土師器	壺	-	(3.9)	[6.6]	石英・長石・赤色粒子・雲母・小砾	褐	普通	内面ヘラミガキ、体邊下端削除へテ削り、底部削除へテ切り	覆土	30% 内面黒色処理
105	土師器	壺	-	(4.2)	-	赤色粒子・雲母・小砾	にじみ・褐	普通	内面ヘラミガキ、体邊下端削除へテ削り	覆土	6% 塗墨 体部 人面か 内面黒色処理 P1.21

(2) ピット群

第1号ピット群(第70・72図)

**位置** 調査区東部のB 1 co 区からB 2 de 区に位置し、丘陵裾部に立地している。

**規模と形状** 南北6 m、東西25mの範囲から33

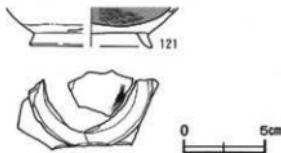
か所のピットを確認した。径10~15cmの円形で、

深さは15~45cmである。遺構図は全体図で示した。

**遺物出土状況** 121がP 1 から出土している。

**所見** 13か所のピットを確認したが配列に規則

性は見られない。時期・性格ともに不明である。

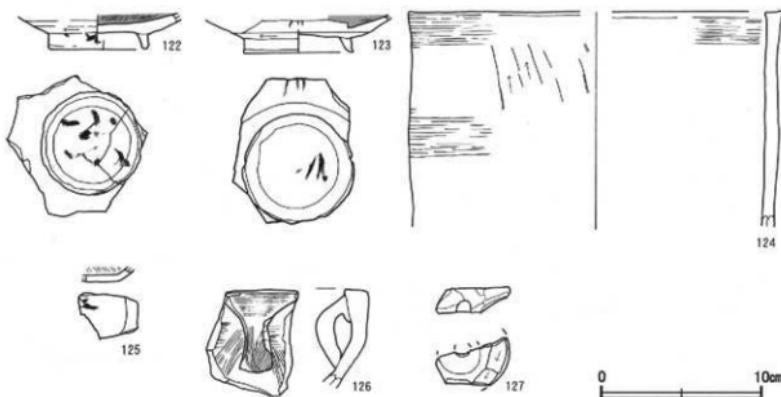


第70図 第1号ピット群出土遺物実測図

第1号ピット群出土遺物観察表(第70図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
121	土師器	高台付壺	-	(2.4)	[7.6]	石英・長石・雲母・小砾	にじみ・褐	普通	内面ヘラミガキ、底部削除へテ削り 高台削除へテ削り、更部内面不整方向 ヘラミガキ	P1 覆土	20% 底部外側墜痕 内面黒色処理

(3) 遺構外出土遺物



第71図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表(第71図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 殊	出土位置	備 考
122	土師器	高台付壺	-	(2.2)	5.8	石英・長石・赤色粒子・藍母・小難	明赤褐色	良好	内面ヘラミガキ、底部下端回転ヘラ削り、高台付壺ヘラ削り、高台付壺ヘラ削り	表土	30% 黒書 底部外側「末」、底部下端から高台部「□」 内面黒色処理 H.22
123	土師器	壺	-	(2.3)	6.5	長石・小難・雲母	に赤い模様	良好	内面ヘラミガキ、底部下端回転ヘラ削り、底部回転ヘラ削り後高台付壺ヘラ削り	表土	30% 黒書 底部外側「矢」、底部外側「矢」、底部内側「矢」、内面黒色処理 H.22
124	土師器	体	[23.3] [33.4]	-	-	石英・長石・小難	に赤い模様	普通	口縁部内外面彫ナデ、底部外側ヘラ削り後彫ナデ、内面彫ナデ	表土	30%
125	土師器	壺	-	(0.9)	-	石英・長石・雲母・滑石	に赤い模様	普通	内面ヘラミガキ、底部回転ヘラ削り	表土	5% 黒書 底部「□」
126	瓦質土器	内耳鍋	-	(6.9)	-	石英・長石・赤色粒子	黒	普通	内外面ナデ、耳部貼り付け	表土	10%

番号	器種	上径	下径	厚さ	重量	材質	特 殊	出土位置	備 考
127	筋縫車	[5.2]	[3.6]	1.5	(20)	粘土	孔径 1.0 cm、側面ヘラ削り	表面探集	

表13 住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) 長さ(m)×幅さ(m)	壁厚 (cm)	床面	内部施設					覆土	出土遺物	時代	備考 経緯(保有→返却)
							壁構	天井	構造(柱・梁)	出入	通				
1	B2d4	N-6° E	方形	3.34 × (2.10)	40~45	平坦	全周	2	—	1	—	1	自然	土器片(灰、陶、瓦合灰 土器), 遺傳器(灰), 土製文具	9世紀末盛 本跡→SK2
2	B1e4	N-11° E	方形	3.56 × 3.42	8~35	平坦	全周	4	—	4	1	1	人為	土器片(灰、陶、瓦合灰 土器), 遺傳器(灰), 土製文具	9世紀末盛 本跡→SK38
4	A1j7	N-5° E	長方形	3.56 × 3.13	15~27	平坦	全周	4	—	—	1	1	自然	土器片(灰、陶、瓦合灰 土器), 遺傳器(灰), 土製文具	9世紀末盛 本跡→SK3
5	A1j5	N-11° E	方形	2.45 × (1.50)	47	平坦	—	—	—	—	1	人為	土器片(灰、陶、瓦), 鐵器片(鐵), 鐵劍頭(鐵), 鐵刀頭(鐵), 鐵矛頭(鐵)	9世紀末盛 本跡→SK3	
6	A1j7	N-9° E	方形	2.74 × (2.10)	30~50	平坦	一部	2	—	—	—	1	人為	土器片(灰、陶、瓦), 鐵器片(鐵)	9世紀末盛 本跡→SK4
7	A1i5	N-6° E	方形	3.08 × 2.92	7~62	平坦	全周	4	—	—	1	自然	土器片(灰、陶、瓦), 鐵劍頭(鐵、銅), 鐵刀頭(鐵), 鐵矛頭(鐵)	9世紀末盛 本跡→SK4	

表14 土坑一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模 長さ(m)×幅さ(m)	深さ (cm)	埋置	土種	覆土	出土遺物	時代	備考 経緯(保有→返却)
1	B2d3	N-0°	円形	0.97 × 0.89	44	外傾	圓狀	人為	土師器片, 遺傳器片		
2	B2e2	N-32° E	舟形	0.78 × 0.48	58	外傾	圓狀	人為			
3	B2e2	N-36° E	橢円形	1.15 × 0.98	35	外傾+緩斜	圓狀	人為	鐵文士器片, 土師器片		
4	B2e1	N-42° W	橢円形	1.46 × 1.20	60	外傾+緩斜	圓狀	人為	—		
5	B1e0	N-41° W	橢円形	0.74 × 0.53	82	垂直	平坦	人為	土師器片		
6	B1d0	N-36° E	橢円形	0.62 × 0.50	52	垂直+外傾	平坦	人為	土師器片		
7	B1a8	N-0°	圓形	0.52 × 0.52	68	垂直	平坦	人為	—		
8	A1j6	N 0°	舟形	1.10 × 0.67	22	外傾	圓狀	人為	—		
10	B2d3	N 65° E	橢円形	0.62 × (0.41)	25	緩斜+外傾	圓狀	—	土師器片	SK34→本跡 →SK10	
12	B1e9	N 87° E	不定形	1.30 × 0.74	16	外傾	平坦	—	土師器片		
17	B1b8	N-19° W	不定形	0.91 × 0.77	17	外傾+緩斜	平坦	—			
18	B2d3	N 65° E	円形	0.81 × (0.56)	18	緩斜	圓狀	—	—	SK34→本跡 →SK1	
19	B1e8	N 9° W	橢円形	0.50 × 0.45	85	垂直	平坦	—	土師器片		
20	B1e8	N-27° W	圓形	1.00 × 0.96	18	外傾	圓狀	—	土師器片		
21	B1d8	N-17° E	橢円形	0.40 × (0.28)	9	緩斜	圓狀	—	—	本跡→SK21	
22	B1e8	N-0°	圓形	0.28 × 0.28	107	垂直	圓狀	—	—		
23	B1e8	N-0°	圓形	0.97 × 0.90	21	緩斜	圓狀	—	土師器片	SK21→本跡	
24	B1e7	N-48° E	圓形	0.41 × 0.40	16	外傾	平坦	—	土師器片	SK25→本跡	
25	B1e7	N-30° W	橢円形	0.95 × 0.63	52	外傾	平坦	—	—	本跡→SK21	
26	B1e7	N 18° W	橢円形	1.05 × 0.64	32	外傾	圓狀	—	—		
27	B1e7	N 0°	橢円形	1.05 × 0.88	18	緩斜	圓狀	—	鐵文士器片		
28	B1e6	N-35° W	円形	0.98 × 0.92	11	緩斜	平坦	—	—		
29	B2d5	N 81° E	橢円形	1.13 × 0.84	48	外傾	圓狀	—	土師器片		
30	B1d7	N-41° W	圓形	1.10 × 1.03	18	外傾+緩斜	圓狀	—			
31	B1d7	N-57° W	橢円形	0.85 × 0.69	14	外傾+緩斜	圓狀	—	—	本跡→SK32	
32	B1d7	N 23° E	舟形	1.17 × 0.78	29	外傾	平坦	—	—	SK31→本跡	
33	B1e6	N-37° E	橢円形	1.08 × 0.87	129	平底	圓狀	—	—		

番号	位置	長径方向	半面形	規 模		深さ (cm)	裏面	前面	層土	出 土 遺 物	時 代	備 考 時期第1-2
				長径幅 (cm)	短径幅 (cm)							
31	B2d5	N 65°-F	長辺円形	0.84	0.69	16	緩斜	圓狀	-	陶文土器片、土師器片	新石器時代	新石器時代
36	B2d6	N-33-W	橢円形	0.74	0.63	76	垂直	圓狀	自然	-		
37	B1e9	N 22°-W	不定形	0.98	0.71	56	緩斜	圓狀	-	-		
38	B1e4	N-25-W	橢円形	1.44	1.25	45	外傾	圓狀	人為	土師器片	SI2-木跡	
40	B2d4	N-38-E	橢円形	1.28	1.12	45	外傾	平坦	人為	土師器片、須恵器片、土師器	9世紀後	木跡-S2
41	B2d2	N-0°	円形	0.65	0.44	36	外傾	圓狀	-	陶文土器片、土師器片		
46	B1e1	N-58-W	橢円形	1.30	0.79	22	外傾+縦斜	平坦	-	-		
47	B1e1	N 46°-W	円形	0.50	0.47	12	外傾	平坦	-	-		
48	B1e4	N-32°-W	橢円形	1.06	0.76	18	外傾	圓狀	-	-		

表15 握立柱建物跡一覧表

番号	位置	断行方向	柱頭數 (軸×輻)	通横(m)	面積(m <sup>2</sup> )	構造	門(柱間) 梁(柱間) (m)	梁(柱間) (m)	柱穴半周 (cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考時期	
1	B1e9	N 5°-E	4×2	9.60	8.28	80.23	側柱	1.0~3.0	1.7~2.0	円形	10~48	陶文土器片、土師器片、鐵石、近畿	
2	B2d4	N 7°-E	(3)×2	3.8	2.6	9.88	側柱	1.3~1.8	1.1	円形	30~80	-	近畿,b
3	B2d4	N-7-E	1×1	1.7	1.7	2.89	側柱	1.7	1.7	円形	25~65	瓦質土器(BK)	近畿,c

表16 井戸跡一覧表

番号	位置	長軸方向	半面形	規 模		面上	出 土 遺 物	時 代	備 考 時期第1-2	
				長軸幅 (cm)	短軸幅 (cm)					
1	B1e6	N-66-W	橢円形	1.58	1.10	(250)	-	土付質土器(BK)、瓦質土器(加太郡)、陶器(須恵器)、石器(石器)	近畿	

## 第4節 まとめ

今回の調査は上加賀出宮後東遺跡全体の一部分にすぎず、遺跡がさらに広がっていることは分布調査の経緯からも明らかである。ここでは、調査で出土した墨書き土器を中心に取り上げ、若干の考察を加えてまとめとしたい。

今回の調査では、9世紀末葉の堅穴住居跡5軒と9世紀末葉から10世紀初頭の堅穴住居跡1軒が確認された。

出土土器に時期差が見られないことから、短期間に集落が營まれ、廃絶されていった小規模な集落と考えられる。確認された遺構件数は少ないが、墨書き土器および墨痕がある土器が多く出土しており、その总数は35点である。その他、施書き土器3点、刻書き土器2点が確認されている。遺構ごとに見てみると、墨書き土器および墨痕がある土器は第1号住居跡から6点、第2号住居跡から9点、第4号住居跡から10点、第6号住居跡から1点、7号住居跡から3点であり、その他の遺構への流れ込み・混入したものと考えられるものは3点、遺構外から3点である。施書き土器は第1号住居跡から1点、第2号住居跡から1点、刻書き土器は第2号住居跡から2点である。

墨書きされた土器の器種は、壺・瓶・高台付皿の供膳具であり、煮炊具である甕には確認されなかった。墨書きの部位は、底部外面に書かれたのは2点であり、その他はすべて体部外面である。使用時に見える場所に書かれており、「見ることを意識している」ということが指摘<sup>1)</sup>されており、当遺跡の墨書き土器もこれに当てはまる。使用者に常に認識させることができ、そのことが目的であったと考えられる。

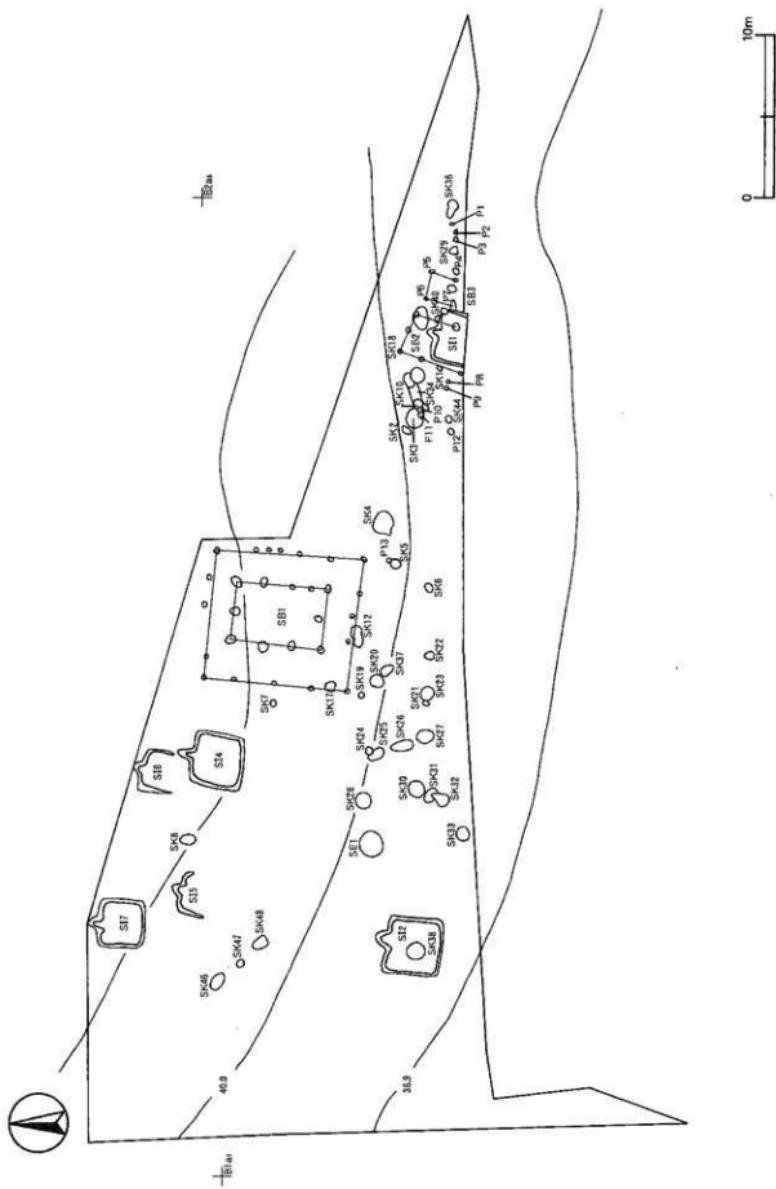
文字の種類であるが、判読が可能なものは「久寶」・「千」・「仟」・「矢」・「峯」・「末」の6種類である。「久」や「寶」の一文字については、破片資料であることから「久寶」の一字である可能性が高い。遺跡の性格を示唆するような文字・語句は見ることができず、その意味を解することができない。

文字資料の出土分布を見ると、6軒の堅穴住居跡中5軒から出土しており、出土していない第5号堅穴住居跡は、出土遺物も少ない。同じ文字が複数の住居跡から出土しており、1軒の住居跡のみから出土する特定の文字は見られない。集落の全城は調査されてないため分布の様相をすべて把握できないが、一集落からの文字資料の絶対量は高いことが推測でき、集落の全城に広がっていた可能性は高い。

堅穴住居跡内での文字資料の出土状況をみると、覆土からの出土が大半であり、床面からの出土はわずかである。また、破片資料がほとんどで接合するのはわずかであり、土器片を観察すると、口縁部内面や底部内面の摩耗が著しい。さらに、墨が薄くなってしまっており、現在までの時間の経過を考慮する必要もあるが、これらの土器は墨書きされてからある程度の期間、日常の食器として使用されていたと考えられる。そして、住居廃絶時に不用になった土器などとともに、廃棄されたものと考えられる。蓋袖部内から出土している墨痕が見られる破片は、何らかの祭祀行為ではなく、使用後に破損した墨書き土器を壊す材質に利用したものと考えられる。

本遺跡は9世紀末～10世紀初頭に突如出現し、短期間で廃絶された集落である。集落が形成された理由を示唆する資料は、今回の調査では確認されなかつたため定かではないが、多量に出土した墨書き土器は、この地域を開拓した集団の標識文字としての固有の文字だったと考えられる。

1) 奈良・平安時代班「茨城県域における文字資料集成2」『研究ノート』10号 茨城県教育財团 2001年6月



第72圖 上加賀田宮後東遺跡構全體圖

# 写 真 図 版

中 山 遺 跡  
福 原 打 越 塚 群  
上 加 賀 田 宮 後 東 遺 跡

# 中山遺跡

PL 1



遺構確認状況

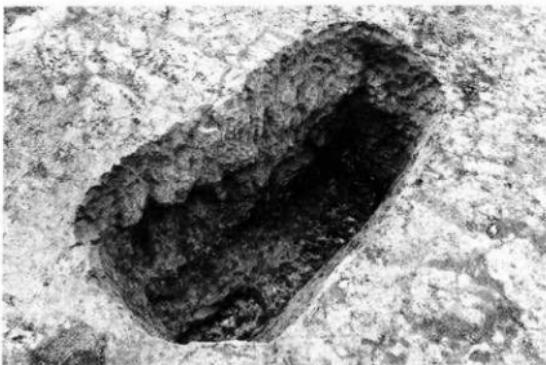


完掘全景（南西側より）

中山遺跡



第1号住居跡  
完掘状況



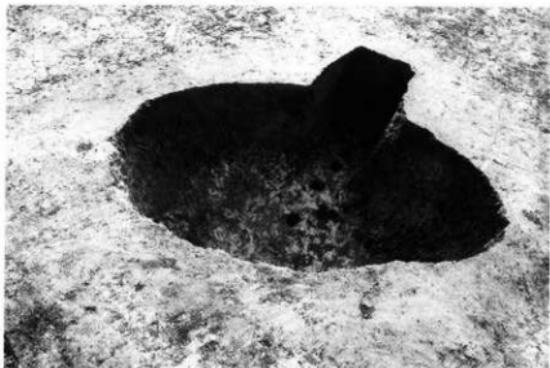
第3号陥し穴  
完掘状況



第4号陥し穴  
完掘状況

中山遺跡

PL 3



## 中山遺跡



SK 1-1



SK 20-2



SK 32-8



造構外-23



造構外-22



SK 32-9



SK 36-20



造構外-25



造構外-27



SK 24-4



SK 28-6



造構外-24



SK 32-13



造構外-29



SK 36-19

第1号住居跡、第20・24・28・32・36号土坑、造構外出土遺物

中山遺跡

PL 5



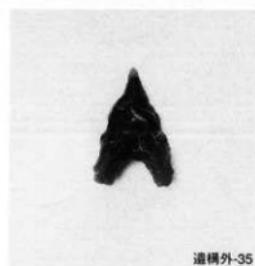
SK 38-21



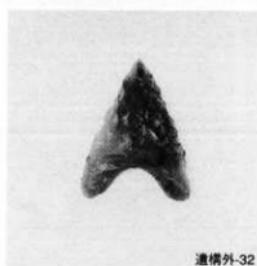
遺構外-33



遺構外-34



遺構外-35



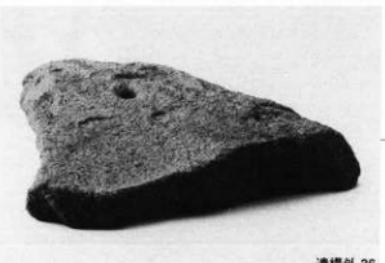
遺構外-32



SK 43-37



SK 34-18



遺構外-36

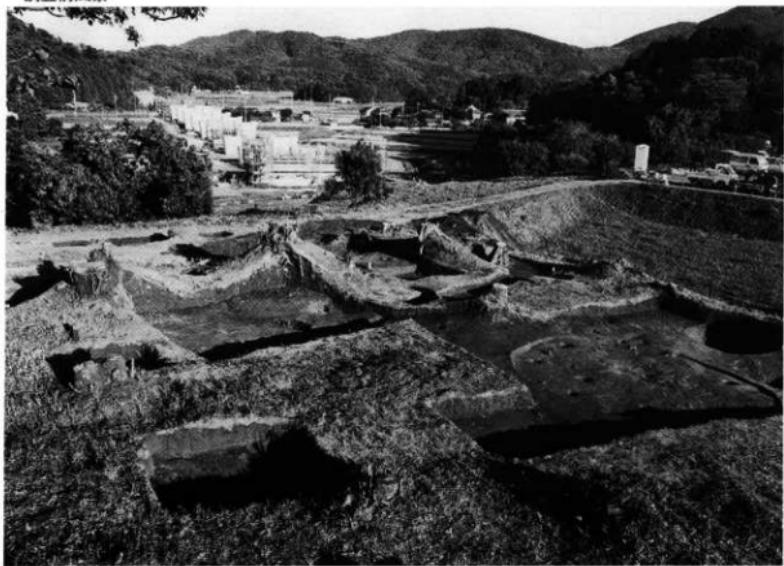


第34・38・43号土坑, 遺構外出土遺物

福原打越塚群



調査前風景



実掘全景（西侧より）

福原打越塚群

PL 7



第1号住居跡  
完掘状況

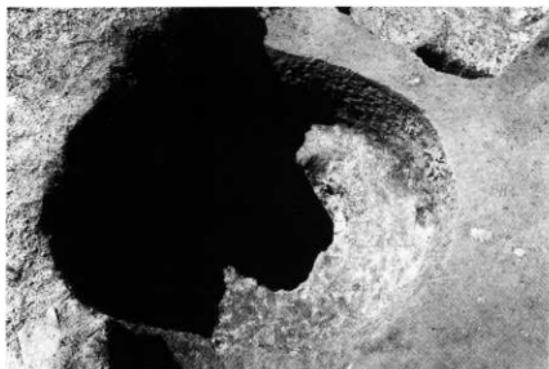


第2号住居跡  
完掘状況



第1号墓塚  
完掘状況

福原打越塚群



福原打越塚群

PL 9



第2号塚  
石組確認状況



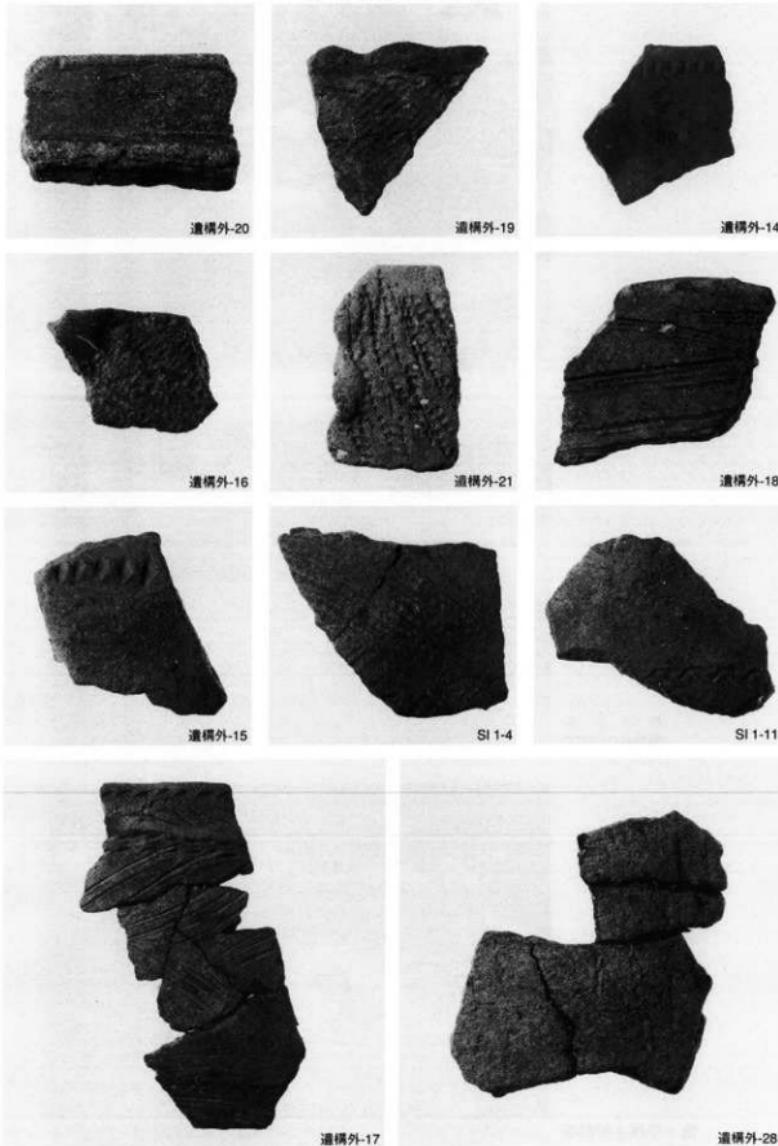
第2号塚  
遺物出土状況



第4号塚土層断面

PL10

福原打越塚群



第1号住居跡、遺構外出土遺物



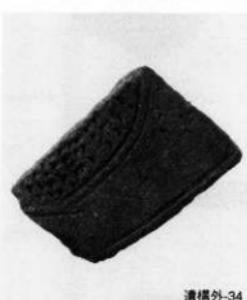
遺構外-27



遺構外-23



SI 1-7



遺構外-34



遺構外-22



SI 1-6



TK 2-40



遺構外-39



遺構外-51



TK 2-41



遺構外-52

第1号住居跡、第2号塚、遺構外出土遺物

## 福原打越塚群



SK 2-13



遺構外-1



遺構外-2



SK 2-44A



SK 2-44B



SK 2-45



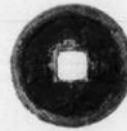
SK 2-46



SK 2-47



SK 2-48



SK 2-49



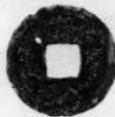
SK 2-50



遺構外-53



遺構外-54



遺構外-55

第2号住居跡、第2号墓塚、遺構外出土遺物

上加賀田宮後東遺跡

PL13

完掘全景  
(西側より)



第1号住居跡  
完掘状況



第1号住居跡  
遺物出土状況

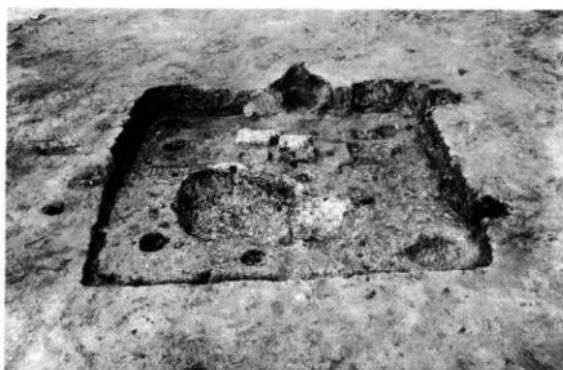


PL14

上加賀田宮後東遺跡



第1号住居跡  
遺物出土状況



第2号住居跡  
完掘状況



第2号住居跡  
竈遺物出土状況

上加賀田宮後東遺跡

PL15



第4号住居跡  
完掘状況

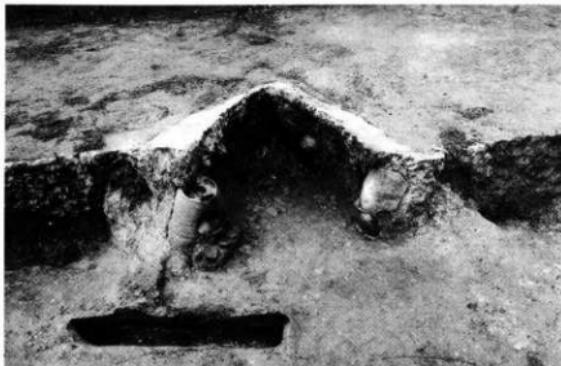


第4号住居跡  
遺物出土状況



第4号住居跡  
遺物出土状況

上加賀田宮後東遺跡



第4号住居跡  
竈袖部補強材出土状況



第5号住居跡  
完掘状況



第5号住居跡  
遺物出土状況

上加賀田宮後東遺跡

PL17



第5号住居跡  
遺物出土状況



第6号住居跡  
遺物出土状況



第6号住居跡  
遺物出土状況

上加賀田宮後東遺跡



第7号住居跡  
電完掘状況



第7号住居跡  
電完掘状況



第7号住居跡  
電遺物出土状況

上加賀田宮後東遺跡

PL19



第1号掘立柱建物跡  
完 挖 状 況

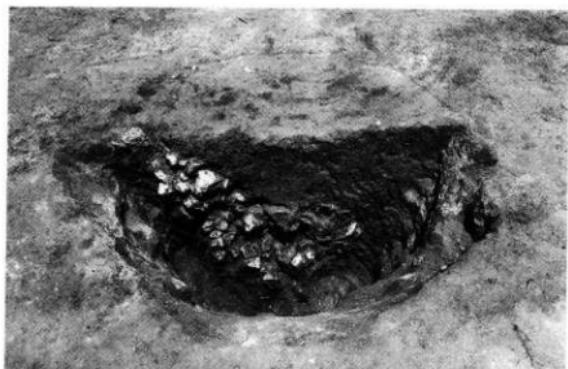


第2号掘立柱建物跡  
完 挖 状 況



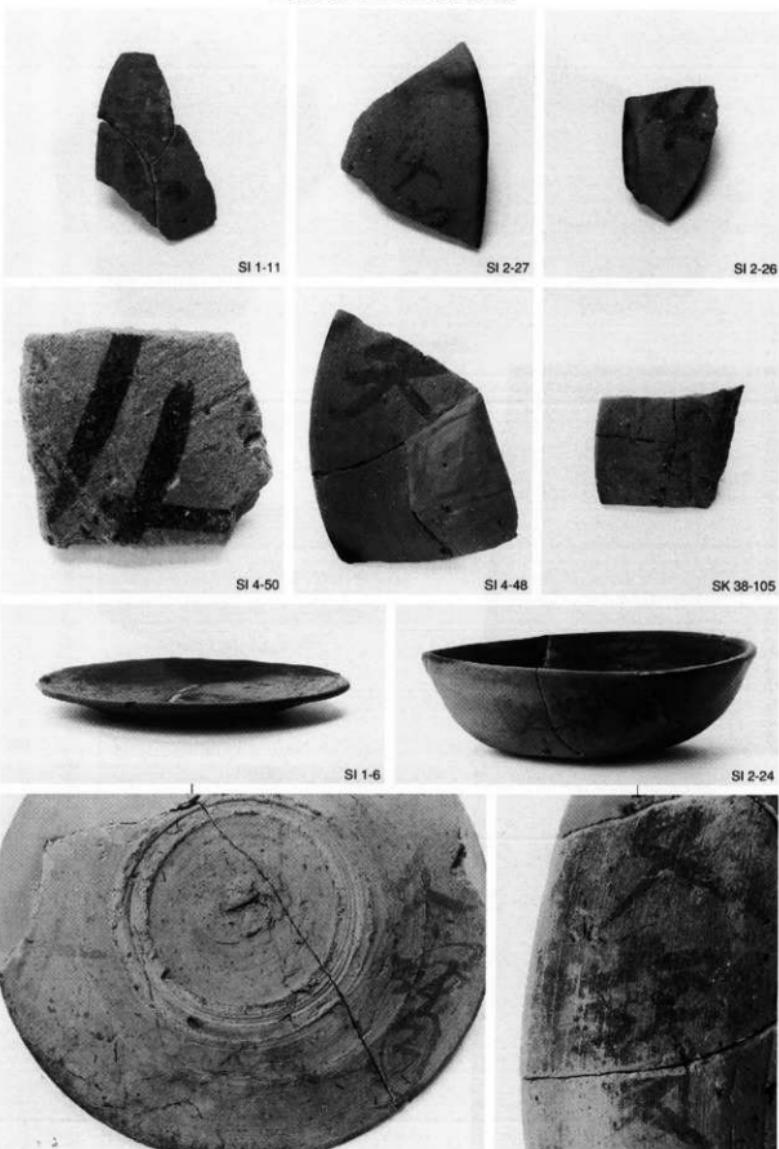
第3号掘立柱建物跡  
鉢 埋 設 状 況

上 加賀田宮 後 東 遺跡



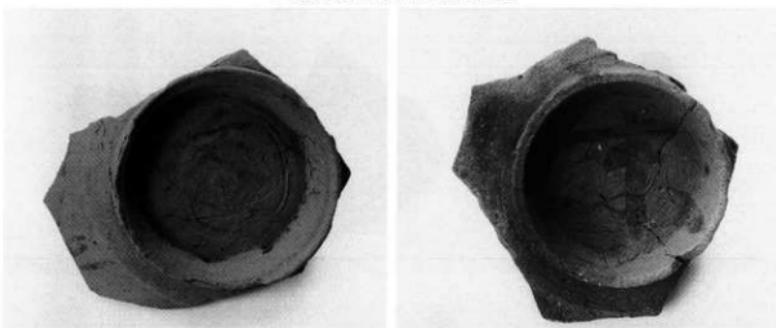
上 加賀田宮後東遺跡

PL21



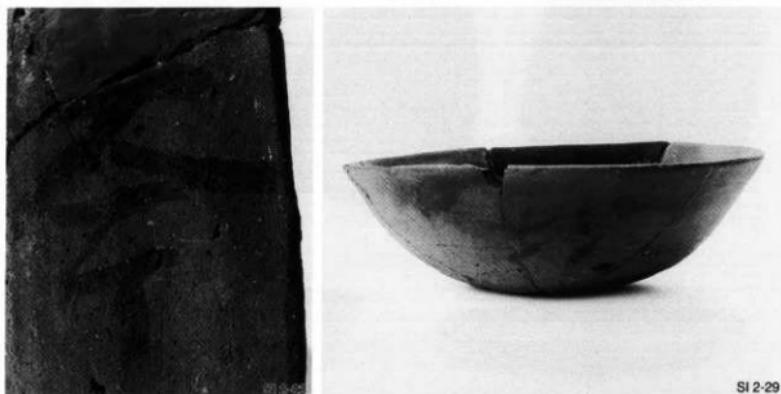
第1・2・4・6号住居跡、第38号土坑出土遺物

## 上加賀田宮後東遺跡



遺構外-123

遺構外-122



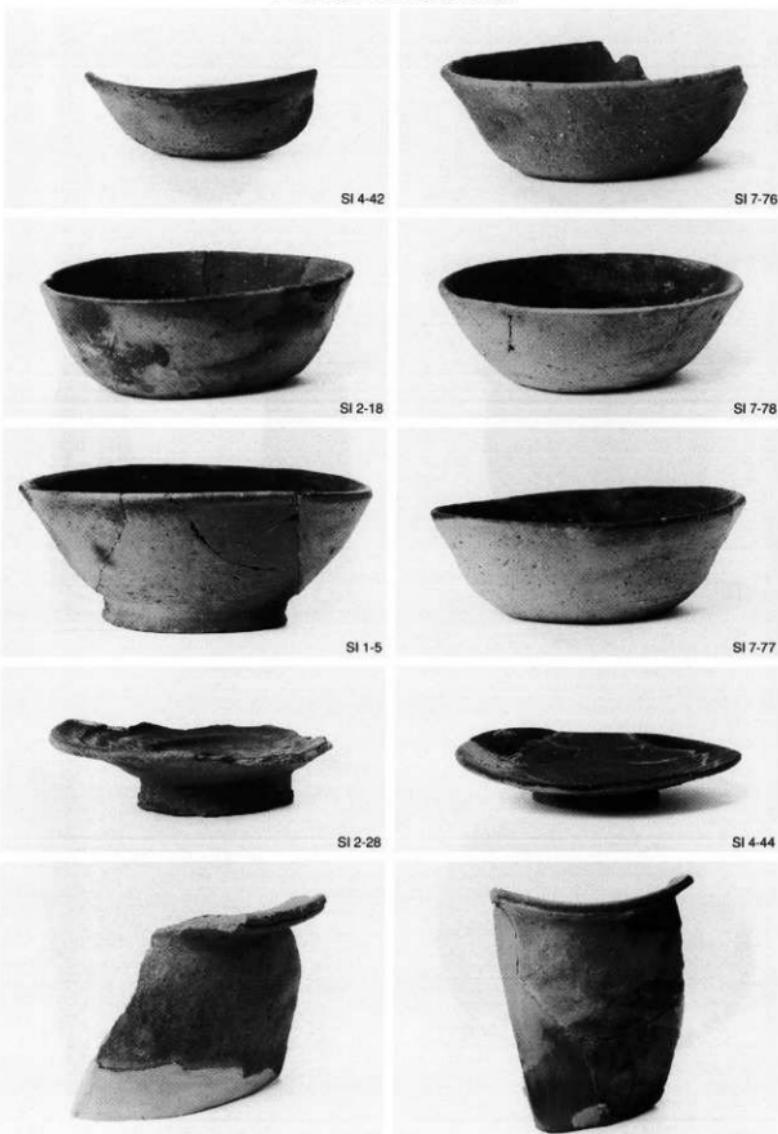
SI 2-29



第2号住居跡, 遺構外出土遺物

上 加賀田宮後東遺跡

PL23



第1・2・4・7号住居跡、第40号土坑出土遺物

## 上加賀田宮後東遺跡



SE 1-120



SE 1-119



SI 4-59



SI 7-95



SI 7-96



SB 3-114

第4・7号住居跡、第3号振立柱建物跡、第1号井戸跡出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第227集

中山遺跡  
福原打越塚群  
上加賀田宮後東遺跡

平成16(2004)年3月24日印刷

平成16(2004)年3月26日発行

発行 財團法人 茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6587

印刷 山三印刷株式会社  
〒311-4153 水戸市河和町4433の33  
TEL 029-252-8481